

立命館大学 京都キャンパスマスタープラン 2015

KYOTO Campus Master Plan 2015

| Ver.1

Beyond Borders

京都キャンパスマスタープラン 2015 Ver.1

立命館大学

ご挨拶



学校法人立命館 理事長 長田 豊臣



学校法人立命館 総長 吉田 美喜夫

立命館は、近代日本の代表的な政治家であった西園寺公望が1869年に、20歳の若さで私塾「立命館」を創設したことに始まります。西園寺の精神を引き継ぎ、1900年、中川小十郎が京都法政学校を開き、「自由と清新」、つまり「自由にして進取の気風に富んだ学び舎の創造」を目指しました。以来、教育の内容とあり方をたゆまず検証し改革を積み重ね、常に社会の課題に向き合い、その解決に貢献できる学問研究を推進してまいりました。

2006年には、「立命館憲章」を制定し、2011年には立命館憲章を踏まえ、2020年に向けた立命館のあるべき姿として「Creating a Future Beyond Borders 自分を超越る、未来をつくる。」学園ビジョンR2020を掲げました。そこでは、①多様なコミュニティにおける主体的な学びの展開、②人類・自然・社会に貢献する立命館らしい研究大学への挑戦、③学ぶことの喜びを実現できる学園づくりを行動指針としています。

これらのビジョンを実現するために、2011年度から2015年度までの学園の中期計画を策定、立命館大学の基本計画としては、①総合的人間力の育成、②グローバル研究大学へ、③教育・研究・学生生活を支えるキャンパスづくりを掲げています。これらを基本に、立命館は、グローバル・アジア・コミュニティに貢献する多文化協働人材の育成を目指してまいります。そのためには、「学びを創る。コモンズで学ぶ」というコンセプトを具体化するにふさわしい「多様性のある環境」や「主体的な学びの場の創出」が不可欠です。

立命館は、北海道・滋賀・京都・大阪・大分にキャンパスを有し、2大学、4附属中学校・高等学校、1附属小学校に、学生・生徒・児童数約5万人を擁する総合学園となりました。なかでも立命館大学は、2015年4月に大阪いばらきキャンパスを開設し、これまでの京都キャンパス（衣笠・朱雀）、びわこ・くさつキャンパスと合わせて3府県に跨るキャンパスを擁する複数拠点型総合大学として新たな歩みを開始しました。

立命館大学では、教育改革とキャンパス整備を総合的に進めるキャンパス創造に取り組んでいます。教育改革実現のための基盤となるキャンパスが果たす役割は極めて重要であり、長きに渡るこれまでの取り組みを継承しながら、さらに水準の高い教育研究環境を計画的に実現していくことを目指します。そのために、このたび京都キャンパスとびわこ・くさつキャンパス、それぞれの「キャンパスマスタープラン 2015Ver. 1」をまとめました。

それぞれのキャンパスマスタープランは、主に次のような方針を提示しています。

(1) 「教育・研究、学生生活を支えるキャンパスづくり」の実現

普遍的な理念と時代の要請とともに変化する教学展開に対応し、多様性のある環境や自主的な学びの場の創出に向けたキャンパスづくりを目指します。また、学生・教職員が多く時間を過ごすキャンパスとして、アメニティや安全・安心、健康、環境保全についても配慮しながら、キャンパスが魅力的で豊かな空間になるための中長期的に目指すべき方向性を示しています。

(2) 「豊かなキャンパス空間」の実現に向けた継続的取り組み

立命館では様々な教学展開に合わせて必要な質的・量的整備を進めてまいりました。特に、衣笠キャンパスにおいては狭隘化が進んでおり、その改善が強く求められています。また、広大な敷地を有するびわこ・くさつキャンパスにおいても郊外型キャンパスとして快適に滞在できるキャンパス環境の質の向上が不可欠となっています。これらは単に個々の施設の改修や建物の新・増設など、部分的なキャンパス整備だけでは構築し得ません。高い水準を見据えた目標とファシリティマネジメントの観点を含め、継続的かつ計画的に取り組む必要性を示しています。

(3) 大学構成員はじめ関係者間のキャンパス計画を進める手段としての活用

キャンパスにおける法的諸条件や前提となる課題の提示、専門的視点からの方針、各種ファシリティデータなど、キャンパス計画を進めるうえで有効な手段(ツール)として活用可能な情報を示しています。

今次キャンパスマスタープランは、専門的視点から配慮すべき視点や普遍的な条件を提示していますが、2015Ver. 1 と掲げたことでもお分かりいただけるように、将来的な大学展開や教学改革などの変更に柔軟に対応して見直ししながら継続されるものです。

こうした「キャンパスマスタープラン 2015ver. 1」の役割を踏まえつつ、大学展開や教学改革の実現を支え、水準の高い、サステイナブルなキャンパスの実現に向けた取り組みを継続してまいります。

はじめに

京都キャンパスマスタープラン 2015Ver.1 の策定背景と位置づけ

将来にわたり良好でサステイナブル（持続可能）なキャンパスを目指し、中長期的な視点からの総合整備計画としてのキャンパスマスタープランを策定するために、2013年度に京都キャンパス将来構想検討委員会の下に「2020年までの京都キャンパスプラン策定部会」を設置し検討を行い、2014年度にはその進捗として「京都キャンパスマスタープラン 2014（4月暫定版）」を常任理事会（2014年7月2日）に報告した。引き続き2014年度においても京都キャンパス将来構想検討委員会、策定部会や作業グループ等での検討を進め、キャンパスマスタープランに反映するとともに、暫定版の段階で未掲載であった項目についての加筆・修正や、各学部・研究科、機構等へのヒアリング及び全教職員を対象にした意見募集を行い、「京都キャンパスマスタープラン 2015 Ver. 1」の取りまとめに至った。

京都キャンパスマスタープラン 2015 Ver. 1では、キャンパスの現状と課題を共有し、15～30年程度をスパンとした長期的な整備方針としてのフレームワークプランを設定した。また、フレームワークプランを踏まえた当面5年程度の具体的な整備計画としてのアクションプランの検討における配慮事項をあげるとともに、フレームワークプランとアクションプランをつなぐリーディングプロジェクトの設定を行った。

キャンパスマスタープランは、その上位に位置づけられるアカデミック・プラン（R2020計画等の学園・大学の中長期計画や経営戦略）をキャンパス整備の面から支えるものであると同時に、15年～30年程度の長期的な視野に立ったキャンパス整備の指針と当面の課題等を示したものであり、R2020後半期計画の策定をはじめとするアカデミック・プランの変更など与条件に変化があった場合には、適宜更新していく性格のものである。

一方、京都キャンパス将来構想検討委員会や各機関へのヒアリングにおいて、中長期的な指針の重要性は理解しつつも、それが当面する課題の解決にどのように結びつくのかについてのわかりやすい説明の必要性についての指摘もあったが、キャンパスマスタープランは、それ自体が当面する課題解決の具体的な方法を示すものではなく、当面するキャンパス整備を進める際の指針として活用すべきものであり、これらは相互に関連している。

この点を踏まえた上で、常任理事会（2015年9月30日時点）として確認しておくべき当面するキャンパス整備上の重要課題について以下に整理する。まず、京都・BKCの両キャンパスに共通する課題として、1）今後のアカデミック・プランへの対応及び教学条件の確保、2）建物の築年数や耐震性能を踏まえた改修計画の策定、3）主要ターミナルからの交通アクセス改善及びキャンパス内の交通計画等が重要となる。京都キャンパス（衣笠、朱雀）においては、1）存心館・清心館など学部基本施設の改修計画の具体化、2）学生会館やコモンズなど学生関連施設の整備、3）衣笠キャンパスにおける駐輪場確保や食堂施設の改善など、狭隘化解消とともにキャンパス・アメニティや安心・安全の向上、4）業務の集中化・合理化等に対応した施設条件の確保等が重要となる。

この間の本学における学生・教職員が参画したキャンパス整備ならびにキャンパスマスタープランの策定は、私立大学の中ではきわめて先進的な事例として全国でも注目を集めており、今後、魅力あふれるキャンパスづくりに取り組んでいることを社会にも積極的に発信していくことが重要である。社会への情報発信や他大学等への資料提供とも関わって大学ホームページへの掲載や冊子、概要版等により順次公開して行く予定である。

今後の当面するキャンパス整備課題（アクションプラン）の具体化にあたっては、中長期的な総合的整備計画の指針としての京都キャンパスマスタープラン2015 Ver.1を指針として活用していくことが重要である。その際、教職員や学生といった構成員からも広く意見を募る必要があることから、その公開については、教職員に向けては教職員ポータルでの資料データのダウンロード（会議資料・書式ダウンロード→総合企画部主管会議資料→各キャンパス将来構想検討委員会）を可能とする。また、キャンパスの現状や学生・教職員のニーズの把握を、キャンパス計画室を中心に継続しながら、学生・教職員が参画したキャンパス創り、キャンパス計画を推進していく。

（2015年9月30日（水）第18回常任理事会報告より）

京都キャンパスマスタープラン 2015 Ver.1 の目次

chapter 1 :	立命館大学キャンパスマスタープラン策定に向けて	010
	1.1 キャンパスマスタープランの理念	011
	1.2 キャンパスマスタープランの策定と運用	012
	1.3 キャンパスマスタープランの構成	013
	1.4 キャンパスマスタープランの達成方策	014
	1.4.1 フレームワークプランの設定	014
	1.4.2 アクションプランの設定	015
	1.4.3 リーディングプロジェクトの設定	015
chapter 2 :	立命館大学キャンパス整備の基本目標	016
	2.1 キャンパスマスタープランの位置付けと役割	017
	2.2 立命館学園の概要	018
	2.3 キャンパス整備の空間コンセプト	022
	2.4 キャンパスマスタープランの基本方針	023
chapter 3 :	京都キャンパスの現状と課題	026
	3.1 京都キャンパスの現状	027
	3.2 これまでのキャンパス整備の取り組み	040
	3.3 京都キャンパスの現状と課題	044
chapter 4 :	京都キャンパスの空間コンセプト	048
	4.1 衣笠キャンパスの空間コンセプト	049
	4.2 空間コンセプトに基づく基本的な考え方	050
	4.3 衣笠キャンパス空間構成の概要	051

chapter 5 :	部門別課題の把握とフレームワークプランの検討	052
	衣笠キャンパス（西園寺記念館、究論館、アカデミア立命21、 歴史都市防災研究所などその他キャンパス周辺施設を含む）	
	5.1 ゾーニング・建物配置	054
	5.2 交通	056
	5.3 パブリックスペース	060
	5.4 キャンパスデザイン	068
	5.5 緑地	072
	5.6 安全・安心	076
	5.7 環境配慮	080
chapter 6 :	計画の実現に向けた検討と方策	082
	6.1 衣笠キャンパスの検討状況	083
	6.2 朱雀キャンパスの検討状況	085
	6.3 アクションプランの今後の進め方と配慮事項	086
	6.4 リーディングプロジェクト（重点検討課題）	088
chapter 7 :	キャンパス整備におけるファシリティマネジメント	090
	7.1 ファシリティマネジメントの必要性	091
	7.2 既存施設の考え方	092
	7.3 キャンパス整備の推進体制	093
chapter 8 :	これまでの検討の流れと取り組み	094
	8.1 2011年度までの検討内容	095
	8.2 2013年度までの検討内容	096
	8.3 2014年度の検討内容	097

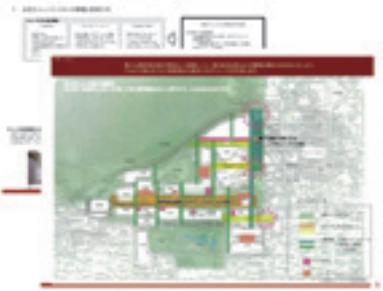
京都キャンパスマスタープラン 2015 Ver.1 の構成

立命館大学のキャンパスマスタープランは「フレームワークプラン」、「アクションプラン」、「リーディングプロジェクト」の3つを骨格として検討を進めることとする。検討作業を進めるにつれ、詳細な構成は随時更新を行う。

京都キャンパス整備の全体構成図

キャンパス整備方針

キャンパス計画（2011）の整備方針



- 中心の整備方針
 - ・見通しがよくわかりやすい空間構成
 - ・屋外の居場所づくり
 - ・衣笠山との緑の連続性
- 2011年度時点の検討状況
 - ・未耐震建物は今後解体する →対象建物：学生会館、現図書館
 - ・その他将来解体が計画されている建物 →学而館 [跡地利用の検討状況]
 - 学生会館：新棟を建設（用途は未定・要検討）
 - 現図書館：広場化（地下活用は検討が必要）
 - 学而館：広場化（解体時期、地下活用は未検討）
- 正門周辺の整備方針
 - ・エントランスらしい空間整備
 - ・歩行者が安心安全に歩ける動線整備
 - ・移動によるリフレッシュ

発展

京都キャンパスの 目指すキャンパス像・コンセプト

- ① 京都・衣笠キャンパス周辺の歴史・文化的コンテキストを踏まえたキャンパス計画
- ② キャンパスモールとグリーンプロムナードの主軸ときぬかけの道を活かした基本骨格
- ③ 個の集合体としての力を発揮し、地域にも開かれたキャンパスづくり

キャンパス整備の空間的コンセプト (全キャンパス共通)

- ① 多様なコミュニティ形成を支える空間整備
- ② 優れた学生・研究者を育成する国際標準の教育・研究・文化・スポーツ環境整備
- ③ 高いQOLが支える優れたアメニティや自然環境、エコロジー、防災への配慮
- ④ 国内外・地域への発信・貢献の場の整備とシステムの構築
- ⑤ 歴史・文化的コンテキストを踏まえたキャンパス計画

具体的な検討
キャンパス整備を進める為、具体的な方針の検討作業の開始

リーディングプロジェクト — 面的整備課題 —

キャンパス計画（2011）をベースにした重点検討課題

- キャンパスモール（仮称）の創造
- グリーンプロムナード／MLA軸（仮称）の形成

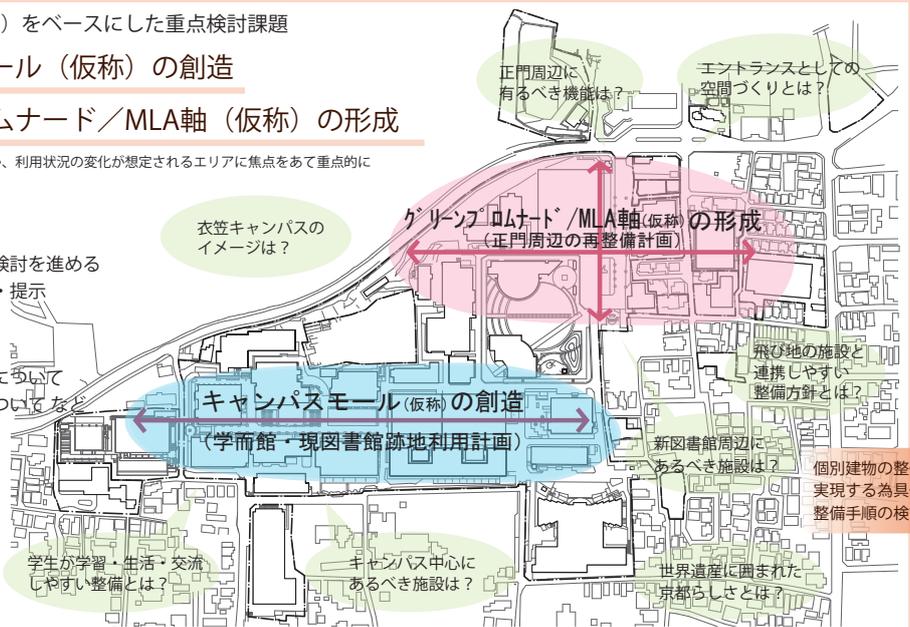
※新棟建設、現図書館解体に伴い、利用状況の変化が想定されるエリアに焦点をあて重点的に検討課題の整理を行う

▶ 実現に向けての作業

- 関連条件の整理を行う
- 専門的視点から具体的検討を進める
- 整備の優先順位を整理・提示
- 検討案を提示

▶ 同時並行の検討課題

- ・教学・研究施設の配置について
- ・課外活動施設の配置についてなど



衣笠キャンパスのイメージは？

正門周辺に有るべき機能は？

エントランスとしての空間づくりとは？

グリーンプロムナード／MLA軸（仮称）の形成（正門周辺の再整備計画）

飛び地の施設と連携しやすい整備方針とは？

個別建物の整備を実現する為の具体的な整備手順の検討

新図書館周辺にあるべき施設は？

学生が学習・生活・交流しやすい整備とは？

キャンパス中心にあるべき施設は？

世界遺産に囲まれた京都らしさとは？

※上記名称は、目指すキャンパス像を検討して行く中で決定する。MLAとは、一般に「MLA連携」としてミュージアム・ライヴ・リ・アークの文化的情報資源などの連携を示す用語として広く普及・使用されている。リーディングプロジェクト設定においては、大学としてのミュージアム・ライヴ・リ・アーク機能の円滑な連携について検討する目的で引用したものであり、設定エリアにMLA機能を全て集約することを検討したり、その他の機能を排除するものではない。

踏まえるべき事項・前提条件

アカデミック
プラン

- ・立命館憲章
- ・R2020

キャンパス
整備基本条件

■ 経営戦略

- ・コスト管理
- ・運用
- ・収入、財源確保
- ・学生・研究者・教員の確保

■ 建築の専門的検討

- ・将来の床面積、建築面積の設定
- ・法規関連、行政対応（建築基準法、条例、開発許可など）
- ・環境配慮
- ・経済性、施工性（設計工期・建設工期・メンテナンス）

京都キャンパスマスタープラン —目指すキャンパス像の実現に向けて—

キャンパスの現状把握

- ・学生/教職員数（ジェンダー比率）
- ・施設利用率
- ・ゾーニング
- ・交通
- ・エネルギー
- ・安全・安心
- ・緑地
- ・デザインガイドライン
- ・パブリックスペース
- ・QOL など

ニーズの把握

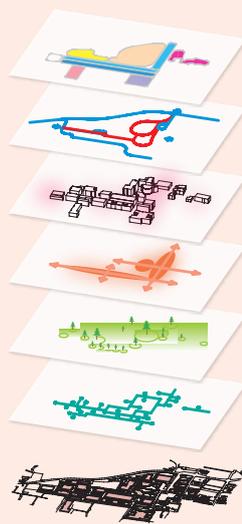
- ・ゾーニング
- ・交通
- ・エネルギー
- ・安全・安心
- ・緑地
- ・デザインガイドライン
- ・パブリックスペース
- ・QOL など

評価基準の設定

- ・全体計画との整合性
- ・持続可能性
- ・実現可能性
- ・コスト管理
- ・省エネ/省資源/省コスト

フレームワークプランの検討（整備方針の設定） — 線的・点的整備課題 —

2016~2045年までの中・長期的な検討課題
CMPにて方針を示し、15~30年スパンで検討を継続



部門別課題が多層レイヤーで構成されているイメージ図

1.ゾーニング・建物配置の方針

- ①キャンパスの特性を活かしたゾーニング計画
- ②屋外のパブリックスペースによるキャンパス全体の緩やかな連繋
- ③建物ボリュームの再配置を考慮した土地の有効活用

2.交通（人の流れ・車の流れ）の方針

- ①キャンパスゲートはゲート毎の位置づけに応じた空間づくりを検討
- ②キャンパスモール周辺は歩行者が安全・安心に移動・活動できる主要動線を整備する
- ③キャンパス外周部や建物間の細かな通路は補助動線として位置づけ整備する
- ④車両の主要なアクセス動線はキャンパス北側「きぬかけの路」からとする。
- ⑤歩行者、自転車・バイク利用者の主要なアクセス動線はキャンパス東、南側からとし、利便性に配慮する。

3.パブリックスペースの方針

- （commons・居場所・オープンスペースなど）
- ①キャンパスの骨格を活かす
 - ②空間的な序列化を図る
 - ③学びや活動・交流、衣笠らしさが見える空間づくり

4.キャンパスデザインの検討項目

- ①空間の質、②建物外観デザイン
- ③屋根・庇デザイン、④建物高さ・壁面線、建物ボリューム
- ⑤サイン計画、⑥ランドスケープデザイン
- ⑦眺望・景観・借景

5.緑地の方針

- ①衣笠山への緑の連続性の確保
- ②京都の気候・環境に適した植栽計画
- ③賑わいと潤いある緑地空間の提供
- ④適切な維持管理 ……安全・安心、環境配慮 など

キャンパス全体の整備を実現する為具体的な条件を提示

アクションプランの検討（整備方針の設定） — 個別整備課題 —

2016~2020年までの短期重点検討課題
アカデミックプランの検討と関係のある課題

<衣笠キャンパス>

- 政策科学部大阪いばらきキャンパス展開後の洋洋館の活用計画
- 正門周辺の再整備構想
- キャンパス内のゆとりの空間創出（キャンパスモールの創出）
- 現行図書館解体後のスペース 学術館の活用
- 学生会館の将来構想
- 教学施設にかかわる将来構想
- 既存学部基本施設（存心館、清心館）改修計画

<朱雀キャンパス>

- 経営管理研究科大阪いばらきキャンパス展開後の中川会館の活用計画

	交通	QOL	パブリック
A案	○	○	○
B案	○	○	△
C案	△	△	○
現状	×	△	△

専門的視点により検討
・施設のボリューム検討（床面積、配置）
・オープンスペースの配置計画 など

具体的検討

意見集約

CMPにて基本方針を示し、5年程度のスパンで検討を継続



chapter 1

立命館大学 キャンパスマスタープラン 策定に向けて

- 1.1 キャンパスマスタープランの理念
 - 1.1.1 キャンパスマスタープランの運用指針
- 1.2 キャンパスマスタープランの策定と運用
 - 1.2.1 キャンパスマスタープランの策定プロセス
 - 1.2.2 キャンパスマスタープランの運用プロセス
- 1.3 キャンパスマスタープランの構成
- 1.4 キャンパスマスタープランの達成方策
 - 1.4.1 フレームワークプランの設定
 - 1.4.2 アクションプランの設定
 - 1.4.3 リーディングプロジェクトの設定

chapter 1 では、「立命館憲章」や「R2020」などのアカデミックプランを支えるキャンパスマスタープランとしての理念や役割について確認する。

また、立命館大学におけるキャンパスマスタープランの策定までの検討の流れやキャンパス整備の目標達成までの方策などについて共有する。

1.1 キャンパスマスタープランの理念

立命館憲章に謳われている私立総合学園である教育・研究機関として世界と日本の平和的・民主的・持続的発展に貢献するため、その活動フィールドとして世界に誇れるキャンパスを創造することを目指したキャンパスマスタープランを策定する。

1.1.1

キャンパスマスタープランの運用指針

キャンパスマスタープランは、アカデミックプランを支援、中長期的な視点で良好なキャンパス環境を実現するために、キャンパス計画のビジョンやフレームワークを定めるものであり、具体的なアクションプラン策定の際の指針として運用する。なお、アカデミックプランや経営戦略等の時代に応じた変化に対応する為、キャンパスマスタープランは定期的（5年程度）に更新を行いながら継承されるものである。（2014年3月20日、第7回京都キャンパス将来構想検討委員会資料「キャンパスマスタープラン策定にあたっての確認事項」より）

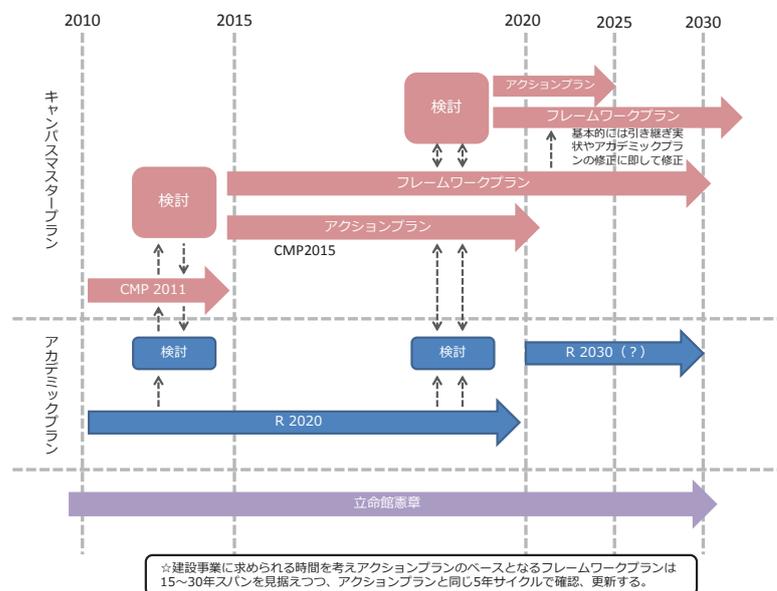


図 1-1 キャンパスマスタープラン（CMP）の時間軸の流れイメージ

【キャンパスマスタープランの構成】

フレームワークプラン：中長期的（15～30年後）なキャンパス像を想定した
ゾーニングや交通計画などに関するビジョン

アクションプラン：短期的（5年程度）期間を想定した施設整備の実行計画

1.2 キャンパスマスタープランの策定と運用

1.2.1 キャンパスマスタープラン の策定プロセス

良好なキャンパス環境・空間を創造するために、基本方針の策定、部門別の整備方針の策定の各段階において合意形成を図りながら、最終的に大学として意思決定されたキャンパスマスタープランとして策定する。

キャンパスマスタープランをもとに実現に向けた取り組みを進めるためには、キャンパスの整備方針や活用方針を策定することが重要となる。

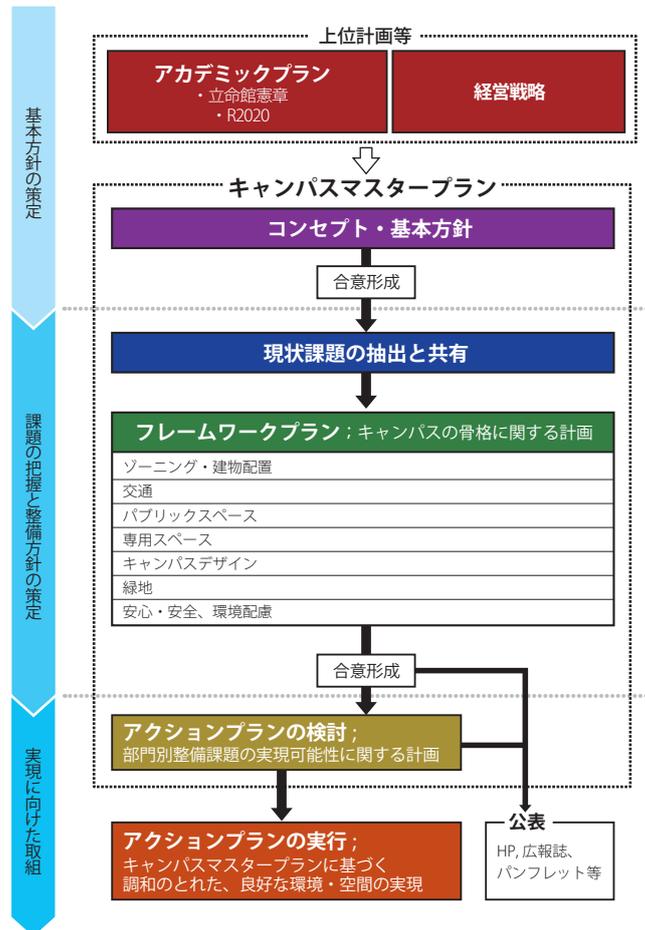


図1-2 キャンパスマスタープランの策定プロセスイメージ

1.2.2 キャンパスマスタープラン の運用プロセス

キャンパスマスタープランの運用においては、図1-3のような運用プロセス（PDCAサイクル）を踏まえることで、将来的なアカデミックプランや経営方針の変更などにも対応しながら、更新を前提とした継続的な運用が可能となる。

また各段階において、関係する諸機関の合意形成を図りつつ、学園として意思決定を行うことが重要となる。



図1-3 キャンパスマスタープラン（CMP）の運用プロセスイメージ

1.3 キャンパスマスタープランの構成

立命館大学のキャンパスマスタープランは「フレームワークプラン」、「アクションプランの検討」、「リーディングプロジェクト」の3つを骨格として検討を進める。ここでは、キャンパスマスタープランの構成を示す。

第1章ではキャンパスマスタープラン策定にあたり、キャンパスマスタープランの理念や役割、達成方策などを確認し、第2章でキャンパス整備の空間コンセプトやマスタープランの基本方針を示し、立命館大学のキャンパス整備の基本目標として策定する。そして、キャンパス毎の特徴に応じた方針の策定を進めるため、第3章でキャンパスにおける現状の把握と課題を抽出し、第4章では目指すべきキャンパス像を共有するため京都キャンパスの空間コンセプトを設定する。さらに、部門別の中長期的な整備方針として第5章でフレームワークプランを示す。第6章ではマスタープランでの検討を今後の具体的な整備につなげていくため、短期的な整備方針としてのアクションプランの検討課題を述べるとともに、フレームワークプランとアクションプランをつなぎ、目指すべきキャンパス整備を実現するためのリーディングプロジェクトについて確認する。また、第7章でキャンパス整備におけるファシリティマネジメントの必要性について触れる。最後に、キャンパスマスタープラン策定におけるこれまでの検討経過と取り組みについて第8章でまとめた。

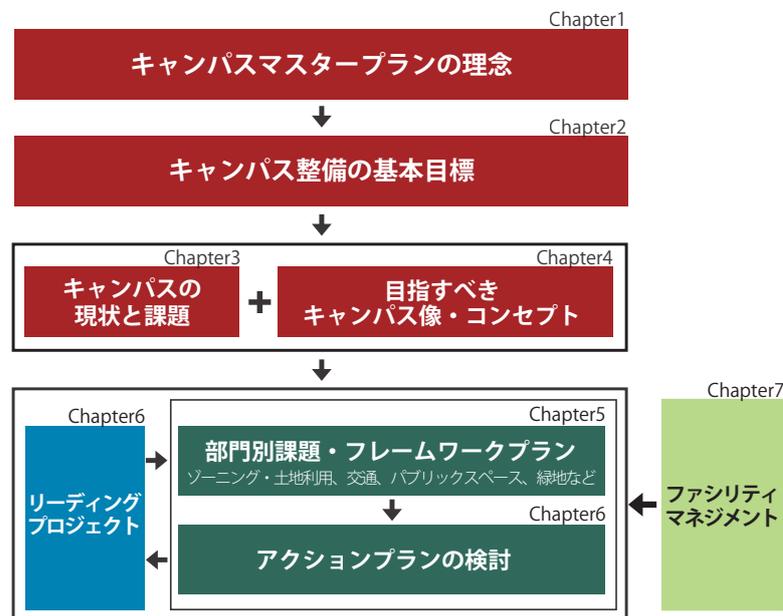


図 1-4 キャンパスマスタープランの構成イメージ

1.4 キャンパスマスタープランの達成方策

キャンパスマスタープランは、整備期間別・課題別に方針を検討しながら、目指すべきキャンパス像をわかりやすいよう提示する必要がある。キャンパス整備に関する透明性の高い議論を促進し、目指すべきキャンパス像を学園の全構成員が共有することで、全学的協力体制による、学生・教職員が参画するキャンパス整備を推進する。また、必要に応じて行われる短期的な改修・更新などのキャンパス整備を長期的方針と整合を持たせながら滞りなく実現できるようにし、適切な時期に長期的ビジョンの見直しを行う作業をキャンパスマスタープランの検討サイクルに含め、継承性と持続可能性（サステナビリティ）を持ったキャンパスマスタープランの達成を目指す。

1.4.1 フレームワークプランの設定

フレームワークプランとは、概ね15～30年程度の中長期的なキャンパス全体の整備方針に基づく計画である。

キャンパス整備の方針を部門別に示すことで課題や取り組むべき整備をわかりやすく伝えることが可能となる。キャンパス空間はその部門別方針が多層レイヤで構成されている、部門毎の方針の調和を図りながらそれらを重ね合わせることで、良好なキャンパスの実現を目指す。

広大なキャンパスには多くの建物が建ち、多くの学生、教職員が生活をしている。キャンパス空間は、時代に対応した教育を実現する場を提供し、社会情勢・財政状況などに柔軟に対応していかななくてはならない。その際、統一した方針のもとにキャンパス整備を進めていかなければ、キャンパスは無秩序な空間となり、建替えすらできない状況に陥る危険性がある。これにより、長期的視点でキャンパス全体を見通した計画を検討し、キャンパスマスタープランの位置づけを共有することがきわめて肝要である。

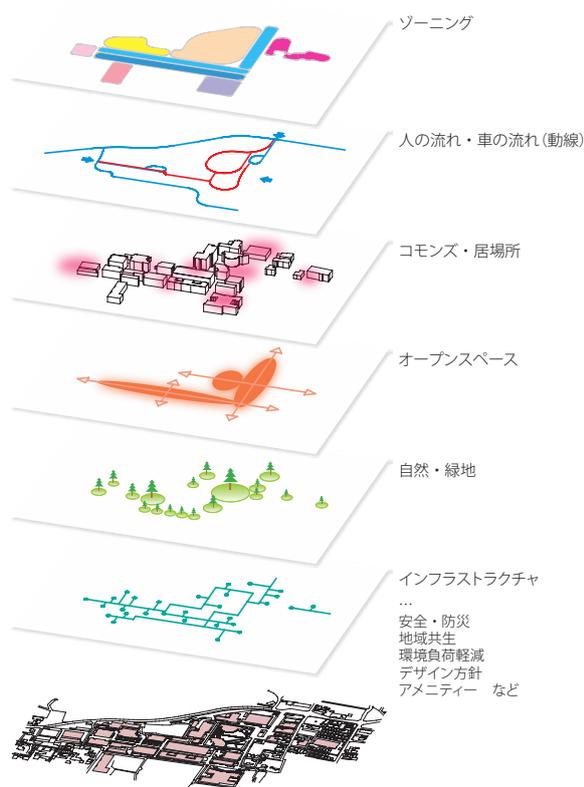


図 1-5 フレームワークプランのイメージ

1.4.2

アクションプランの設定

アクションプランとは、概ね5年程度の整備方針に基づく短期的な計画である。

フレームワークプランで掲げたキャンパス整備の方向性を実現化するためには、アカデミックプランだけでなく、経営戦略や財務条件とのすり合わせを行いながら実現可能性を踏まえた検討が重要である。

キャンパスマスタープランでは、アクションプランとして検討すべき施設整備課題のキャンパスマスタープランにおける俯瞰的な位置づけと、アクションプランの具体的な検討にあたりフレームワークプランとの整合性を保つために考慮が必要な条件の整理や、必要に応じたガイドラインの提示までを行うものとする。

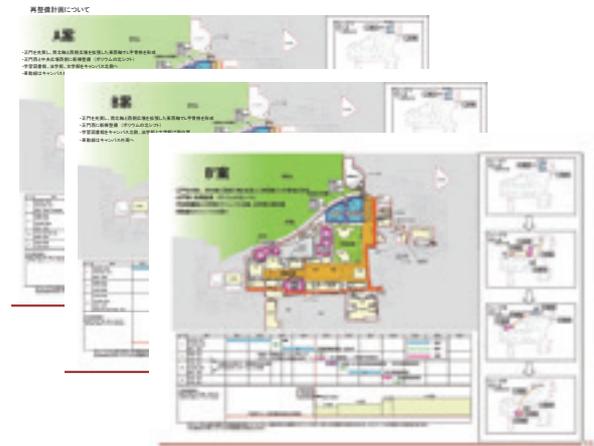


図 1-6 アクションプランの検討案イメージ
(2011 年度キャンパス計画委員会資料)

1.4.3

リーディングプロジェクトの設定

リーディングプロジェクトとは、目指すべきキャンパスの実現に向け、キャンパス整備計画全体を主導するプロジェクトである。

アクションプランは通常、個別単体の施設に関わるものであることが多いが、リーディングプロジェクトを設定することにより、従来個別に検討・整備していく手法では実現できなかった複合的な課題に取組み、アカデミックプランと連動したキャンパス空間の再編・実現を目指す。また、キャンパス計画における未決定の上位計画を個別の施設整備計画と連動して検討することで、上位との整合性を保ちつつ、個別の整備課題を迅速かつ円滑に解決することを可能とする。キャンパスマスタープランにおいて、特に必要と判断される課題をリーディングプロジェクト（重点検討課題）として設定できることとし、関係各所と中長期的に目指すべきキャンパス像や課題を共有しながら、柔軟かつ横断的に課題解決を図る（詳細は6章にて後述）。

【リーディングプロジェクト設定のための条件】

- ・複数の施設整備課題をまたぐ複合的、横断的な整備計画であること。
- ・キャンパス全体のゾーニング計画や、個々のゾーンの面的な整備計画への影響が大きいこと。
- ・優先順位の高いアクションプランを含みながら、フレームワークプランに関する未決定の事項を潜在的に決定づける可能性があること。

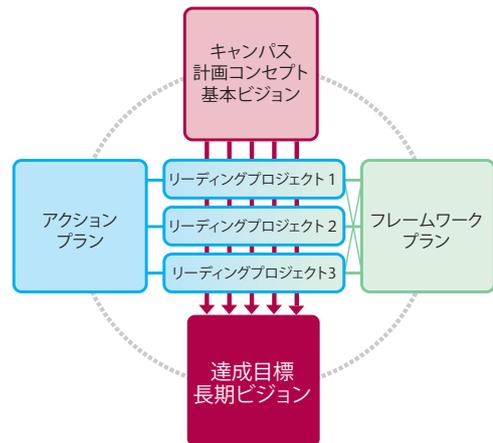


図 1-7 リーディングプロジェクトの役割イメージ

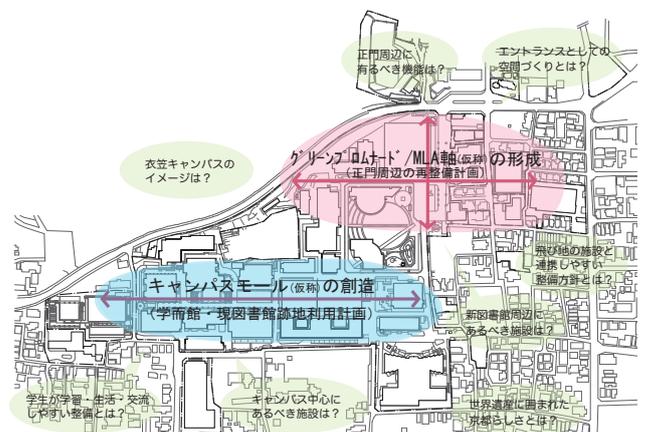


図 1-8 衣笠キャンパスのリーディングプロジェクトエリア

chapter 2

立命館大学 キャンパス整備の基本目標

- 2.1 キャンパスマスタープランの位置付けと役割
 - 2.1.1 アカデミックプランと連動した
キャンパスマスタープラン

- 2.2 立命館学園の概要
 - 2.2.1 立命館学園の概要
 - 2.2.2 立命館大学3キャンパスの構成

- 2.3 キャンパス整備の空間コンセプト

- 2.4 キャンパスマスタープランの基本方針

chapter 2では、キャンパス整備の空間コンセプトやマスタープランの基本方針を示し、立命館大学のキャンパス整備の基本目標として策定する。

2.1 キャンパスマスタープランの位置付けと役割

2.1.1

アカデミックプランと連動した キャンパスマスタープラン

「立命館大学キャンパス創造の基本構想」（2011. 10. 12 常任理事会）の到達点を踏まえながら、アカデミックプラン・経営戦略・建築計画の専門的検討などに基づいて、キャンパス整備方針・内容の検討を進めながら最適なフレームワークプランとしてのキャンパスマスタープランを策定する。

フレームワークプランを軸としたキャンパスマスタープランに沿って、短期的なアクションプランを検討し、立命館大学における良好なキャンパス環境整備を実現していくものとする。

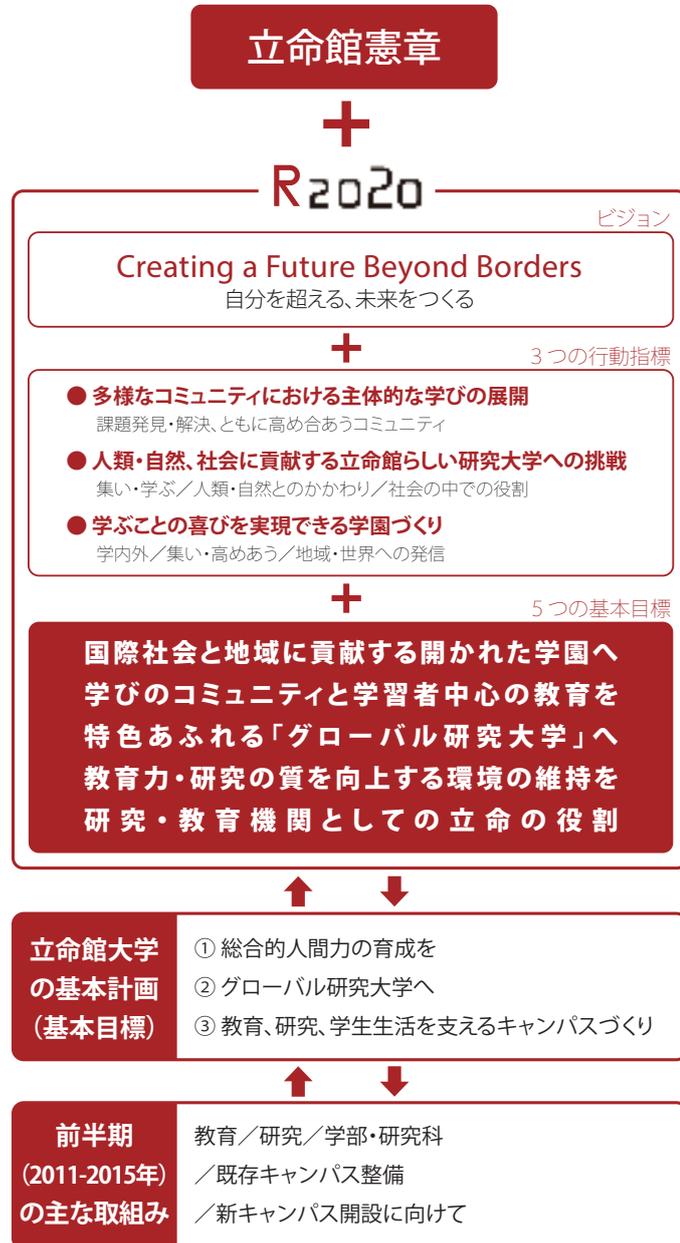


図 2-1 立命館大学のアカデミックプランイメージ

2.2 立命館学園の概要

2.2.1

立命館学園の概要

1869（明治2）年、新しい時代を担う若者を育てるため、西園寺公望が私塾「立命館」を創始し、1900（明治33）年、文部大臣時代の西園寺の秘書であった中川小十郎が、その意志を引き継ぎ立命館大学の前身となる「私立京都法政学校」を設立した。

立命館学園は2010年に創立110周年を迎え、今日では、2大学、4高等学校・4中学校・1小学校を擁する総合学園となった。建学の精神「自由と清新」教育・研究の理念「平和と民主主義」のうえに立ち、それを具体的に活かしつつ、「世界の立命館へ」というビジョンのもとで、今日の新しい時代と社会の要請に応える学園づくりを積み重ねている。

（立命館 HP より引用）

立命館学園全体の敷地面積は2,315,088.73㎡、延床面積は796,247.23㎡である。（2015年3月31日現在）



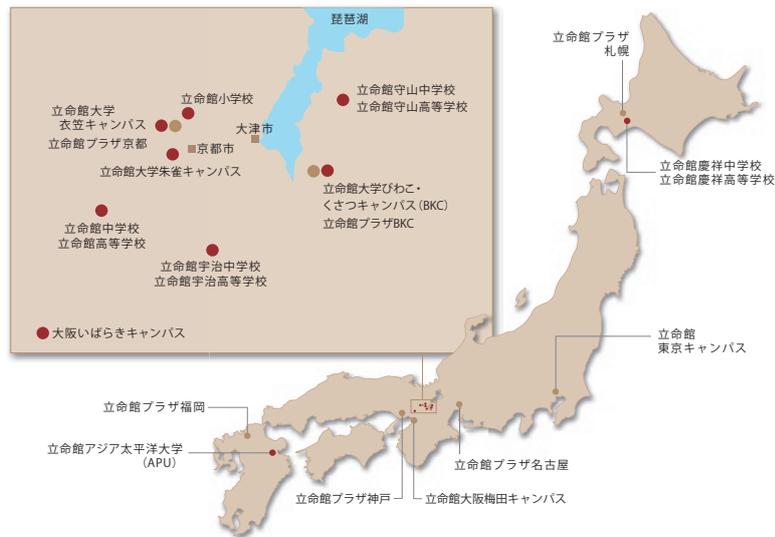
学祖 西園寺 公望
Saionji kinmochi



創立者 中川 小十郎
Nakagawa kojiro



1869年明治2年） 西園寺公望書「立命館」



立命館大学 朱雀キャンパス	● 立命館中学校 立命館高等学校
立命館大学 衣笠キャンパス	● 立命館宇治中学校 立命館宇治高等学校
立命館大学 びわこ・くさつキャンパス (BKC)	● 立命館慶祥中学校 立命館慶祥高等学校
立命館大学 大いばらきキャンパス	● 立命館守山中学校 立命館守山高等学校
立命館アジア太平洋大学 (APU)	● 立命館小学校
立命館東京キャンパス 2007年4月、東京駅日本橋口に開設。首都圏での窓口機能や学生の進路就職支援を行い、「知の発信拠点」として、ビジネスマンや実務家、社会人を対象にした講座を開講しています。 所在地 ● 東京都千代田区丸の内1-7-12 サビアタワー8階 TEL ● 03-5224-8188	「立命館プラザ」 大学での学びや入試・進路等、受験生や保護者の相談に応じる地域拠点 ■ 立命館プラザ京都 所在地 ● 京都市北区等持院北町56-1 立命館大学衣笠キャンパス 至徳館2階 TEL ● 075-465-8351 ■ 立命館プラザBKC 所在地 ● 滋賀県草津市野路東1丁目1-1 立命館大学びわこ・くさつキャンパス キャンピニー TEL ● 077-561-3000 ■ 立命館プラザ札幌 所在地 ● 札幌市中央区北4条西5丁目 アスティ45 1階 (ACU内) TEL ● 011-272-3883 ■ 立命館プラザ名古屋 所在地 ● 名古屋市中村区椿町16-16 ナゴヤ大和ビル8階 TEL ● 052-459-0750 ■ 立命館プラザ神戸 所在地 ● 神戸市中央区南引町4-2-12 ネオオフィス三宮6階 TEL ● 078-262-7080 ■ 立命館プラザ福岡 所在地 ● 福岡市博多区博多駅前1-15-20 NOF博多駅前ビル2階 TEL ● 092-432-8122
立命館大阪梅田キャンパス JR大阪駅、阪急・阪神・地下鉄梅田駅前の「大阪富国生命ビル」5階と14階に「立命館大阪梅田キャンパス」があります。5階は主に、MBAやMOTなどの社会人大学院講義と、一般向け公開講座などを行っています。14階は主に就職活動支援業務と大阪梅田キャンパス全体の運営業務になります。 所在地 ● 大阪府北区小松原町2-4 大阪富国生命ビル TEL ● 06-6360-4895 (14階大阪梅田キャンパス運営オフィス)	

図 2-2 立命館学園の概要

2.2.2 立命館大学3キャンパスの構成

立命館大学は、主たるキャンパスとして、京都キャンパス（衣笠キャンパス、朱雀キャンパス）、びわこ・くさつキャンパス（BKC）と2015年4月に開設した大阪いばらきキャンパス（OIC）によって構成される。京都・滋賀・大阪を結ぶ3キャンパスのいわばトライアングル体制となった。

3キャンパスにおいて、総敷地面積916,753.51㎡、総延床面積551,597.14㎡を有し、そこで活動する学生は、合計35,120人にのぼっている。

衣笠キャンパス

立命館大学の現存する最も古いキャンパスである。衣笠山を背景に、鹿苑寺（金閣寺）、龍安寺、仁和寺、そして等持院などの歴史的名刹などに囲まれた京都市北西部に位置している。



図2-4 衣笠キャンパスの位置図

- 京都から世界へ発信する伝統と創生の人文系キャンパス（5学部、8研究科）
- ・立地特性：歴史都市型
 - ・基本的な空間骨格：三角形



図2-3 立命館大学のトライアングル体制

表2-1 3キャンパスの主要データ

	衣笠キャンパス	朱雀キャンパス	びわこ・くさつキャンパス	大阪いばらきキャンパス
敷地面積	132,954.75㎡	8,119.02㎡	675,111.88㎡	100,567.86㎡
延床面積	165,798.48㎡	27,138.68㎡	252,751.87㎡	105,908.11㎡
学生数(2015年5月1日現在)	15,820人	168人	13,596人	5,536人

※面積は2015年3月31日現在のデータである。衣笠キャンパス、朱雀キャンパスの面積には、原谷・終野グラウンドやインターナショナルハウスなどは含まれていない。びわこ・くさつキャンパスの面積にはグリーンフィールド、BKCインターナショナルハウスが含まれている。

びわこ・くさつキャンパス（BKC）

琵琶湖の南東、滋賀県「びわこ文化公園都市」の一角に位置し、敷地面積約61ha。敷地内には希少植物が生息する自然緑地が存在し、広大な敷地とキャンパスである。



図2-5 BKCの位置図

- 世界水準の教育・研究・技術を創出・発信するイノベティブ・キャンパス（6学部、6研究科）
- ・立地特性：郊外型
 - ・基本的な空間骨格：放射状

大阪いばらきキャンパス（OIC）

大阪万博記念公園の東約1.5kmに位置する、サッポロビール工場跡地に茨木市立の岩倉公園と一体的に計画される。JR茨木駅と阪急南茨木駅に挟まれた都市型キャンパスである。



図2-6 OICの位置図

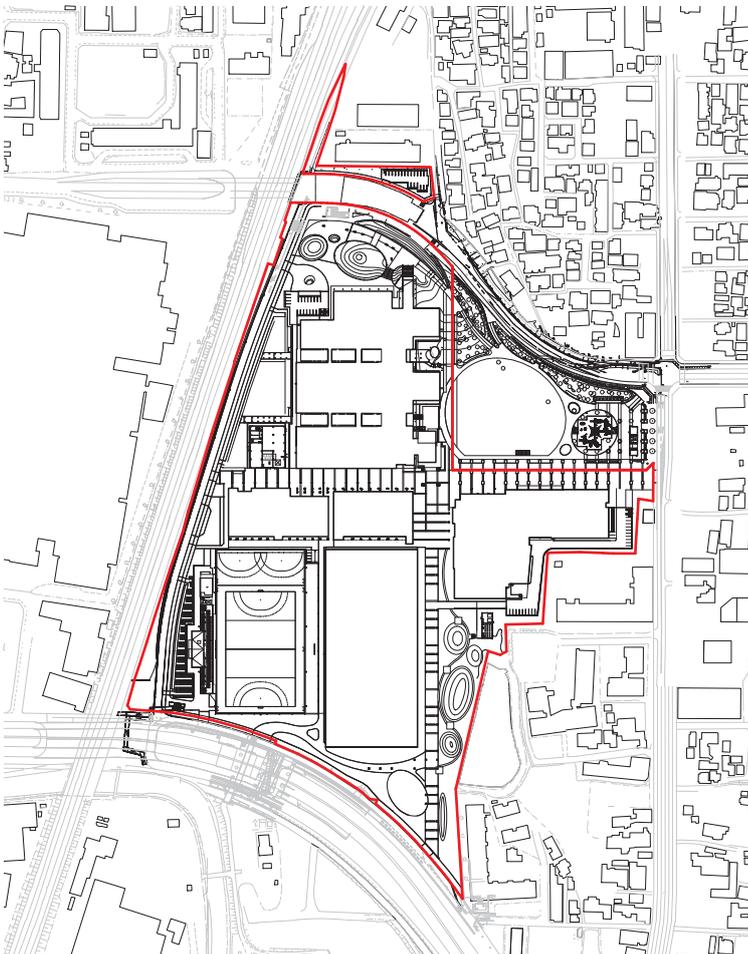
- 「アジアのゲートウェイ」「都市共創」「地域・社会連携」をコンセプトに掲げ、新たな学びのスタイルを提案するキャンパス（2学部、4研究科）
- ・立地特性：市街地型
 - ・基本的な空間骨格：十字型

■衣笠キャンパス



図 2-7 衣笠キャンパス配置図

■大阪いばらきキャンパス



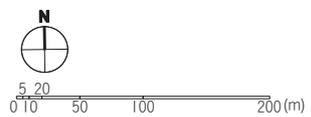
※一部借地あり

図 2-8 大阪いばらきキャンパス配置図

■朱雀キャンパス



図 2-9 朱雀キャンパス配置図



※方位、縮尺は全キャンパス共通

■びわこ・くさつキャンパス



※一部借地あり

図 2-10 びわこ・くさつキャンパス配置図

※方位、縮尺は全キャンパス共通

2.3 キャンパス整備の空間コンセプト

キャンパスは教育・研究活動のフィールドであるとともに、多様なコミュニティ形成を支える空間である。優れた学生や研究者を育成する環境として、国内外・地域への発信・貢献・連携の場として、立命館大学の基本目標である総合的人間力の育成やグローバル研究大学に向け、教育・研究・学生生活を支えるキャンパスづくりを目指す。そこで、立命館大学におけるキャンパス計画・整備の役割や目的を共有しやすいよう、全キャンパス共通の空間コンセプトを次のように設定する。

- 1 多様なコミュニティ形成を支える空間整備**
- 2 優れた学生・研究者を育成する国際基準の教育・研究・文化・スポーツ環境整備**
- 3 高いQOLが支える優れたアメニティや自然環境、エコロジー、防災への配慮**
- 4 国内外・地域への発信・貢献・連携の場の整備とシステムの構築**
- 5 歴史・文化的コンテクストを踏まえたキャンパス計画**

2.4 キャンパスマスタープランの基本方針

キャンパス計画・整備の空間コンセプトを実現するための基本方針を次のように設定する。

①全学的協力体制による、学生・教職員が参画する 一体的なキャンパス整備

検討プロセスにおいて、学生、教職員、(課題に応じて地域の方々)など、多くの関係者が参画する機会を設け、出来る限り多くの意見を聞き、共に考え、行動する。

②キャンパス資源(敷地・施設等)の有効活用

既存施設の有効活用が重要な前提条件となる。既存キャンパスにおける活用可能面積は限られており、新たなスペースの確保は難しいのが現状である。そのため、キャンパスの有効活用を検討する際は、下記に示すような検証が重要となる。

- ・現状の施設利用状況や課題の共有
- ・教学・研究活動等における求められる機能の把握
- ・前例のない整備課題についての可能性検討
- ・利用状況の変化に伴う床面積やゾーニングの最適化
- ・キャンパス計画・整備方針の共有
- ・管理・運営ルールの見直し

③教育・研究環境の再編・集約

- ・学部エリア
- ・学部連携エリア
- ・全学共有エリア

④緑地と連動したコミュニティスペースの再編

⑤立命館ステイタス

- ・魅力的で充実した学生生活を支える生活施設の質の向上と再整備

⑥都市の一部としての社会的な役割を果たす大学キャンパスの整備

⑦継続・更新・発展する大学経営を支える

ファシリティマネジメント

⑧計画・管理・評価体制の確立

⑨各部署が施設計画等の立案・執行の際に常に引用する

手引き・指針としての位置づけ

各学部教学や研究の将来構想や各部署の適切な役割を共有しながら、施設計画等の立案・執行の際に引用可能な手引き・指針としてキャンパスマスタープランを位置づける。

全キャンパス共通の方針・課題整理項目

立命館憲章や学園ビジョン R2020 で示すアカデミックプランなどの実現に向けて、キャンパス空間の調和を図りながら目指すべき立命館のあるべき姿を実現していくための、全キャンパス共通の空間コンセプトに沿って、次の表に示すようにツリー構造的に検討すべきより詳細な整備方針との関係性を示している。

【キャンパスプラン実現のための条件整理】

前提/アカデミックプランとその方針	
立命館憲章	
R2020	<p><学園ビジョン></p> <p>Creating a Future Beyond Borders</p> <p>自分を超越る、未来をつくる。</p>
	<p><3つの行動指標></p> <p>多様なコミュニティにおける主体的な学びの展開</p> <p>人類・自然・社会に貢献する立命館らしい研究大学への挑戦</p> <p>学ぶことの喜びを実現できる学園づくり</p>
	<p><5つの基本目標></p> <p>国際社会と地域に貢献する開かれた学園へ</p> <p>学びのコミュニティと学習者中心の教育を</p> <p>特色あふれる「グローバル研究大学」へ</p> <p>教育力・研究の質を向上する環境の維持を</p> <p>教育・研究機関としての立命の役割 —東日本大震災をうけて—</p>
	<p><立命館大学の基本目標></p> <p>総合的人間力の育成を</p> <p>グローバル研究大学へ</p> <p>教育、研究、学生生活を支えるキャンパスづくり</p>

■空間整備のコンセプトからプロジェクトの詳細についてツリー構造的整理

空間コンセプト	基本方針	計画項目
<p>1. 多様なコミュニティ形成を支える空間整備</p> <p>2. 優れた学生・研究者を育成する国際基準の教育・研究・文化・スポーツ環境整備</p> <p>3. 高いQOLが支える優れたアメニティや自然環境、エコロジー、防災への配慮</p> <p>4. 国内外・地域への発信・貢献の場の整備とシステムの構築</p> <p>5. 歴史・文化的コンテクストを踏まえたキャンパス計画</p> <p>(全キャンパス共通)</p>	<p>全学的協体制による学生・教職員が参画する一体的なキャンパス整備</p> <p>キャンパス資源(敷地・施設等)の有効活用</p> <p>教育・研究環境の再編・集約 ・学部エリア ・学部連携エリア ・全学共用エリア</p> <p>緑地と連動したコミュニティスペースの再編</p> <p>立命館ステイタス魅力的で充実した学生生活を支える生活施設の質の向上と再整備</p> <p>都市の一部としての社会的な役割を果たす大学キャンパスの整備</p> <p>継続・更新・発展する大学経営を支えるファシリティマネジメント</p> <p>計画・管理・評価体制の確立</p> <p>各部署が施設計画等の立案・執行の際に常に引用する手引き・指針としての位置づけ</p>	<p>土地利用・建物配置</p> <p>インフラ 基盤整備 骨格構成</p> <p>安全・安心</p> <p>パブリック空間整備</p> <p>全学利用施設(パブリック)</p> <p>専用スペース整備</p> <p>学外利用者の使用施設</p>

			条件整理の作業に必要なデータや情報など
ゾーニング計画 ・明快・明確な ・わかりやすい ・敷地の有効活用を図る	キャンパスの骨格 ボリュームシフト		築年数の確認 法規制の整理 現状把握
	教学・研究空間の適正化 分散部局の集約		現状把握 全学利用施設の把握
交通計画 ・わかりやすい ・アクセスしやすい ・見通しのよい ・安全な ・量的確保	キャンパス内動線 キャンパス外アクセス		現状把握(登録数・利用数) バス待合時の 歩道の占有率 事故件数 警備員の業務内容 事例調査 各門の開閉
	明確な歩車分離 人・自転車・バス 一般車両・サービス車両 観光車両 駐輪場・駐車場の整備 バス待合スペースの計画 バスロータリーの計画		
エネルギー計画	設備更新(老朽化への対応) 環境負荷低減への試み サステナブル エコロジー	電気・給排水 高効率機器の導入(エネルギー政策) 自然エネルギーの活用 非常時対応	現状把握(寿命・効率) 建替計画への影響
安全・安心な施設計画	ユニバーサルデザイン 交通 災害・防災対策 防犯対策 施設の維持管理・老朽化対策	避難場所 非常用電力供給 浄化設備(非常用トイレ等) セキュリティ(日常時・非常時) 情報管理	現状把握 事例調査 方針の検討 バリアフリー化の現状把握
緑地計画	自然環境への配慮 周辺環境との連続性	適切な植栽計画 コミュニティ空間との関係	現状把握(毎木調査) ※保存樹木の判断(寿命・記念樹等)含む
デザインガイドライン の設定	壁面線・高さの指定 構造・形状・半屋外空間など 仕上げ・色彩・サイン計画など 緑地計画	歴史の継承 キャンパスデザインの調和 既存緑地の保全・活用	現状把握 周辺地域から大学施設の見え方への配慮 景観との調和
コミュニティスペース (コモン、居場所) の適正配置	屋外		現状把握
	屋内	学習	現状把握・データ分析 事例調査 ターゲット層の設定・確認 運営方式・クオリティに対するニーズ・評価
		飲食	カフェ・レストラン 大学生協
正課以外の学びの拠点	図書館・びあら・コモンズなど	将来規模(面積、数量)の設定	
課外自主活動施設	スポーツ、健康、レクリエーション	各種体育施設、サークル活動施設	稼働率、規模、施設配置の適正化
QOL(生活施設)	アメニティの向上 学生支援の充実 福利厚生施設の充実	明るく魅力的なトイレ 多様な居場所の整備 学生支援施設の計画 立ち寄りやすい空間づくり 地域開放	現状把握 学生支援施設の視認性と対応時間のニーズ ターゲット層の設定・確認 学生施設の現状把握 女子学生増加への対応
教学・研究施設の方針	講義教室 専門教室・実験室 学生研究室、教員研究室	将来規模(面積、数量)の設定 情報共有 研究内容の公開・発信	占有スペースの見直し、配置の適正化 利用実態の把握(稼働率、利用人数対面積) セキュリティエリア
事務組織の体制	事務職員施設		(※具体的にはアクションプランの内容)
国内外への 発信・貢献・連携	地域連携 地域開放 地域貢献	地域プログラム 災害時対応 京都ステイタス	
	国際化 国際交流、国際理解	国際寮 学生支援(言語、生活習慣、宗教)	国際化の動向把握 グローバルスタンダードに関わる情報収集
	連携の支援 (附属校・APU・他キャンパス 地域・他大学・日本・世界など)	情報発信・交流拠点 高校生等の居場所の確保	

chapter 3

京都キャンパスの現状と課題

- 3.1 京都キャンパスの現状
 - 3.1.1 キャンパスの位置づけ
 - 3.1.2 学部・研究科の構成
 - 3.1.3 立地条件
 - 3.1.4 京都キャンパスの沿革
 - 3.1.5 衣笠キャンパスの敷地概要
(条件・法規制等を含む)
 - 3.1.6 衣笠キャンパスの施設概要

- 3.2 これまでのキャンパス整備の取り組み
 - 3.2.1 これまでのキャンパス整備
 - 3.2.2 R2020 前半期の既存キャンパス整備計画

- 3.3 京都キャンパスの現状と課題
 - 3.3.1 衣笠キャンパスの現状と課題
 - 3.3.2 朱雀キャンパスの現状と課題

chapter 3では京都キャンパスの学部・研究科の構成や立地条件、敷地概要など、キャンパスを構成する基本条件の確認を行う。

これらキャンパスの現状を把握した上で、キャンパス計画や整備における課題を抽出する。

3.1 京都キャンパスの現状

3.1.1

キャンパスの位置づけ

京都キャンパスとは主に衣笠キャンパスと朱雀キャンパスを示す。京都キャンパスマスタープランでは、次の3つに分けて記述する。2014年度までの検討では主に衣笠キャンパスを中心に検討を行ってきた。

【京都キャンパス】

①衣笠キャンパス

(西園寺記念館(氷室)、究論館、アカデミア立命21、歴史都市防災研究所、などを含む)

②朱雀キャンパス

③その他大学施設

(グラウンド(原谷・柘野)、インターナショナルハウス(双ヶ岡、宇多野、大將軍)など)

京都キャンパスが位置する京都市の政策においては、魅力的な京都を目指す中で「歩くまち京都」や「地域ごとの観光創出」(京都市基本計画)、また「優れた景観を保全・再生・創造する」(マスタープラン)といった政策が打ち出されている。大学に関しては、「大学の集積・交流が活力を生み出す」(京都市基本計画)と認識し、都市計画マスタープランの北区の項では、「大学を生かしたまちづくり」を掲げ、行政として大学を支援する姿勢も表明している。また、「世界に誇る『大学のまち京都』」を目指しており、行政と連携・協働したキャンパス整備や、地域に開かれたキャンパスづくりを模索していくことも必要となっている。

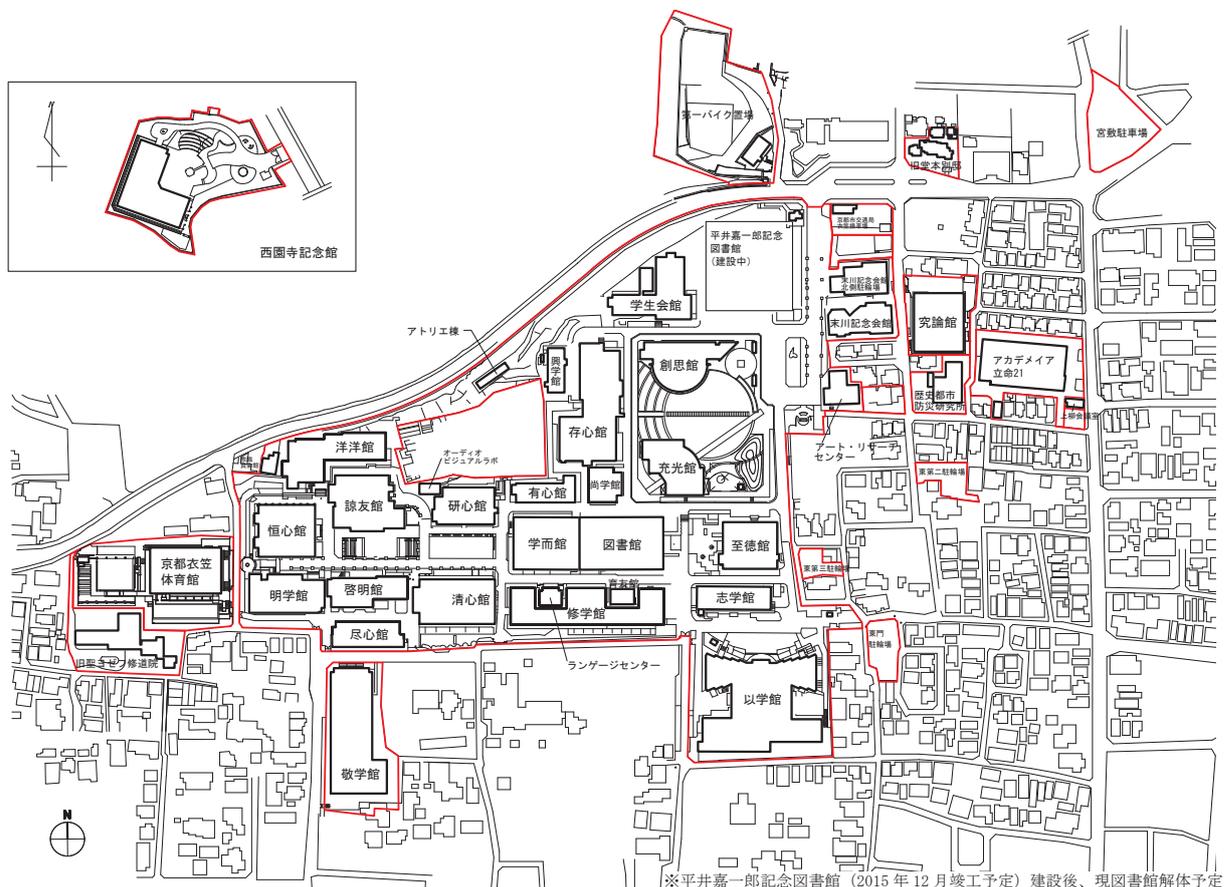


図3-1 衣笠キャンパス配置図(2015年4月時点)

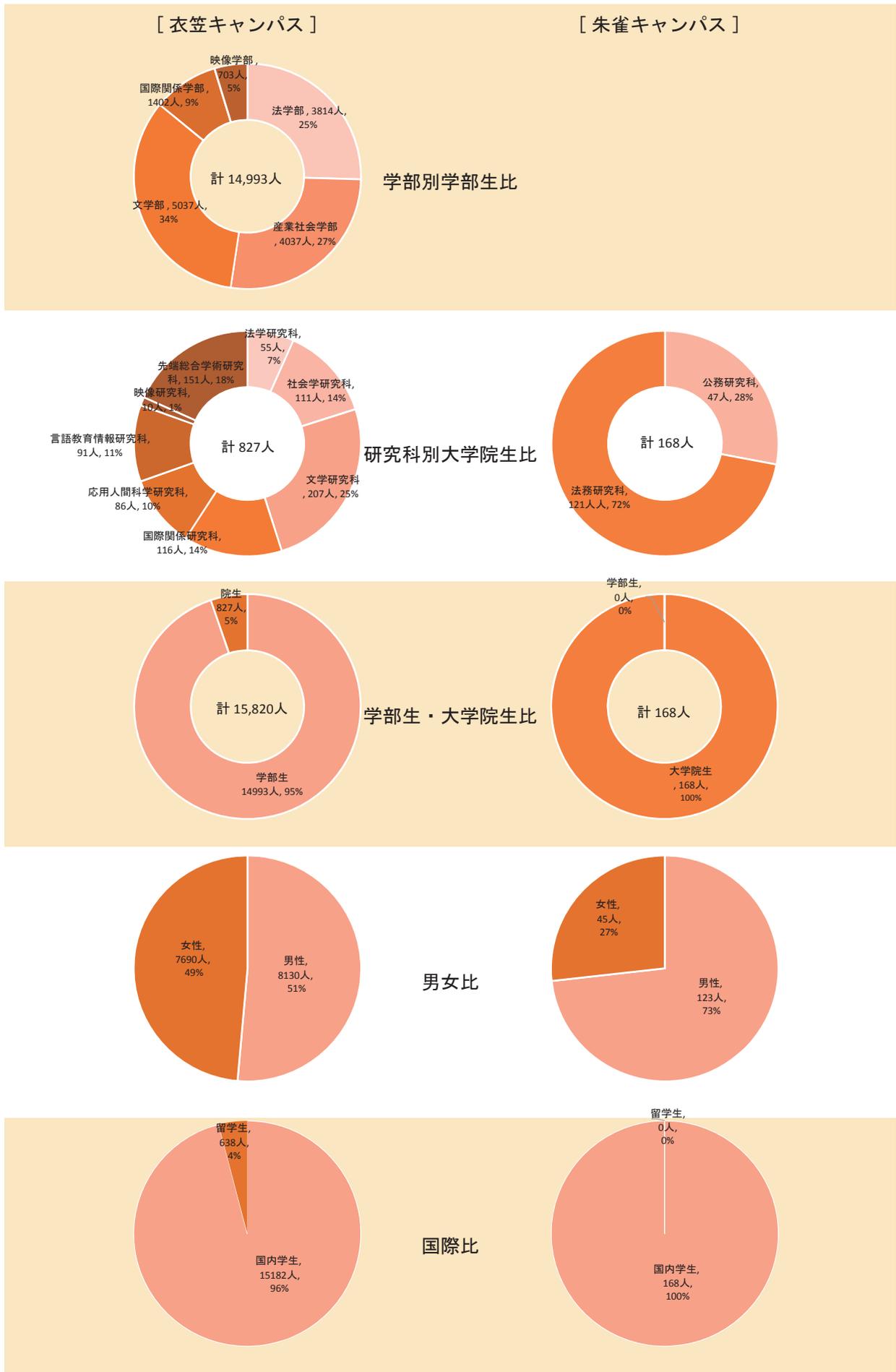


図 3-2 京都キャンパスで学ぶ学生データ (2015 年 5 月 1 日現在)

3.1.3

立地条件

【衣笠キャンパス】



写真 3-2 存心館の時計台と衣笠山

1981（昭和 56）年に広小路から全面移転し、学舎の統合がはかられた。京都市北西部に位置し、衣笠山を背景にした緑豊かな地域である。鹿苑寺（金閣寺）・龍安寺・仁和寺が周辺に位置し、また等持院に隣接しており、歴史的名刹に囲まれたキャンパスである。等持院墓地へは立命館大学内を通過する。キャンパス北側には金閣寺と龍安寺を繋ぐ「きぬかけの路」が隣接し、多くの観光客が訪れる。

【キャンパス所在地】

京都市北区等持院北町 56-1 他

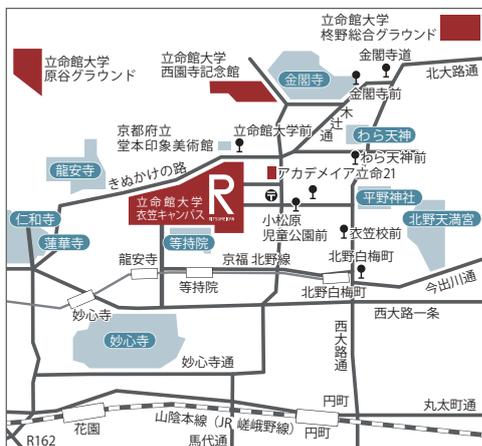


図 3-3 衣笠キャンパスの位置図

【朱雀キャンパス】



写真 3-3 中川会館外観写真

2006（平成 18）年に開設した。平安京時代からの京都の中心部である朱雀大路上に位置しており、周辺には二条城などの歴史的名刹がある。付近には、佛教大学や専門学校などがあり、教育機関の集積地でもある。JR 二条駅・京都市営地下鉄東西線二条駅・各種路線バス停に近く、交通アクセスの良い環境である。

【キャンパス所在地】

京都市中京区西ノ京朱雀町 1（中川会館）



図 3-4 朱雀キャンパスの位置図

【氷室】

西園寺記念館



写真 3-4 西園寺記念館航空写真

【原谷】

尚友館、第2尚友館、第3尚友館、原谷サッカー場更衣・倉庫棟



写真 3-5 原谷グラウンド航空写真

【柘野】

柘野総合合宿所・クラブボックス等 11 棟



写真 3-6 柘野グラウンド航空写真

【双ヶ岡】

立命館大学インターナショナルハウス常盤
(英語名称: International House Tokiwa)

【宇多野】

立命館大学インターナショナルハウス宇多野
(英語名称: International House Utano)

【大將軍】

立命館大学インターナショナルハウス大將軍
(英語名称: International House Taishogun)

【京都キャンパス周辺の主な観光地】

鹿苑寺(金閣寺)、龍安寺、二条城、仁和寺、平野神社、等持院、衣笠山、堂本印象美術館、妙心寺、北野天満宮、わら天神など

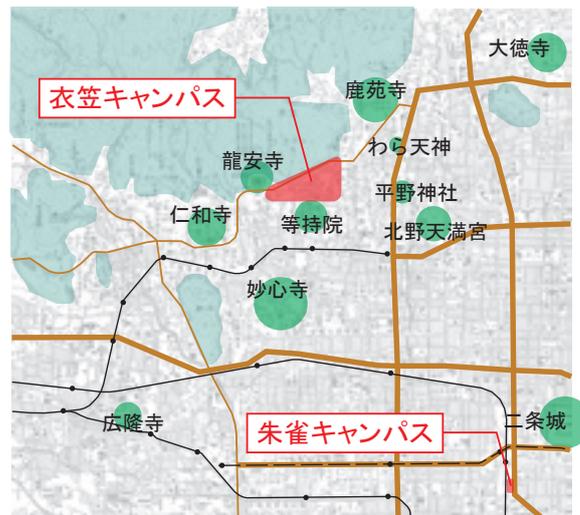


図 3-5 衣笠キャンパス近郊の主要な観光地



図 3-6 京都キャンパス近郊の主要な観光地と大学

3.1.4

京都キャンパスの沿革

【衣笠キャンパス】

1965年に経済学部・経営学部の広小路キャンパスからの移転にはじまった衣笠一拠点化は1981年に完成した。1988年の国際関係学部新設以降、政策科学部・映像学部の新設、国際インスティテュート等の教学創造が図られてきた。びわこ・くさつキャンパス開設に伴い、理工学部（1994年）経済学部・経営学部（1998年）が移転した。2015年4月の大阪いばらきキャンパス開設に伴い、政策科学部、政策科学研究科が移転した。

【朱雀キャンパス】

2006年に法人組織と大学院施設（法科大学院、経営管理研究科、公務研究科）を展開するキャンパスとして新設された。大阪いばらきキャンパス開設（2015年4月）に伴い、経営管理研究科が移転した。

表 3-2 京都キャンパスの前史

1869	西園寺公望が邸内に私塾「立命館」を開設
1900	中川小十郎が「私立京都法政学校」を開設
1901	広小路学舎設置
1904	専門学校令による「私立京都法政学校」に改称
1913	大学を「私立立命館大学」に改称
1922	大学令（旧制）による「立命館大学」設立
1948	学校教育法による「立命館大学」（新制）設立
1939	北大路校地にあった「立命館高等工学校（1938年設立）」を、「立命館日満高等工学校」に改め、北区等持院北町（現在の衣笠キャンパス）の新校舎で開校
1942	日満高等工学校を立命館大学専門学部工学科に昇格

表 3-3 京都キャンパスの沿革

1960年代	1961	有心館 竣工
	1963	興学館 竣工
	1965	以学館、恒心館 竣工 経済学部、経営学部を広小路キャンパスから衣笠に移転
	1966	修学館、啓明館 竣工
	1967	図書館、特別実験室 竣工
1970年代	1969	第一体育館 竣工
	1970	学而館 竣工 産業社会学部を広小路キャンパスから衣笠に移転
	1973	学生会館 竣工
	1974	教職員会館、志学館 竣工
	1976	諒友館 竣工
	1977	清心館 竣工
1980年代	1978	文学部、二部全学部を広小路キャンパスから衣笠に移転
	1979	至徳館、研心館 竣工 学校法人本部を広小路キャンパスから衣笠に移転
	1981	存心館 竣工
	1983	法学部を広小路キャンパスから衣笠に移転（全学部の移転完了） 末川記念会館 竣工
	1988	洋洋館、オーディオビジュアルラボ、尚学館 竣工 国際関係学部を西園寺記念館に開設
1990年代	1989	尽心館 竣工
	1990	明学館 竣工
	1992	アカデミア立命 21 館 竣工 国際平和ミュージアム（アカデミア立命 21）設立
	1994	びわこ・くさつキャンパス（BKC）開設、理工学部を拡充移転 政策科学部を開設
2000年代	1998	経済学部、経営学部をBKCに移転
	1999	アトリサーチセンター 竣工
	2000	国際関係学部を西園寺記念館から恒心館に移転
	2001	創思館 竣工
	2002	ランゲージセンター 竣工（修学館の増築）
	2004	敬学館 竣工
	2006	歴史都市防災研究センター 竣工 学校法人本部を朱雀キャンパスに移転
2010年代	2007	充光館 竣工 映像学部を開設
	2008	育友館 竣工
	2012	京都衣笠体育館 竣工 第3尚友館 竣工
	2015	究論館 竣工
		大阪いばらきキャンパス（OIC）開設 衣笠キャンパスから政策科学部、政策科学研究科をOICに移転 朱雀キャンパスから経営管理研究科をOICに移転

キャンパスの歴史



写真 3-7 1950年代末の広小路キャンパス



写真 3-8 正門から臨む1940年代の存心館(広小路キャンパス)



写真 3-9 1950年代の衣笠(等持院)キャンパス



写真 3-10 衣笠一拠点化完成前(1977年)の衣笠キャンパス



写真 3-11 衣笠一拠点化完成後(1984年頃)の衣笠キャンパス



写真 3-12 2009年の衣笠キャンパス

3.1.5

衣笠キャンパスの敷地概要 (条件・法規制等を含む)

衣笠キャンパス整備において、空間計画上考慮すべき主な法的条件と京都市の関連施策等には以下のようなものがある。

- 都市計画に基づく用途地域
- 京都市風致地区条例
- 京都市景観条例
- 京都市眺望景観創生条例
- 京都市のまちづくり関連施策 など

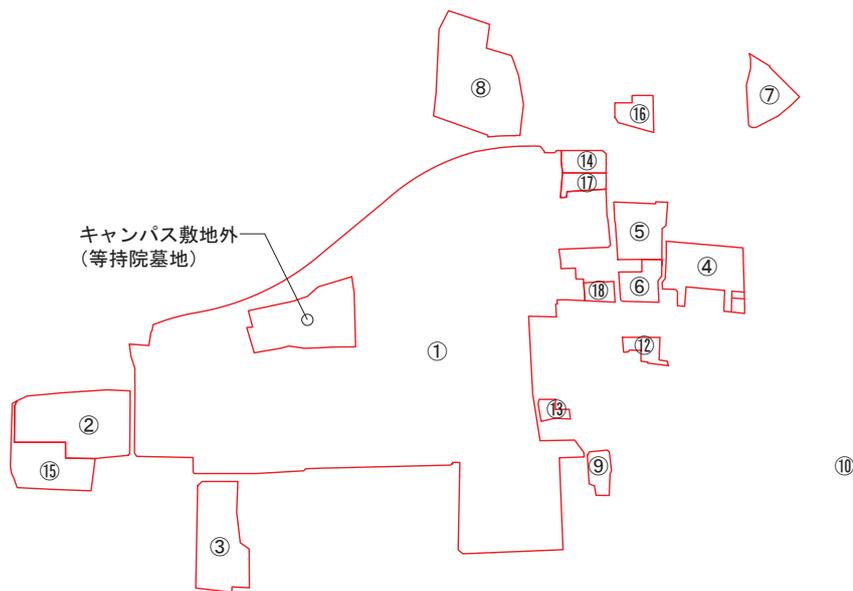
京都の美しい景観を守るため、京都市では昔から全国に先駆けて様々な取り組みを進めてきている。特に、衣笠キャンパスは、鹿苑寺（金閣寺）や龍安寺、衣笠山のある区域に立地しているため、特に厳しい規制が設けられている地域である。世界遺産・京都にある大学として果たす役割として、公共の財産である景観を守るため、よりよい景観計画を行っていく必要がある。

【建ぺい率】

敷地面積に対する建築面積の割合。建築基準法によって、敷地内に適度な空地を確保し、防火と市街地環境への配慮を目的として都市計画区域内の用途地域に応じて上限が定められている。また、衣笠キャンパスの大半の敷地は、京都市の風致地区に定められており、用途地域の規制よりさらに厳しい規制がかかっている。特に、①の敷地の建ぺい率は上限を向かえており、新たに建物を建設するのは極めて難しい状況である。

【容積率】

敷地面積に対する延床面積の割合。建物の規模を規制する数値のひとつで、都市計画区域内の用途地域に応じて上限が定められている。



⑪
図 3-7 土地情報

このページの情報については全て2015年3月31日現在の情報である。

表 3-4 敷地面積等の一覧表 (参考)

区分/敷地番号/校地名		敷地面積(㎡)	延床面積(㎡)	容積率(%)	建築面積(㎡)	建ぺい率(%)	備考
衣笠	① 存心館他	91,663.86	139,343.70	152.02 <200	36,210.27	39.51 <40	建蔽率一部<60、*1
	② 京都衣笠体育館・憩いの広場	6,004.93	9,409.49	156.70 <200	2,320.67	38.65 <40	*1
	③ 敬学館	4,400.00	6,443.50	146.45 <200	2,144.15	48.73 <60	*1
	④ アカデミア立命21	3,474.01	6,492.03	186.88 <200	2,084.30	60.00 <60	*1
	⑤ 究論館	2,420.18	3,716.93	153.58 <200	1,297.79	53.62 <60	*1
	⑥ 歴史都市防災研究所	1,306.33	1,370.25	104.90 <200	492.83	37.73 <60	*1
厚生施設 事務室	水室 西園寺記念館	6,811.80	5,321.35	78.12 <150	1,567.74	23.02 <50	セミナーハウス/情報システム部(地階)が使用、一部借地、*1
運動場・ 課外活動敷地	原谷 原谷グラウンド	82,385.92	4,031.68	4.89 <200	2,334.77	2.83 <60	運動場・課外活動敷地、*1
	柘野 柘野グラウンド	105,422.00	5,553.57	5.27 <93.6	4,979.61	4.73 <56.8	課外活動敷地、*1
駐輪場・ 駐車場用地	⑦ 宮敷駐車場	910.00	-	- <200	-	- <60	一部容積率80%、建蔽率50% 非常勤講師・一般駐車場、*2
	⑧ 第一バイク置場	7,229.63	172.50	2.39 <100	177.00	2.45 <60	*4
	⑨ 東門駐輪場	882.50	-	- <80	-	- <50	*2
	⑩ 小松原駐輪場	803.00	-	- <80	-	- <50	借地、*3
	⑪ 等待院南駐輪場	615.00	-	- <80	-	- <50	*2
	⑫ 旧東第二駐輪場	671.00	-	- <80	-	- <50	閉鎖中、*2
	⑬ 旧東第三駐輪場	382.00	-	- <80	-	- <50	閉鎖中、*2
	- 旧嵐電駐輪場	656.00	-	- <80	-	- <50	閉鎖中、*1
	⑭ 京都市交通局衣笠操車場	923.00	-	- <200	-	- <60	京都市交通局へ用地貸与、*3
その他 (利用計画 検討中)	⑮ 旧聖ヨゼフ修道院用地	3,386.00	-	- <200	-	- <60	活用検討中、*2
	⑯ 旧堂本印象居宅用地	990.66	-	- <200	-	- <60	一部容積率80%、建蔽率50%、
	⑰ 旧教職員駐輪場 旧民家用地 旧民家の位置指定道路	722.52	94.14	- <200	94.14	- <60	2015.2 敷地一体化、 通り抜け動線整備、 *1
		-	-	-	-	-	-
	⑱ 旧民家用地	481.25	-	- <200	-	- <60	*2
寄宿舎敷地	双ヶ岡 インターナショナルハウス常盤	1,342.98	1,661.19	123.69 <80	466.81	34.76 <50	外国人留学生が入居、*1
	宇多野 インターナショナルハウス宇多野	2,704.00	1,233.54	45.62 <60	470.04	17.38 <40	外国人留学生が入居、*1
	大將軍 インターナショナルハウス大將軍	6,864.00	5,417.82	144.30 <200	1,645.16	44.96 <60	外国人留学生が入居 1期敷地面積:3659.40㎡、*1
	花園 外国人教員住宅	171.33	148.76	86.83 -	82.03	47.88 -	外国人教員教授が入居、*1
	柘野 硬式野球部合宿所	427.58	637.81	149.17 <100	316.56	74.04 <60	野球部員が常宿、*1
厚生施設用地	- 上柳会議室	310.59	128.18	41.27 -	65.00	20.93 -	閉鎖中、*2
	- 上柳会議室 南駐輪場	206.90	-	- <200	-	- <60	駐車場、*2
	- 等待院倉庫跡地	426.63	-	- <80	-	- <50	閉鎖中、*2
	- 等待院研究会議室	227.20	116.05	51.08 <80	71.56	31.5 <50	閉鎖中、*2
	- 白雲荘	1,256.79	466.10	37.09 -	442.30	35.19 -	閉鎖中、*2
区分/敷地番号/校地名		敷地面積(㎡)	延床面積(㎡)	容積率(%)	建築面積(㎡)	建ぺい率(%)	備考
朱雀キャンパス	朱雀 中川会館、防災倉庫 他3棟	8,119.02	27,159.66	334.52 <600	3,990.29	49.15 <80	大学院施設、法人施設、*1
小学校	北大路 立命館小学校	11,375.00	11,716.02	103.00 <200	3,127.24	27.49 <60	*1

※平井嘉一郎図書館竣工後、現図書館解体により①の建築面積は34,637.41㎡、建蔽率は37.79%となる予定である。

※上記区分は確認申請上、1敷地とみなされる校地別に示している。

*1: 建築確認申請上の面積を引用、*2: 登記上の面積を引用、*3: 契約上の面積を引用、*4: 物件購入時の面積を引用

【用途地域】（都市計画法）

都市計画において、将来の土地利用の方針を踏まえ、用途の混在を防ぐことを目的として定められている。第一種低層住居専用地域、第二種低層住居専用地域には、大学用途の建築物は建設することができない。

【高度地区】（都市計画法）

土地利用及び地域特性を考慮して、居住環境の保全、自然環境や歴史的環境との調和、均衡の取れた市街地景観の形成による京都の風土にふさわしい都市美の育成等を目的として、当該地域には、建築物の高さを規定する高度地区の指定がある。図 3-7 の①の敷地のほとんどは「20 m以下」、①の一部と③、④、⑤などは「12 m以下」と定められている。

【地区計画】（都市計画法）

西園寺記念館のある氷室には京都都市計画（京都国際文化観光都市建設計画）において、都市計画立命館大学氷室地区地区計画の決定がされている。良好な教育・研究環境の確保と共に周辺の住環境及び景観と調和した良好な市街地環境の形成を図ることを目的とし、建ぺい率、容積率、壁面の位置、建築物等の高さ及びかき又はくさの構造に制限を加えた。

【都市計画道路】（都市計画法）

キャンパスに隣接して、南北に都市計画道路「3・6・120木辻通（区分番号 35_1）」が存在し、一部キャンパスの敷地が含まれているため、将来存心館建替えなどの際には配慮が必要となる。また、2010年に都市計画道路の見直しが行われ、キャンパス内に計画されていた「Ⅱ・Ⅲ・34小松原通（区分番号 39_1）」とキャンパス北側に隣接して計画されていた「Ⅱ・Ⅲ・34小松原通（区分番号 178_1）」は廃止されている。

【敷地内の建物高さ制限】

衣笠キャンパスの土地は複数の用途地域、規制がかかっており、場所により高さや容積率、景観への配慮など守るべき規制が異なる。当該地域においては、「京都市風致地区条例」の高さ規制が最も厳しく、建替え時には配慮が必要となる。

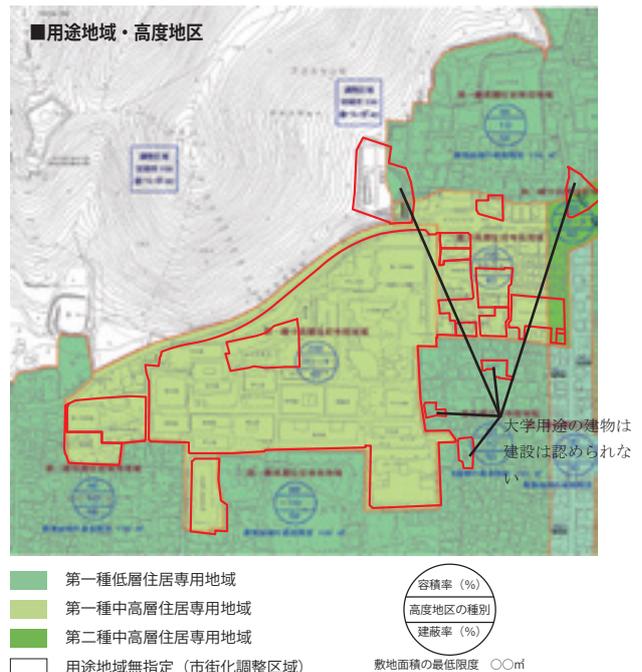


図 3-8 京都市都市計画図（用途地域・高度地区）

表 3-5 高度地区における建築物の高さ制限の考え方

種別	高度地区の種別	種別	高度地区の種別	種別	高度地区の種別
10m	第一種低層住居専用地域	10m	第一種中高層住居専用地域	20m	第一種中高層住居専用地域
12m	第一種低層住居専用地域	12m	第一種中高層住居専用地域	20m	第二種中高層住居専用地域
15m	第一種低層住居専用地域	15m	第一種中高層住居専用地域	20m	第一種中高層住居専用地域
15m	第一種低層住居専用地域	15m	第一種中高層住居専用地域	20m	第二種中高層住居専用地域
15m	第一種低層住居専用地域	15m	第一種中高層住居専用地域	20m	第一種中高層住居専用地域
15m	第一種低層住居専用地域	15m	第一種中高層住居専用地域	20m	第二種中高層住居専用地域
15m	第一種低層住居専用地域	20m	第一種中高層住居専用地域	20m	第一種中高層住居専用地域
15m	第一種低層住居専用地域	20m	第一種中高層住居専用地域	20m	第二種中高層住居専用地域

注：20m以上の高度地区は、20m以上の高さまで建築可能。

※上記凡例は「図 3-8 京都市都市計画図（用途地域・高度地区）」の色と対応する。

【歴史的風土特別保存地区】（古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法〔古都保存法〕）

「古都」における「歴史的風土」の保存を目的とした古都保存法に基づき、京都市において歴史的風土特別保存地区が指定され、この地区内においては、農林漁業用の小規模な建築物や地下に設ける建築物などを除いて建築物等の新築や宅地の造成、木竹の伐採、土石の堆積等の現状変更行為は原則として認められていない。図3-7の⑧第一バイク置場の一部が本地区に指定されている。

【京都市風致地区】（都市計画法）

都市の良好な自然的景観を維持することによって、都市全体の美しさを保全し、併せて良好な生活環境を保持していくことを目的として、風致地区が定められ、新築・増改築などに際して、意匠・色彩等の許可が必要で、かつ建築物の高さ制限が設けられている。図3-7の①の敷地のほとんどが「風致第5種」に指定されており、建築物の最高高さは高度地区の指定よりさらに厳しい「15m以下」と定められている。その他、「山ろく型建造物修景地区」や「沿線型美観形成地区」に指定されている。

【眺望空間保全区域】（京都市眺望景観創生条例）

京都の優れた眺望景観を創出するとともに、これらを将来の世代に敬称することを目的として「京都市眺望景観創生条例」が定められている。この条例に基づき、龍安寺近景デザイン保全地区および鹿苑寺（金閣寺）近景デザイン保全地区に属しており、高さ規制や屋外広告物の新基準、塔屋の高さ算入などより厳しい条件となっている。

【土砂災害防止法による区域の指定】（土砂災害警戒区域等における土砂災害防止対策の推進に関する法律／京都府）

土砂災害のおそれのある区域や建築物に危害が生じ、住民に著しい危害が生じるおそれのある区域を明らかにし、危険の周知、警戒避難体制の整備等のソフト対策を推進するものである。本区域に柵野グラウンドが指定されている。また、衣笠キャンパス、西園寺記念館、原谷グラウンドの一部の敷地についても基礎調査が実施され、今後手続きを経て区域指定を行う見込みである。

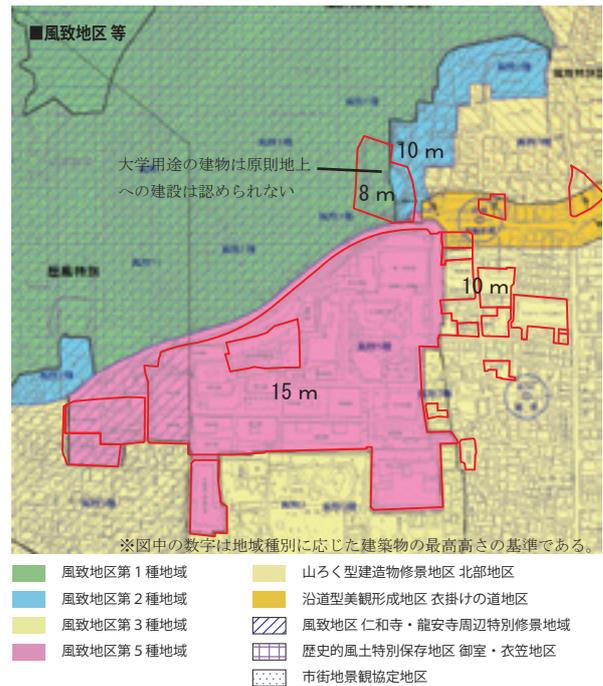


図3-9 京都市都市計画図（風致地区等）

表3-6 風致地区における建築物の高さ、建ぺい率の基準

地域の種別	高さ	建ぺい率
風致地区第1種地域	8m以下	20%以下
風致地区第2種地域	10m以下	30%以下
風致地区第3種地域	10m以下	40%以下
風致地区第4種地域	12m以下	40%以下
風致地区第5種地域	15m以下	40%以下



図3-10 京都市都市計画図（眺望景観保全）

3.1.6 衣笠キャンパスの施設概要

衣笠キャンパスには、建物竣工以降に策定された高度地区や風致地区の高さ規制の基準を満たしていない既存不適格建物が存在する。これら対象建物の建て替え時には、現行の高さ規制（15 m又は12 m）が適用されるため、既存の建物高さより低くする必要がある。表3-8においては、衣笠キャンパス内の施設の耐震状況が確認できる。耐震対策は安全・安心への対応として年次計画的に進められ、2015年4月現在において耐震補強が未完了建物は現図書館と学生会館の2棟である。

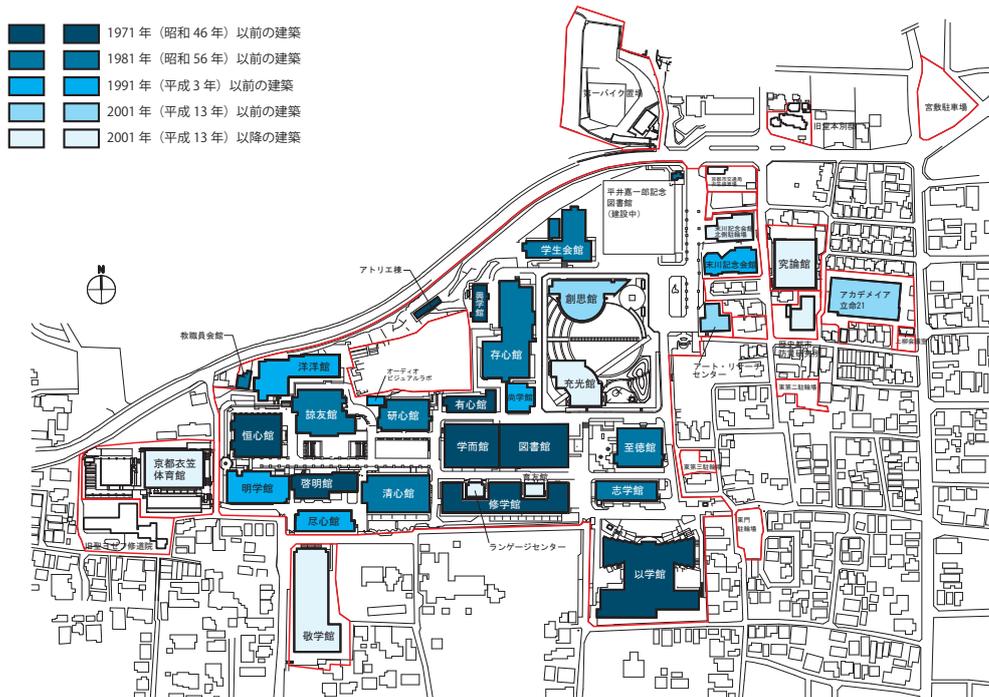


図3-11 既存建物における築年数の状況（2015年4月時点の情報）

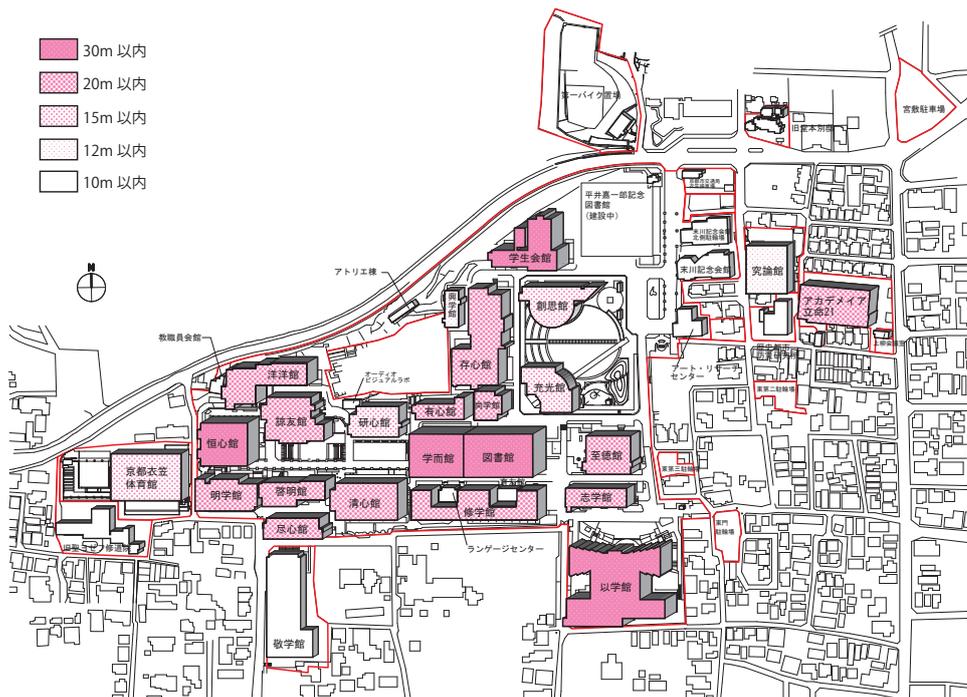
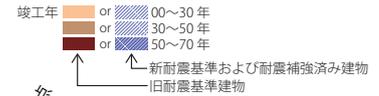


図3-12 既存建物における建物高さの状況（2015年4月時点の情報）

表 3-8 京都キャンパス内主要建築物の施設概要表と築年数・耐震性能に関するグラフ

- ◎ 1970年 京都市風致地区条例施行
- ◎ 1972年 京都市市街地景観条例施行
- ◎ 1973年 都市計画法に基づく高度地区施行
- ◎ 1996年 新しい用途地域制の適用
- ◎ 2006年 改正建築基準法
- ◎ 2007年 新景観政策、京都市眺望景観創生条例施行



場所・名称	延床面積	建築面積	構造	階数・高さ	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000	2010	2020	2030	2040	2050
有心館	2,302	589	RC	4F/-・ 17.2m			1961年				耐震補強▶	築54年				
興学館	939	545	RC	2F/-・ 11.1m			1963年				耐震補強▶	築52年				
以学館	15,110	4,104	RC	4F/1F・ 22m			1965年				耐震補強▶	築50年				
恒心館	6,899	1,432	RC	5F/-・ 22.1m			1965年				耐震補強▶	築50年				
修学館	11,944	2,193	RC	5F/1F・ 17.3m			1966年				耐震補強▶	築49年				
ランゲージセンター	362	185									2003年		築12年			
啓明館	3,188	983	RC	4F/-・ 19.2m			1966年				耐震補強▶	築49年				
図書館	7,779	2,331	RC	5F/1F・ 25.1m			1967年					築48年				※2016年度中解体予定
第一体育館	4,640	2,701	SRC	2F/-・ 21.1m			1969年									撤去解体
学而館	7,003	1,474	RC	4F/1F・ 25.1m			1970年				耐震補強▶	築45年				
学生会館	7,583	1,603	RC	5F/1F・ 23m			1973年					築42年				※未耐震
志学館	3,151	904	RC	4F/1F・ 15.1m			1974年				耐震補強▶	築41年				
諒友館	4,993	1,626	RC	5F/1F・ 16.9m			1976年				耐震補強▶	築39年				
清心館	7,669	1,633	RC	4F/1F・ 18.1m			1977年				耐震補強▶	築38年				
至徳館	6,141	1,326	SRC	4F/1F・ 14.8m			1979年				耐震補強▶	築36年				
研心館	4,364	1,020	RC	4F/1F・ 14.8m			1979年				耐震補強▶	築36年				
存心館	9,957	2,440	SRC	4F/1F・ 16.5m			1981年				耐震補強▶	築34年				
末川記念会館	2,569	821	SRC	3F/1F・ 9.0m			1983年					築32年				
洋洋館	9,250	1,408	SRC	6F/1F・ 20m			1988年					築27年				
尚学館	2,141	467	RC	4F/1F・ 19m			1988年					築27年				
尽心館	4,202	743	RC	5F/1F・ 18.4m			1989年					築26年				
明学館	5,223	1,226	SRC	4F/1F・ 18.3m			1990年					築25年				
アカデミア立命21	6,492	2,024	RC	4F/1F・ 16m			1992年					築23年				
アートリサーチセンター	1,258	435	S	2F/1F・ 10.0m			1999年					築16年				
創思館	5,018	1,447	RC	4F/-・ 15m			2001年					築14年				
数学館	6,444	2,144	S	2F/1F・ 10.0m			2004年					築11年				
歴史都市防災研究所	1,370	493	RC	2F/1F・ 8.2m			2006年					築9年				
充光館	3,445	1,142	S	3F/1F・ 13.8m			2007年					築8年				
育友館	504	178	S	2F/1F・ 9.3m			2008年					築7年				
京都农立体育館	9,409	2,321	SRC	1F/3F・ 15m			2012年					築3年				
突論館	3,717	1,298	RC	3F/-・ 12m			2014年					築1年				
氷室 西園寺記念館	5,380	1,568	RC/ SRC	3F/1F・ 13.2m			1988年					築27年				
朱雀 中川会館	27,130	3,955	SRC	7F/1F・ 30.8m			2006年					築9年				

※上表は2015年度時点の情報を示す。
 ※平井嘉一郎記念図書館は建設中。

3.2 これまでのキャンパス整備の取り組み

3.2.1

これまでのキャンパス整備

立命館大学では、これまでも新たな教学展開、過ごしやすいキャンパス創造に向けたキャンパス整備を進めている。

①立命館大学の学びのシステムを支える整備

学習者が中心となる教育を一学びのコミュニティの創造一、学生同士で学びあうシステム、学習者の視点から教育力強化を推進（FD: Faculty Development）などの教学システムを支える施設整備を進めている。

②教学改革、授業スタイルの多様化に対応する教室整備

大規模・固定座席の教室だけでなく、中規模、小規模教室やPBL型授業に対応可能な教室の需要に合わせ、教学展開とともに、整備を進めている。

③学生数増への対応

新学部の設置に合わせ、教室や食堂など学生数の増加に対応した整備を進めている。

④教員数増への対応

学部新設、教学展開などに伴う、教員数の増加に対応した整備を進めている。

⑤多様な学びの場や居場所づくり

ぴあら、学部ラウンジ、コモンズなど、学生の自主的な学びや研究、活動を行える環境の整備を進めている。

⑥QOLの向上

女子学生、女性教職員の増加により、安全・安心に加えてアメニティの充実に配慮した整備を進めている。近年新棟建設時には快適性を求めた整備に取り組み、よりキャンパス全体のQOL向上につながるよう配慮している。

⑦安全・安心への対策

防犯対策として、警備員の配置、見通しの確保、キャンパス内へ防犯カメラの設置やトイレの改善を進めている。また、キャンパス全面禁煙にも取り組んでいる。バリアフリー対策として、スロープや昇降機の設置、多目的トイレの設置を進めている。

⑧耐震対策

衣笠キャンパスでは、安心・安全のため、耐震改修を優先的に実施し、おおむね整備を終了している。未耐震建物は2棟であり、現図書館は平井嘉一朗記念図書館（新棟B）建設後解体が決定しており、学生会館が未耐震建物として残っている。

⑨近隣への配慮

衣笠キャンパスでは、近隣の良好な住環境を維持できるよう、通学経路の指定等に取り組んでいる。

⑩ R2020 前半期のキャンパス計画

これまで、キャンパス全体の整備計画の検討を行ってきた。現在、アカデミックプランや経営戦略、建築の専門的検討などに基づき、2011年度に提示した「キャンパス計画」をベースに整備内容の優先順位を設定し、R2020の既存キャンパス整備を進めており、キャンパスマスタープランの検討作業も継続して進めている。

1. 衣笠キャンパス(KIC)の課題と整備方向

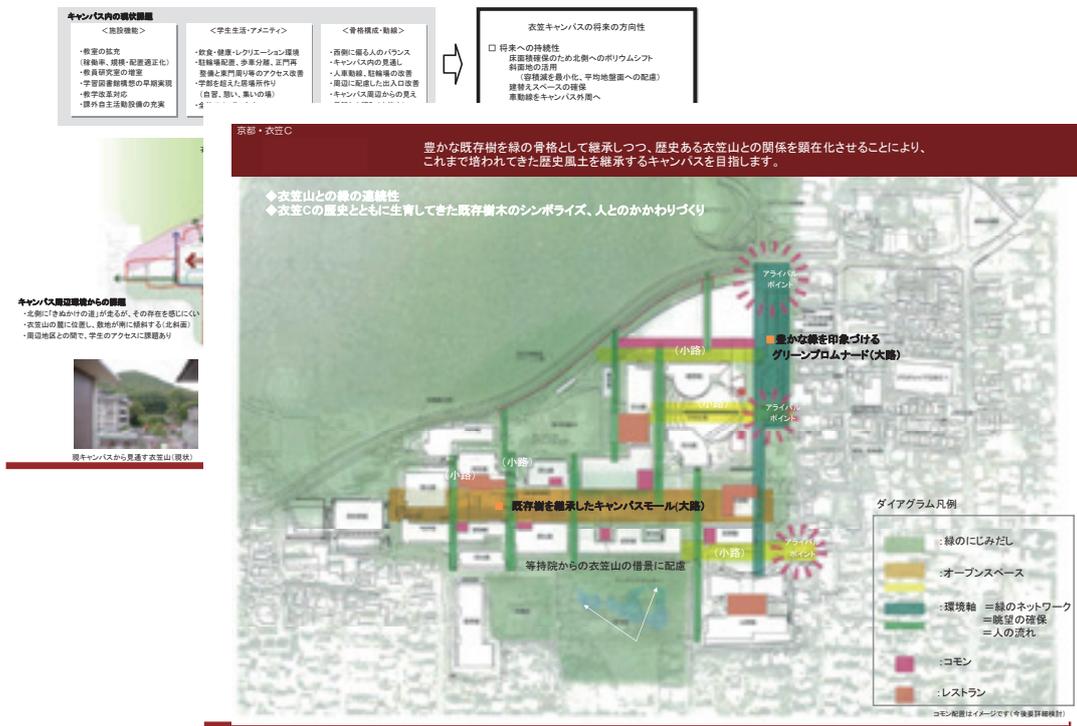


図 3-13 2011 年度のキャンパス計画検討資料

■京都衣笠体育館



写真 3-14 京都衣笠体育館東側外観



写真 3-15 憩いの広場

主用途：体育館
 (憩いの広場、駐輪場併設)
 延べ面積：9,409.49 m²
 階数：地上2階 / 地下2階
 竣工年月：第1期 2012年11月、第2期 2013年9月
 供用開始年月：第1期 2013年2月、第2期 2013年9月

■究論館



写真 3-16 究論館北西面外観



写真 3-17 究論館内観

主用途：大学院共同研究室、リサーチcommons
 延べ面積：3716.93 m²
 階数：地上3階
 着工年月：2014年4月
 竣工年月：2015年2月
 供用開始年月：2015年4月

■インターナショナルハウス大將軍



図 3-15 インターナショナルハウス大將軍外観イメージパース

主用途：国際寮
 (一部セミナー、研究者滞在用スペースあり)
 延べ面積：5,417.82 m²
 階数：地上4階
 寮室数：190室
 ドミトリールーム(短期宿泊室、4人部屋)数：12室
 ゲストルーム(研究者用居室)数：5室
 竣工年月：2015年8月
 供用開始年月：2015年9月

■平井嘉一郎記念図書館



図 3-16 平井嘉一郎記念図書館外観イメージパース

主用途：図書館(1Fにカフェ設置検討中)
 延べ面積：14,585.27 m²
 階数：地上3階 / 地下2階
 着工年月：2014年1月
 (2013年9月より旧体育館解体開始)
 竣工年月：2015年12月
 供用開始年月：2016年4月

※平井嘉一郎記念図書館の上記内容は2015年4月時点のものである。建設計画、竣工時期などは打合せにより変更されることがある。

3.3 京都キャンパスの現状と課題

3.3.1

衣笠キャンパスの現状と課題

施設整備の検討状況

(西園寺記念館、究論館、アカデメイア立命21、歴史都市防災センターなどその他キャンパス周辺施設を含む)

1981年の衣笠キャンパス一拠点化から四半世紀が経過し、施設の老朽化や耐震補強等の施設整備の必要性、さらには女子学生の増加や国際化への対応、身障者等のアクセシビリティ向上などの課題も抱えている。

衣笠キャンパス再整備計画においては、京都衣笠体育館、究論館が竣工し、平井嘉一郎記念図書館の整備が進んでいる。今後は現図書館の解体跡地における再整備計画の検討をはじめ、教育・研究環境を維持・向上させながらキャンパスの再整備を進めることが重要となる。建ぺい率が上限を向かえ、建物高さなどの法的規制が厳しい衣笠キャンパスの再整備においては、計画的に整備を進めることが極めて重要であり、教学条件の改善に向け現在順次整備を進めている。右図は施設整備関連において、全学的かつ優先的に検討すべき課題について記載している。年次的な維持修繕等課題については記載していない。これらの多くの課題を個別に検討するのではなく、共有・調整しながら衣笠キャンパス全体最適を目指した再整備計画の検討を進める必要がある。

【2016～2020年の学部構成（予定）】

【学部】

- ・法学部
- ・産業社会学部
- ・国際関係学部
- ・文学部
- ・映像学部

【研究科】

- ・法学研究科
- ・社会学研究科
- ・国際関係研究科
- ・文学研究科
- ・応用人間科学研究科
- ・言語教育情報研究科
- ・先端総合学術研究科
- ・映像研究科

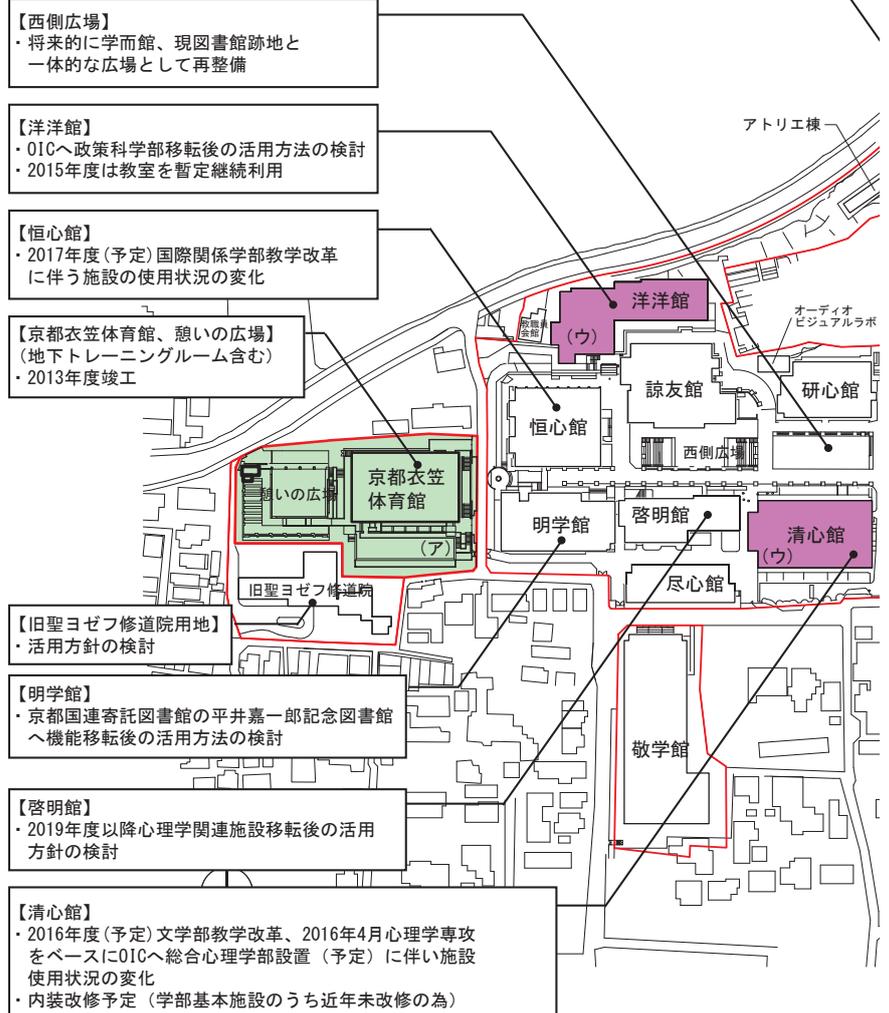
2015年度に政策科学部、政策科学研究科が大阪いばらきキャンパス（OIC）へ移転

【R2020既存キャンパス整備検討対象建物 凡例】

- (ア)** R2020前半期既存キャンパス整備にて整備が完了又は進行している建物
- (イ)** 解体予定建物
跡地整備方針の検討を行う
- (ウ)** 内装改修予定建物
計画的な改修計画の検討が必要
- (エ)** 建物の解体又は改修の方針や時期の検討が必要な建物

【存心館】
・2016年(予定)法学部教学改革に伴う施設使用状況の変化
・内装改修予定
(学部基本施設のうち近年未改修の為)

【興学館】
・2013年度学生への備品貸出等の受付を旧第一体育館より移設



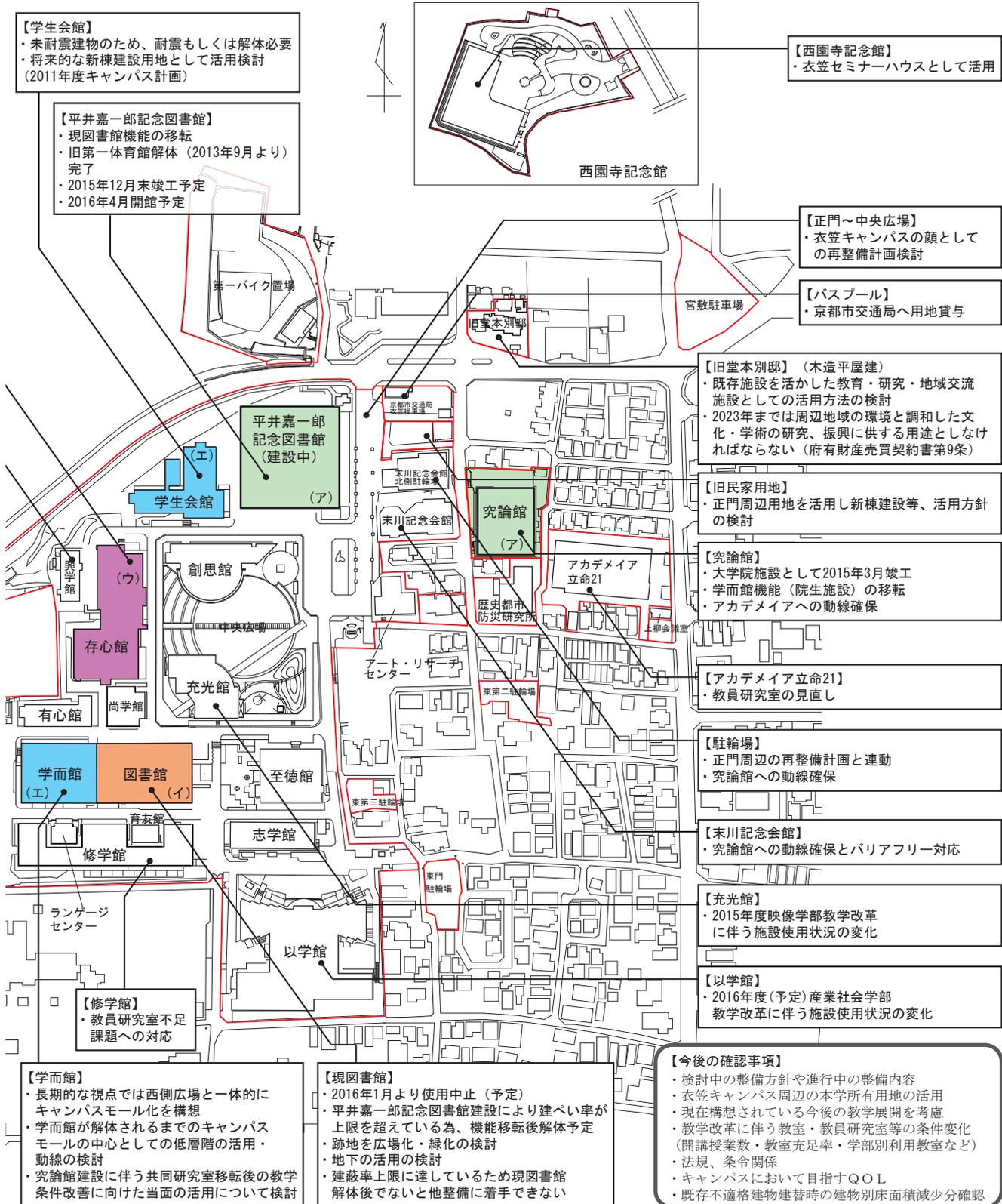


図 3-17 京都キャンパスの施設整備の検討状況

3.3.2

朱雀キャンパスの現状と課題

京都・朱雀キャンパスは京都市内、二条駅の最寄りという立地特性を活かし、周辺地域との連携向上を図る。また、平安京時代からの京都の中心部である朱雀大路上に位置しており、衣笠キャンパス同様、歴史的・文化的コンテキストを踏まえたキャンパス計画を行うことが望ましい。

朱雀キャンパスの建物としては中川会館と防災倉庫のみであり、法科大学院や公共政策大学院などの教育・研究施設機能と法人本部機能などが主要な用途となっている。2015年4月には経営管理研究科が大阪いばらきキャンパスに展開した。これらを踏まえ、既存機能や立地特性を活かした施設の有効活用と他キャンパスとの連携について検討することが重要である。



写真 3-18 竣工当初の朱雀キャンパスの航空写真

■京都朱雀キャンパス



・商業地域



・沿道型美観形成地区



・遠景および近景デザイン保全区域

図 3-18 京都市都市計画図



図 3-19 朱雀キャンパスの機能分布各階平面図

chapter 4

京都キャンパスの空間コンセプト

4.1 衣笠キャンパスの空間コンセプト

4.2 空間コンセプトに基づく基本的な考え方

4.3 衣笠キャンパス空間構成の概要

chapter 4では、京都キャンパスの特色を踏まえ、目指すキャンパス像やキャンパス整備の空間コンセプトを設定する。本マスタープランでは、衣笠キャンパスについて記述する。

4.1 衣笠キャンパスの空間コンセプト

歴史と文化の都市・京都から世界へ発信する伝統と創生の人文社系キャンパス

(R2020 既存キャンパスの整備よりコンセプト引用)

京都・衣笠キャンパスは世界遺産・京都という立地特性を活かし、歴史的・文化的コンテクストを踏まえたキャンパス計画を行う。2013年には京都キャンパスのコンセプトの提案を行った。今後は、フレームワークプランの検討を進め、整備方針の方向性を検討しながら、コンセプトを定めていく。

1、京都・衣笠キャンパス周辺の歴史・文化的コンテクストを踏まえたキャンパス計画

キャンパス周辺の町並みとの調和や衣笠山への景観の連続性など、歴史文化都市・京都に立地する大学としての役割を意識した整備を行う。

2、キャンパスモールとグリーンプロムナードの主軸ときぬかけの道を活かした基本骨格

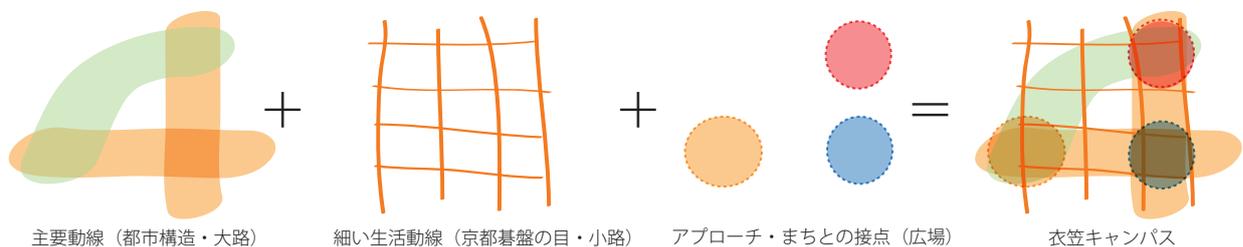


図 4-1 コンセプトダイアグラム

東西軸のキャンパスモールと南北軸のグリーンプロムナードを主軸とし、これにきぬかけの道を活かした三角形の軸を骨格とし、これにグリッド状の動線を重合した空間構成を基本とする。3軸の交点となる正門・西門は、それぞれ鹿苑寺(金閣寺)・龍安寺へと連なる道の結節点であることを意識して整備する。

3、個の集合体としての力を発揮し、地域にも開かれたキャンパスづくり

衣笠キャンパスは、敷地が住宅街に点在しており、複数の敷地の集合体として成り立っている。また、学部基本棟を核とした多核心型建物配置となっている。この様子は、古来知の集積地であった寺院群、例えば大徳寺や妙心寺などの本山において、塔頭が建ち並び、個の集合体としての存在感を作り出しながら、街にも開かれた空間を提供している様子にもなぞらえることが出来る。複数の敷地・建物がそれぞれの個性を保持しつつ、かつ連携し、個の集合体として総合的な力を発揮するようなキャンパス整備を図り、地域にとっても開かれた知の集積地を継続的に形成して行くことを目指す。

4.2 空間コンセプトに基づく基本的な考え方

衣笠キャンパスの空間コンセプトに基づく基本的な考え方

キャンパスの軸線の創出

- ・東西と南北の軸線をつくり、わかりやすいキャンパス空間をつくる
- ・歩行者の主要動線は十分な幅員を確保する
- ・東側の小規模キャンパスとの構内動線をつくる

良好な景観形成・周辺と連続した緑の整備

- ・衣笠山や等持院と連続した樹木の保全と創出をはかる
- ・キャンパス内にボリュームある緑をつくる
- ・周辺の住宅地や寺院の環境や景観を守る観点から、キャンパス南側の建物ボリュームを将来的に一部低層とする必要がある（3.1.6 参照）。同時にキャンパス建物について緑化や屋根形状、衣笠山への眺望などに配慮する
- ・軸線の結節点でありキャンパスの玄関口である正門を充実整備する

屋外空間の整備、各種コモンズ施設などの改善拡充を通じた

キャンパスのアメニティの向上

- ・キャンパスの魅力や活力の向上のため、学生や教職員、地域の人々の心地よい居場所（広場やコモンズなど）をキャンパスの軸線上につくる

施設の機能向上と改善

- ・既存施設の有効活用を図る
- ・時代に応じたアカデミックプランやニーズに対応しやすい教学・研究施設をつくる
- ・キャンパス内人口の過度の偏在を避ける点と南側の将来的な床面積減を視野に入れ、建物床面積を将来的に北側へボリュームシフトすることを検討する。

4.3 衣笠キャンパス空間構成の概要

かつての衣笠キャンパスは広場を中心とした空間構成であったが、教学展開のために広場に学舎棟が建設され、空間構造が変化した。そこで、新たなマスタープランにおいては、狭隘化の解消を目指しながら、広場型から軸線型への再編を試みようとしている。京都のグリッド型・大路／小路・みち空間といったアーバンファブリックを引用し、東西軸には新たにキャンパスモールを、また南北軸にはグリーンプロムナードを配し、それらと緑の小路を直交させ、周辺のまちへ連続するような景観づくりを意図している。さらに、これらの2軸に加えて、仁和寺・龍安寺から鹿苑寺（金閣寺）方面に至る「きぬかけの路」を従来のように背面道路のような扱いではなく、歴史回廊として捉え、キャンパスを開くように計画している。

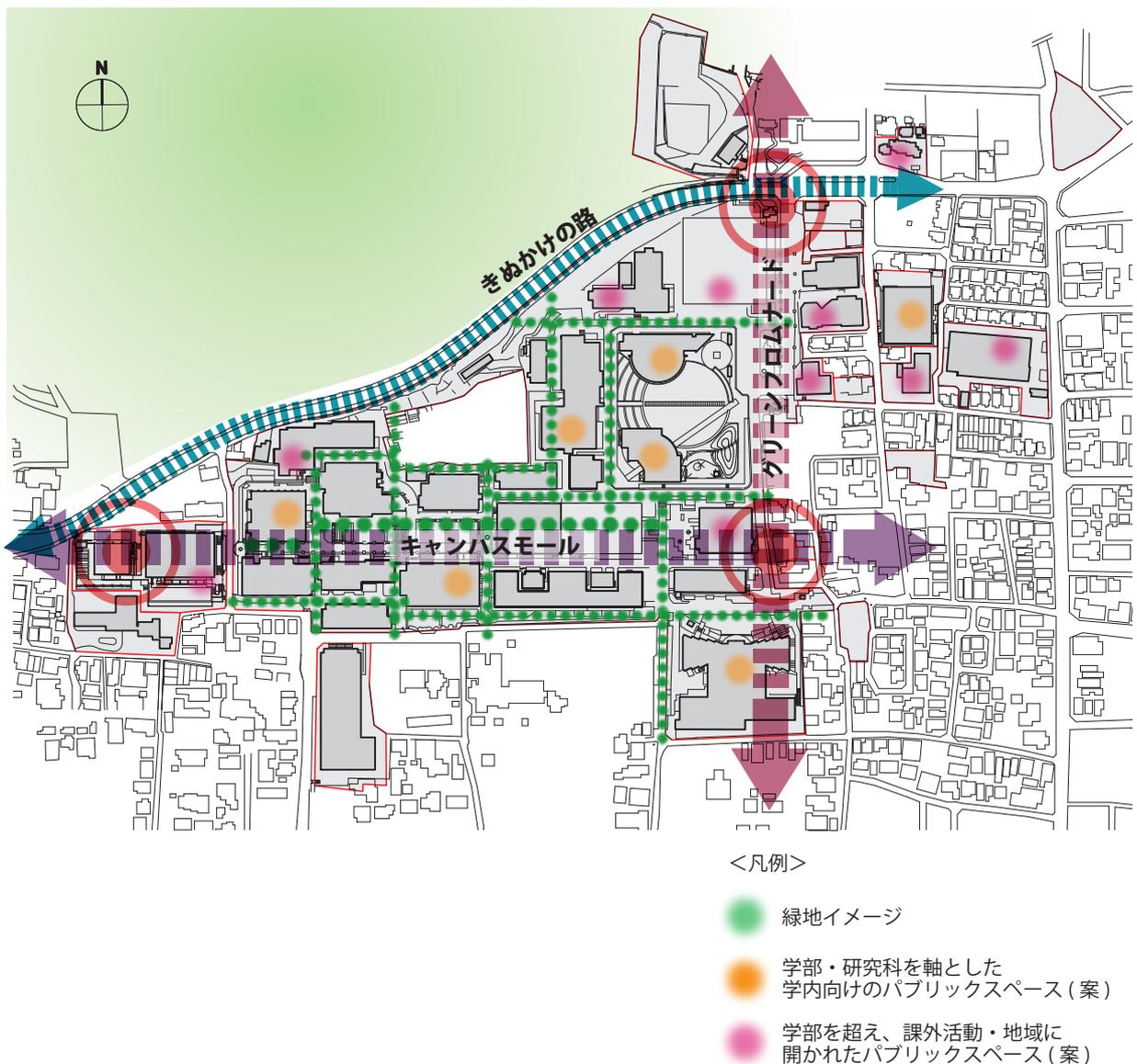


図 4-2 衣笠キャンパスの空間構成イメージ

chapter 5

部門別課題の把握と フレームワークプランの検討

衣笠キャンパス

(西園寺記念館、究論館、アカデメイア立命 21、
歴史都市防災研究所などその他キャンパス周辺施設を含む)

- 5.1 ゾーニング・建物配置
- 5.2 交通
 - 5.2.1 交通計画の考え方
 - 5.2.2 2014 年度の検討状況
 - 5.2.3 交通主要課題の抽出と検討の方向性
 - 5.2.4 主要課題の改善に向けた具体的な選択肢(案)
- 5.3 パブリックスペース
 - 5.3.1 パブリックスペースとは
 - 5.3.2 立命館大学におけるパブリックスペースの必要性
 - 5.3.3 パブリックスペースにおける課題の抽出と検討の方向性
 - 5.3.4 衣笠キャンパスとして大切にしたいパブリックスペースの考え方
 - 5.3.5 衣笠キャンパスの特性から見たパブリックスペース配置の考え方
- 5.4 キャンパスデザイン
 - ① 空間の質、② 建物外観デザイン
 - ③ 屋根・庇デザイン、
 - ④ 建物高さ・壁面線・建物ボリューム
 - ⑤ サイン計画、⑥ ランドスケープデザイン
 - ⑦ 眺望・景観・借景
- 5.5 緑地
 - 5.5.1 衣笠キャンパスにおける緑地の現状
 - 5.5.2 緑地整備の取り組み方針
- 5.6 安全・安心
 - 5.6.1 安全・安心の考え方
 - 5.6.2 ユニバーサルデザイン・バリアフリーへの配慮
 - 5.6.3 交通への配慮
 - 5.6.4 施設の維持管理、老朽化への対応
 - 5.6.5 防災・防犯への配慮
- 5.7 環境配慮

chapter 5 では、目指すキャンパスの実現に向けて、検討・配慮すべき内容を部門別にフレームワークプランとして示す。フレームワークプランは、概ね 15～30 年程度の中長期的なキャンパス全体の整備方針に基づく計画である。どのようなアカデミックプランにおいても配慮すべき考え方や対応可能な考え方について述べている。

フレームワークプランの概要

立命館大学のフレームワークプランは、次の7つの分野について示す。ゾーニング・建物配置、交通、パブリックスペース（屋外のオープンスペースなど）は土地の有効活用の観点から方針を共有することが有効である。また、大学キャンパスが社会へ果たす役割として配慮が必要な分野として、安全・安心、環境配慮の考え方を取り入れたキャンパスの検討を行う。さらには、大学のアイデンティティを創出するキャンパスデザインや緑地についても検討を行うことが大切である。

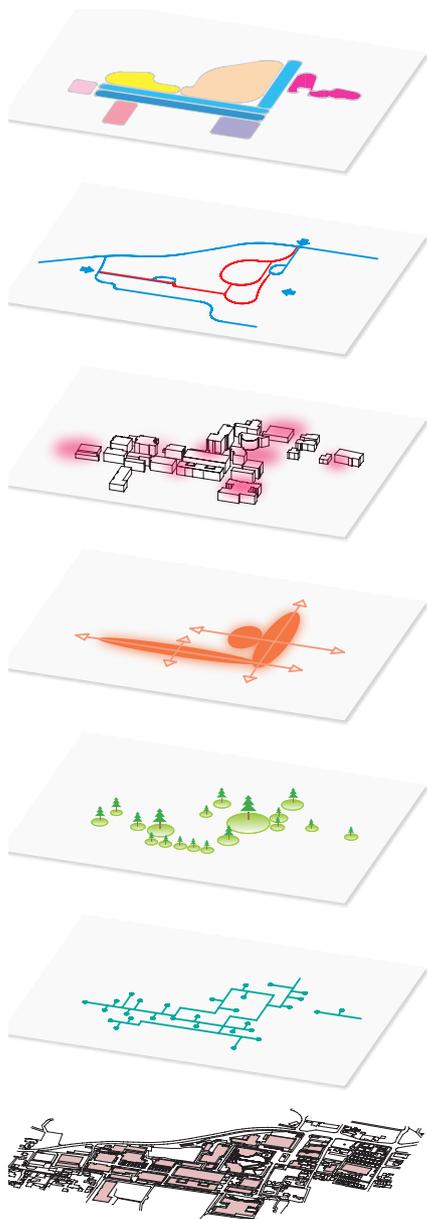


図 5-0 部門別方針が多層レイヤ状に構成されるイメージ

1. ゾーニング・建物配置

- ①キャンパスの特性を活かしたゾーニング計画
- ②屋外のパブリックスペースによるキャンパス全体の緩やかな連繋
- ③建物ボリュームの再配置を考慮した土地の有効活用

2. 交通

- ①キャンパスゲートはゲート毎の位置づけに応じた空間づくりを検討
- ②キャンパスモール周辺は歩行者が安全・安心に移動、活動できる主要動線を整備する
- ③キャンパス外周部や建物間の細かな通路は補助動線として位置づけ整備する
- ④車両の主要なアクセス動線はキャンパス北側「きぬかけの路」からとする
- ⑤歩行者、自転車・バイク利用者の主要なアクセス動線はキャンパス東側、南側からとし、利便性に配慮する。

3. パブリックスペース

- ①キャンパスの骨格を活かす
- ②空間的な序列化を図る
- ③学びや活動・交流、衣笠らしさが見える空間づくり

4. キャンパスデザイン

- ①空間の質
- ②建物外観デザイン
- ③屋根・底デザイン
- ④建物高さ・壁面線・建物ボリューム
- ⑤サイン計画
- ⑥ランドスケープデザイン
- ⑦眺望・景観・借景

5. 緑地計画

- ①衣笠山への緑の連続性の確保
- ②京都の気候・環境に適した植栽計画
- ③賑わいと潤いある緑地空間の提供
- ④適切な維持管理

6. 安全・安心

- ①ユニバーサルデザイン・バリアフリーへの配慮
- ②交通への配慮
- ③施設の維持管理、老朽化への対応
- ④防災・防犯への配慮

7. 環境配慮

5.1 ゾーニング・建物配置

ゾーニング・建物配置の考え方

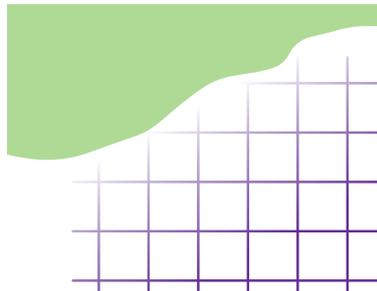
良好なキャンパス環境を長期的に維持するためには、法規的な条件や建築条件を踏まえ、持続可能なゾーニング・建物配置を検討する必要がある。そこで、次の3つの整備方針に沿って検討を行う。

①キャンパスの特性を活かしたゾーニング計画

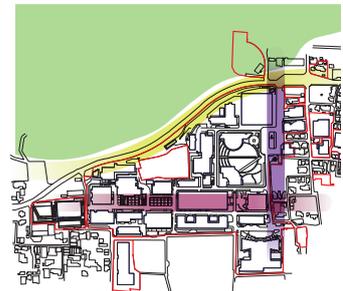
その場所の持つ特性やキャンパスの普遍的な要素、主要な機能との関係を考慮し、学園の教学方針に適合したゾーニング計画を行うことが望ましい。



衣笠キャンパスの骨格を決める「キャンパスモール（東西軸）」、「グリーンプロムナード（南北軸）」、「きぬかけの路」の3つの主要軸を活かす。



既存の細かい動線を活かし、京都のまちの「碁盤の目」のような、わかりやすい建物配置や生活動線を計画することが望ましい。



主要軸と細かい動線で構成されるキャンパスの特性を活かしてゾーニングを検討をする。

図 5-1-1 活かすべきキャンパスの空間構造イメージ

②屋外のパブリックスペースによるキャンパス全体の緩やかな連繋

キャンパス全体が緩やかに連続するように、円滑なキャンパス内移動が可能な動線計画を行うとともに、建物周りには、多様な交流拠点となる広場・ポケットパークなどのパブリックスペースの整備をはかることが望ましい。また、キャンパス全体の統一性を維持できるランドスケープ計画が肝要である。

キャンパス内移動（交通）については5.2にて述べる。
パブリックスペースの整備方針については、5.3にて述べる。



写真 5-1-1
活かしたい屋外のパブリックスペース（中央ひろば）キャンパスを緩やかにつなげるイメージ

③建物ボリュームの再配置を考慮した土地の有効活用

効率的な施設の利用を検討しながら、既存不適格建物の建て替え時には、建物高さなどの規制を遵守し、低層化に伴うキャンパス全体の建物ボリュームの再配置が必要である。また、建物配置については、将来の歩道確保・拡幅を考慮するとともに、既存建物の高さや壁面線に配慮したデザイン計画が望ましい。

キャンパス全体を次の6つのゾーンに分けて土地利用など、目指すキャンパス像の実現に向けたゾーン毎の整備コンセプトの検討を進める。

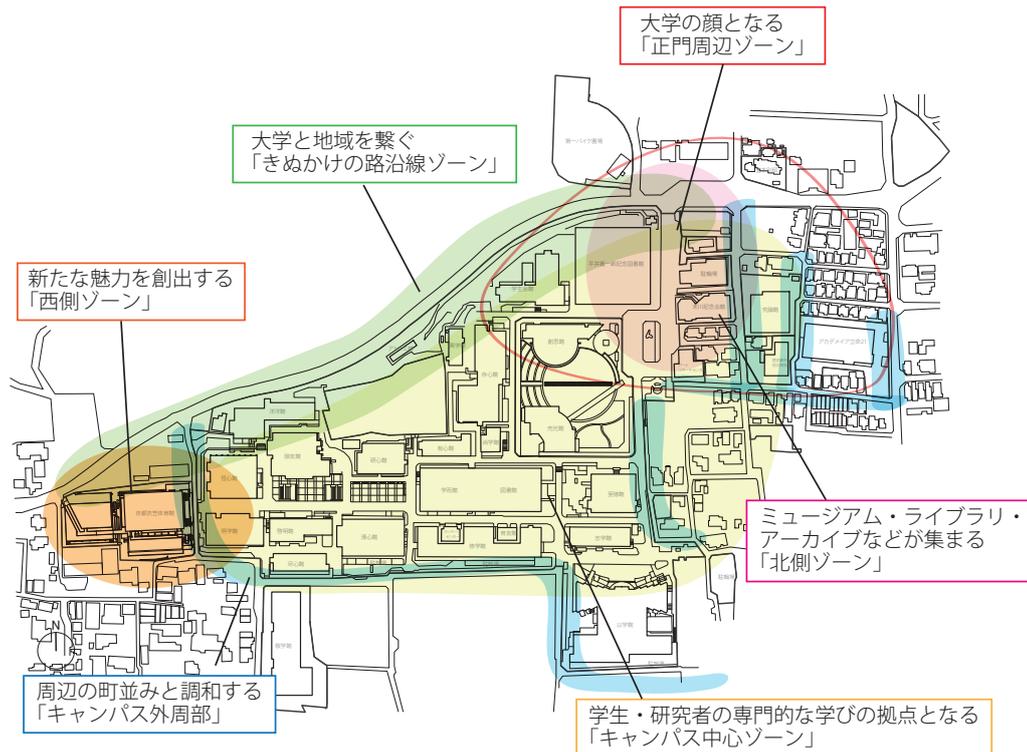


図 5-1-2 キャンパスゾーニングイメージ

**大学の顔となる
「正門周辺ゾーン」**

大学の顔として相応しい雰囲気を感じられるよう整備が必要である。多くの人を受け入れるゾーンであるため、広場や歩道を確保し、安全・安心に配慮することが望ましい。単一の用途に留まらず、大学や学部を超えた多様な学び・交流・活動の場となるように十分に検討を行う。

**大学と地域を繋ぐ
「きぬかけの路沿線ゾーン」**

立命館が景観保全や社会貢献に資する大学としての役割を果たす場として、国内外から多くの観光客が訪れる「きぬかけの路」の魅力アップに繋がるよう整備をはかる。

**専門的な学びの拠点となる
「キャンパス中心ゾーン」**

教室や研究室などが集まるキャンパスの中心ゾーンは、学部毎の充実を図る。専門的な学びをサポートするため、多様な学びの場や生活の質を向上させるパブリックスペース整備を合わせて検討することが望ましい。

ミュージアム・ライブラリ・アーカイブ機能が集まる「北側ゾーン」

図書館やアトリサーチセンターなどのキャンパス内施設と国際平和ミュージアムなどのキャンパス周辺施設が連携しやすいよう検討する。施設やスペースの連携利用を前提とした管理・運営についても合わせて検討していくことが大切である。

**新たな魅力を創出する
「西側ゾーン」**

龍安寺方面から訪れる人に対しての大学の西の顔として位置づけて整備・活用方法を検討することが望ましい。新たに整備された新衣笠体育館と交流広場の特徴を活かし、スポーツ・健康をサポートする分野との連携を検討する。

**周辺の町並みと調和する
「キャンパス外周部」**

キャンパス外周部はキャンパス内から見た裏としての整備ではなく、周辺地域から見た表として、閑静な住宅街と調和するように計画する。

5.2 交通

5.2.1

交通計画の考え方

衣笠キャンパスの交通計画を考える上で、大切な視点を右記に示す。これらの考え方を踏まえ、交通計画では、「キャンパス内における移動」と「キャンパスへのアクセス」に分けて検討を行う。また、具体的な整備方針を検討する際は、キャンパス全体の管理・運営面と合わせて検討を行うことが望ましい。

キャンパス内における移動については、京都・衣笠キャンパスらしい快適な移動空間づくりを目指し、「街路の利用形態」、「キャンパス内における機能的配置」、「キャンパス内滞留人口分布」、「各門の入退出状況」などに配慮しながら検討を進める。キャンパスへのアクセスについては、周辺地域の状況に配慮しながら「学生の居住域」や「通学ルート」、「公共交通網」などを勘案して検討を進める。

図 5-2-1 の交通の方針①～⑤に示す内容は様々な条件をもとに、交通計画の検討において、キャンパス計画上大切にすべき考え方を整理したものである。これらをもとに、既存の敷地や施設の条件を踏まえて、交通計画の検討を行う必要がある。

【衣笠キャンパスの交通計画を考える上で大切な視点】

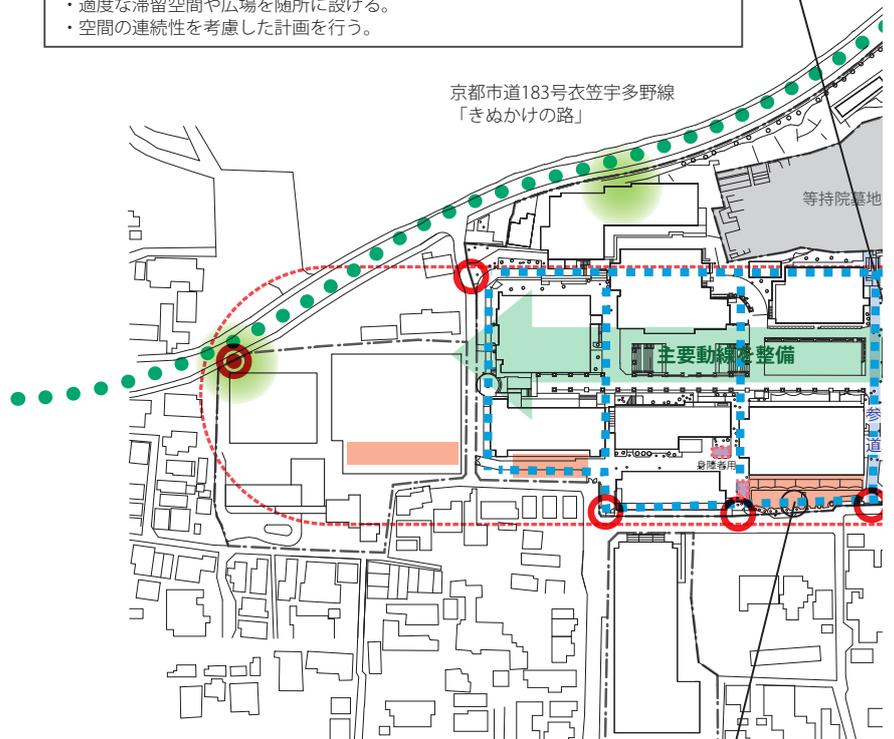
- 京都・衣笠キャンパスらしい、快適な移動空間づくり
- 安全・安心とともに、利便性に配慮
- 既存のキャンパス構造や公共交通を活かした取り組み
- 人や地域、環境にやさしい交通への誘導

**① キャンパスゲートは
ゲート毎の位置づけに応じた空間づくりを検討する**

- ・ゲート毎の位置づけや利用者の規模に応じた空間づくりを行う。
- ・ゲートまわりの見通しを確保し、安全・安心に配慮する。
- ・キャンパス内へわかりやすく誘導する空間づくりを行う。
- ・利用率・安全性に配慮し、ゲートの効果的な位置や数について見直す。

**② キャンパスモール周辺は
歩行者が安全・安心に移動、活動できる主要動線を整備する**

- ・キャンパス中央部に東西の主要動線を整備する。
- ・サービス車両の通行を想定した補助動線や駐車スペースを確保する。
- ・主要動線は見通しを確保し、わかりやすい動線計画を行う。
- ・広い歩道を確保し、日常の混雑時や緊急時の通行に配慮する。
- ・適度な滞留空間や広場を随所に設ける。
- ・空間の連続性を考慮した計画を行う。

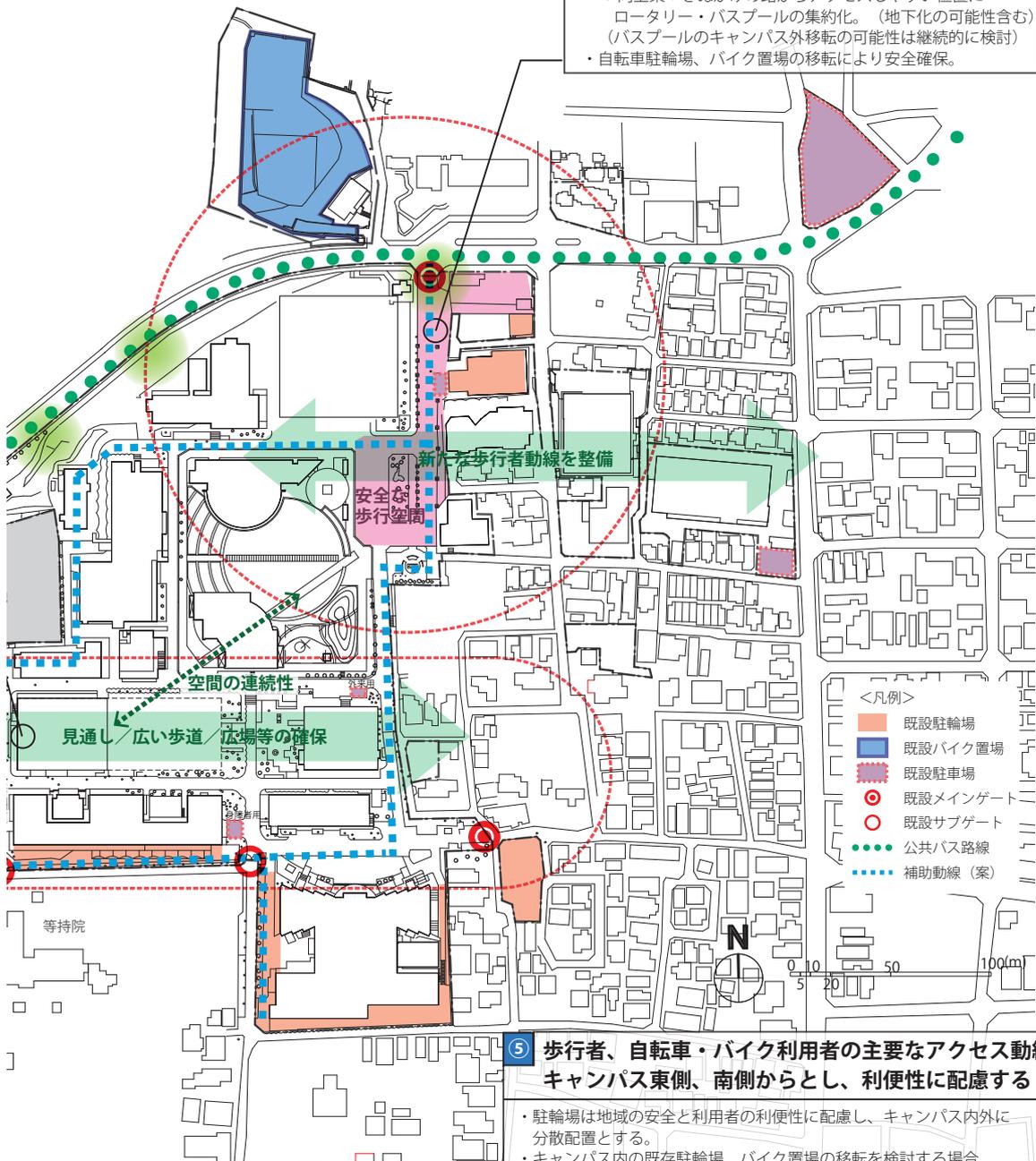


**③ キャンパス外周部や建物間の細い通路は
補助動線として位置づけ整備する**

- ・キャンパス外周部の駐輪場等の移設により、補助動線を確保する。
- ・キャンパス内を移動するサービス車両等の通行を想定
- ・緑地、歩道の整備
- ・緊急時の避難経路を確保

**④ 車両の主要なアクセス動線は
キャンパス北側「きぬかけの路」からとする**

- ・車両は京都市道183号衣笠宇多野線（きぬかけの路）からの入構を基本とする。（近隣住宅街への配慮）
- ・バスのアクセス性、安全性を向上させる。
⇒ 向上策：きぬかけの路からアクセスしやすい位置にロータリー・バスプールの集約化。（地下化の可能性含む）
（バスプールのキャンパス外移転の可能性は継続的に検討）
- ・自転車駐輪場、バイク置場の移転により安全確保。



**⑤ 歩行者、自転車・バイク利用者の主要なアクセス動線は
キャンパス東側、南側からとし、利便性に配慮する**

- ・駐輪場は地域の安全と利用者の利便性に配慮し、キャンパス内外に分散配置とする。
- ・キャンパス内の既存駐輪場、バイク置場の移転を検討する場合、キャンパス外に用地確保を検討する。
- ・キャンパス外では南東エリアに主要な駐輪場の整備を検討する。
- ・新たな歩行者動線として東西軸を整備。
- ・安全な歩行空間の確保。
- ・出入口付近は見通しを確保し、広場等を設ける。

図 5-2-1 交通の方針

5.2.2 2014年度の検討状況

衣笠キャンパスにおいて、将来にわたり安全・安心で快適なキャンパスライフを送るための交通に関する主要課題を抽出し、課題解決に向けた方策について検討を進めることが大切である。2014年度には「2020年までの京都キャンパスプラン策定部会」のもとに「パブリックスペース及び交通計画検討作業グループ」を設置し、各部局の将来構想や課題認識を共有しながら、課題やその改善に向けた方策、大切にすべき視点の抽出を行い、次のようにまとめた。

5.2.3

交通主要課題の抽出と検討の方向

衣笠キャンパスにおける交通計画を考える上で大切な視点にもとづき、当面優先的かつ重点的に検討を行う必要のある課題は、次の(ア)～(ウ)の3つである。現状の整備・運用状況について再確認を行い、より安全で安心かつ快適なキャンパスのあり方について検討を行う。

(ア) 正門周辺の安全確保

正門周辺は交通拠点が集出し、歩行者や各種車両の通行量が多く、それら動線の交差が集中し事故の危険性が高い。動線の機能性および安全性を確保しながら、正門周辺としての空間の構築・整理が必要。

関連検討 ⇒ キャンパスイメージについて/キャンパスゲートのあり方について

(イ) キャンパスモール周辺の安全で心地よい

「歩行空間」と「屋外の居場所」の確保

構内の学生が主に移動・滞在するエリアでは、限られた道路幅員にもかかわらずサービス車両等の移動および駐車場の用途にも使用され、スムーズなキャンパス内移動や余裕ある居場所空間の確保が難しい。円滑なキャンパス内移動と、屋外での場所の快適性を向上させる空間整備の検討が必要。

関連検討 ⇒ 屋外のパブリックスペースのあり方について

(ウ) 地域（キャンパス周辺エリア）の安全確保

主要な登校手段の一つである自転車等の駐輪場はキャンパス内外に点在し、状況により不便かつ非効率的な利用状態を示している。また周辺住宅街を自転車が多く通行し、地域の交通安全確保が必然となる。安全かつ効率的なキャンパスアプローチを確保し、地域の安全に貢献する周辺対策が必要。

関連検討 ⇒ 行政や地域、公共交通機関と、共に考える体制づくりについて

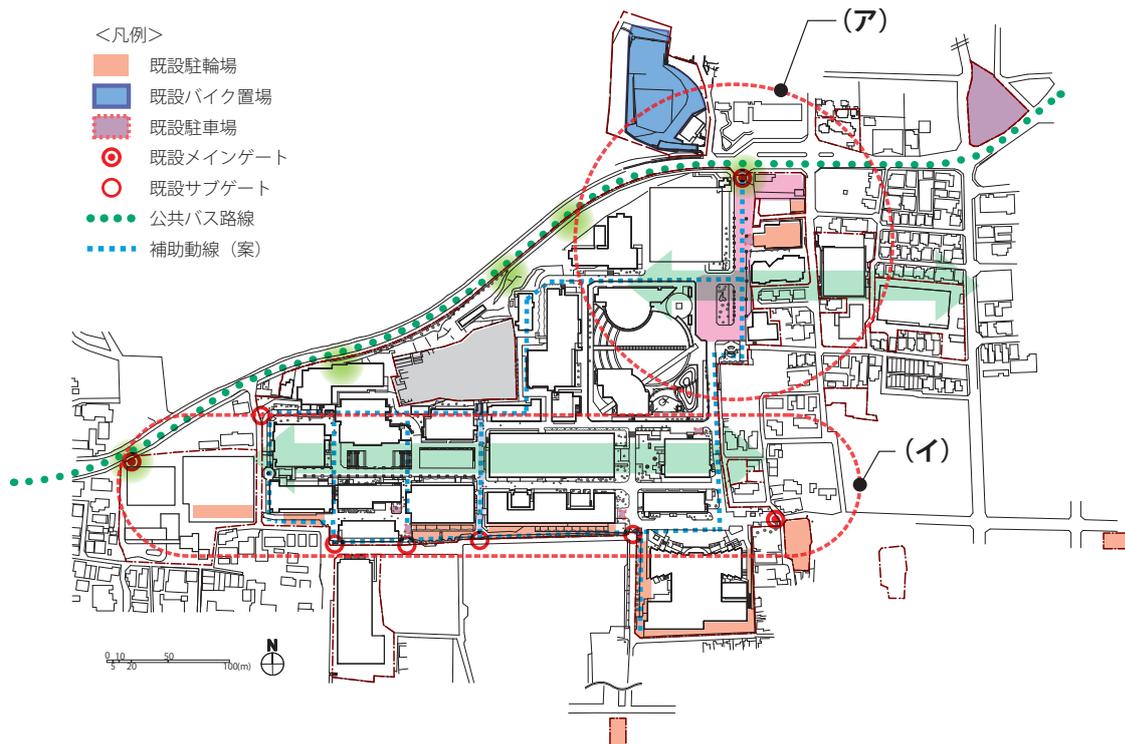


図5-2-2 優先的・重点的検討対象エリア

5.2.4

主要課題の改善に向けた具体的な選択肢

ここでは、(ア)～(ウ)の課題解決に向けた方策を複数示す。特に、(ア)の正門周辺の安全確保については、歩行者と車両の交差が少なくなるよう検討する。(イ)のキャンパスモール周辺の安全で心地よい「歩行空間」と「屋外の居場所」の確保については、動線整理と屋外空間の利用形態に配慮して検討する。(ウ)の地域(キャンパス周辺エリア)の安全確保については、学生等の利便性を担保しつつ地域の生活と安全・安心に配慮する。

具体的かつ優先的に取り組むべき整備内容については、表5-2-1に示した具体的な選択肢(案)をもとに、さらなる専門的な視点からの条件整理を行い、キャンパス全体のフレームワークプランを踏まえ、具体的なアクションプランに繋げていくものとする。

表 5-2-1 検討の方向性と具体的な選択肢(案)

《凡例》 ★: キャンパス内及び対外的な調整・検討が必要 ◆: キャンパス内調整のみ

検討の方向性		(ア) 正門周辺の安全確保	
ポイント		歩行者と車両の交差が少なくなるよう検討する	
具体的な選択肢(案)	A	バス	a. バスプールをキャンパス外へ移設 ★ b. バスプール及びロータリーのキャンパス内集約化と運用の見直し ★
	B	自転車/バイク	・駐輪場、バイク置場の移設・集約 a. キャンパス外 ★ b. キャンパス内 ◆
	C	歩行者	・安全な歩行空間の確保 ◆ ・東西軸の創出 ★
	D	サービス車両 / タクシー / 緊急車両 / 観光バス	・キャンパス内一時駐停車スペースは主要動線から外れた人通りの少ない場所に設ける ◆ ・運用規制の徹底・強化・見直し ◆
	E	門扉位置	・公共交通の利便性やキャンパス内外の安全性に配慮し、再整備の際には門扉設置位置の見直しを行う ★
検討の方向性		(イ) キャンパスモール周辺の安全で心地よい「歩行空間」と「屋外の居場所」の確保	
ポイント		動線整理と街路の利用形態に配慮した空間計画について検討する	
具体的な選択肢(案)	A	主要動線	・歩行者を優先した歩行空間の設定 ◆ ・見通しがよく広い歩道を確保する ◆ ・歩行空間の妨げにならないよう屋外の居場所を設ける ◆
	B	補助動線	・キャンパス運営・管理用のサービス車両等の通行を想定した補助動線を設定する ★ ・建物間の移動がしやすいよう出入口や動線に配慮する ◆
	C	サービス車両等の駐停車スペース搬入口	・主要動線から外れた補助動線上に設ける ★ ・運用規制の徹底・強化・見直し ◆ ・身体障害者用駐停車スペースは適切な場所に設ける ◆
	D	災害/緊急時の動線	・安全に避難できるよう広い歩道と一時避難スペースとなる広場を設ける ◆ ・緊急車両等が入構できるよう配慮する ◆
検討の方向性		(ウ) 地域(キャンパス周辺エリア)の安全確保	
ポイント		学生等の利便性ととも地域での生活と安全・安心について配慮する	
具体的な選択肢(案)	A	通学路	・細い住宅街の道の通行を少なくするよう駐輪場やバイク置場の位置を検討する ★
	B	キャンパスゲート(正門や東門などの各ゲート)	・人と車両の交差を少なくするよう配慮する ★ ・人口集中を分散できるように駐輪場の位置等を検討する ★ ・広い歩道と見通しの確保 ◆
	C	駐輪場・バイク置場	・まとまった駐輪場を複数確保する ★ a. キャンパス外、b. キャンパス内 ・移転の必要がある駐輪場・バイク置場はキャンパス外への移設を検討する ★ ・通学路やキャンパスゲートとの関係に配慮する ★ ・収容台数と前面道路の規模との関係に配慮する ★
	D	きぬかけの路	・見通しの確保 ★ ・安全な歩行空間の確保 ★

※ただし、緊急車両や身体障害者等が利用する車両は必要な場所まで入構できることを考慮する。

5.3 パブリックスペース

5.3.1

パブリックスペースとは

一般的な大学キャンパスにおけるパブリックスペースを検討する際の視点について整理を行う。

(1) パブリックスペースの 計画上の役割

パブリックスペースが持つ計画上の役割について、一般的に右記の7つのようなものがある。

パブリックスペースの計画上の役割

- ・キャンパスの伝統の表象となる空間の保全と形成
- ・空間的秩序の構築
- ・シンボリックな空間・景観で構成される骨格づくり
- ・建造物と外部空間との連関
- ・良好な景観とレクリエーション環境の維持、向上
- ・空間の魅力やアイデンティティを高める要素
- ・サステイナビリティ

(「いまからのキャンパスづくり－大学の将来戦略のためのキャンパス計画とマネジメント」より引用)

(2) パブリックスペースの 空間デザイン

パブリックスペースの整備効果を最大限に活かすには用途や利用対象に合わせた、扉・窓の位置や仕様、仕上げ材の色や素材、照明や家具のデザインなど、細部の空間デザインが重要となる。

新築時だけではなく、改修や家具などの備品更新の際においても、キャンパスイメージの向上へ繋がる重要な要素となる。その効果は右記のようなものが考えられる。

パブリックスペースの空間デザイン

- ・キャンパスイメージを印象づける重要な要素
- ・大学に訪れた人がまず最初に感じるキャンパスのイメージ
- ・キャンパスの特性を活かす
- ・多くの人に利用してもらう

5.3.2

立命館大学における パブリックスペースの必要性

(1) アカデミックプランと 連動するキャンパス整備の実 現

総合的人間力の育成やグローバル研究大学を目指す大学として、教育、研究、学生生活を支えるキャンパスづくりを行う方針が打ち出され、立命館大学の学園ビジョン実現に向けて、キャンパス整備の中でもパブリックスペースの充実が不可欠である。今後は、学びの立命館モデルなどの現在検討中のアカデミックプランとのすり合わせを行い、立命館大学が目指すパブリックスペースの整備方針について検討を深める必要がある。

(2) 立命館大学のパブリッ クスペース整備で目指すも の

立命館大学のパブリックスペース整備で目指すものは右記のようなものが考えられる。

現在の衣笠キャンパスの主要なパブリックスペース

衣笠キャンパスの主要なパブリックスペースとは、学生、教職員、外来者など誰もが利用できるスペースである中央広場や西側広場などの屋外のオープンスペース、交流・生活の場となる食堂やラウンジ、生活にかかせないトイレや廊下などがあげられる。さらに、学部内の交流や情報発信の場となる学部ラウンジ、学びや研究、課外自主活動などの成果を発表・発信するための多様な空間など、不特定多数の人が利用できる専門的な用途のスペースなども含まれる。また、びあらやリサーチコモンズなど、学びのためのコモンスペースを整備してきており、さらなる発展に向け、キャンパス内に小さなラーニング・コモンズを作るネットワーク型のマルチプル・ラーニング・コモンズという考え方の検討が行われている。

立命館大学のパブリックスペース整備で目指すもの

- ・立命館らしさを創出する空間づくり
- ・キャンパスの特色を活かした空間づくり
- ・アカデミックプランを実現する空間
- ・学生の学部を超えた交流空間としての整備
- ・教職員と学生の交流の場の確保
- ・居心地の良さ・質の保証
- ・安心・安全な生活空間の確保
- ・キャンパス外との接点づくり
- ・立命館大学の生活の質の向上



衣笠キャンパスらしい
心地よい空間づくり

5.3.3

パブリックスペースにおける 課題の抽出と検討の方向性

衣笠キャンパスでは、現状でも面積的には比較的多数のパブリックスペースが確保されており、特定の学部・研究科や学生が対象となるスペースとして配置されていることも特徴である。以上のことを踏まえ次のような基本的な考え方に基づくパブリックスペースの整備が望ましいことがこれまでに確認されている。

- 学生の「学び」や「成長」をサポートするために、集中する静かな学びの空間や専門的な用途の空間と合わせて、多様なコミュニティが共存し、多くの人と出会い、交流し、刺激し合える空間が求められている。
- 求められる機能に合わせ、既存スペースを利便性が高く、より効果的に活用していくための検討を行う必要がある。
- より多くの人に気持ちよく利用してもらうための、居心地のよい空間づくりについて検討する。

5.3.4

衣笠キャンパスとして大切にしたい パブリックスペースの考え方

衣笠キャンパスにおける教学、研究などの活動や交流をより活発に、より快適に行うための機能や環境整備と合わせて、パブリックスペースの整備に関する考え方の整理を行うことが大切である。2014年度には「2020年までの京都キャンパスプラン策定部会」のもとに「パブリックスペース及び交通計画検討作業グループ」を設置し、各部局の将来構想や課題認識を共有しながら、キャンパス全体において、パブリックスペースの空間づくりを考える上で大切な視点について、右記のようにまとめた。これらをもとに、さらに専門的な視点からの条件整理を行い、フレームワークプランを踏まえ、具体的なアクションプランに繋げていくものとする。

衣笠キャンパスとして大切にしたいパブリックスペースの考え方

衣笠キャンパス全体におけるパブリックスペースの役割と空間づくりについて、大切にすべき考え方の整理を行った。具体的かつ優先的に取り組むべき内容については、さらなる条件整理や検討が必要となる。

【衣笠キャンパスにおけるパブリックスペースの役割】

様々な「学び」と「成長」をサポートするきっかけづくり

衣笠キャンパスのパブリックスペース整備により、キャンパスにおける様々な「学び」と「成長」をサポートするきっかけとなる場づくり・環境づくりを行います。

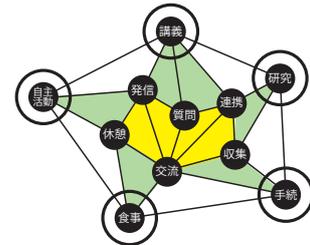
教学、研究、活動、交流が より活発に、よりスムーズに行なえる環境づくり

【大切にすべき視点】

- (1) 学生や教職員の生活圏や移動動線を考慮した効果的な空間づくりや配置を行う。
- (2) 施設間や部屋、屋内外の様々な空間のつながりをつくる。
- (3) 食事、交流、生活、リラックスのための空間についても検討する。
- (4) 安全・安心な環境づくりを行う。



空間・機能の連続性イメージ



つながりと選択のイメージ

学生の成長につながる「出会い」の場づくり

【大切にすべき視点】

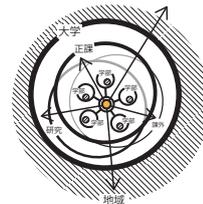
- (1) 学部や正課・課外、大学の枠を超えた様々な出会いを促す場づくりを行う。
(学生 + 院生、●学部生 + ▲学部生、学生 + 教員[専任、非常勤]、学生 + 職員、国内学生 + 国際学生、大学 + 地域等)
- (2) 多様なコミュニティが居合わせられる空間づくりを行う。
- (3) 様々な学びや活動が見えるように計画する。
- (4) 目的や気分によって居場所を選択できるように、多様な居場所づくりを行う。



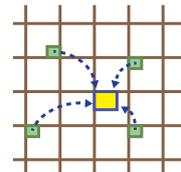
居合わせる空間づくりイメージ



見える化イメージ



学部や正課・課外、大学の枠を超えた出会いのイメージ

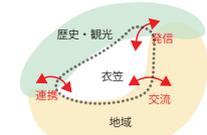


学部を超えた、出会いのイメージ (町内会館と街の中の公民館的なもの)

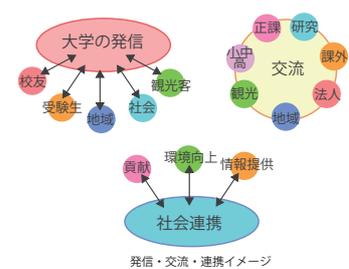
大学と地域・社会をつなぐ場づくり

【大切にすべき視点】

- (1) 地域・社会とともに成長し、地域に開かれた大学としての役割。
- (2) 立命館大学を発信する場づくり。
- (3) 地域・社会と広く交流・連携できる環境づくり。
- (4) 立命館大学の歴史や理念、学びや研究、活動などを活かす。
- (5) 世界遺産・京都、観光地であることを活かす。
- (6) 衣笠山やきぬかけの路、寺院、住宅街などキャンパス周辺の特徴に配慮する。



大学を超えた、出会いのイメージ (大学との接点に出会いの機会を与える)



発信・交流・連携イメージ



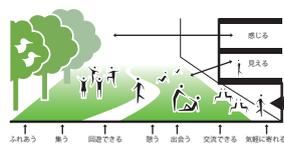
【パブリックスペースの空間づくりの考え方】

衣笠キャンパスらしい居心地のよい空間づくり

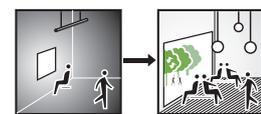
キャンパス全体のキャンパスイメージや生活の質を向上させる空間づくりを行います。

【大切にすべき視点】

- (1) 既存施設を気持ちよく長く活用できるように検討する。
- (2) 心地よく利用できる空間デザインを検討する。
- (3) 利便性に配慮し、利用目的に応じた空間づくりを検討する。
- (4) 居心地の良い屋外空間づくり。
- (5) 衣笠山や京都の町並みを眺める空間づくり。



居心地の良い屋外空間のイメージ



リニューアルのイメージ



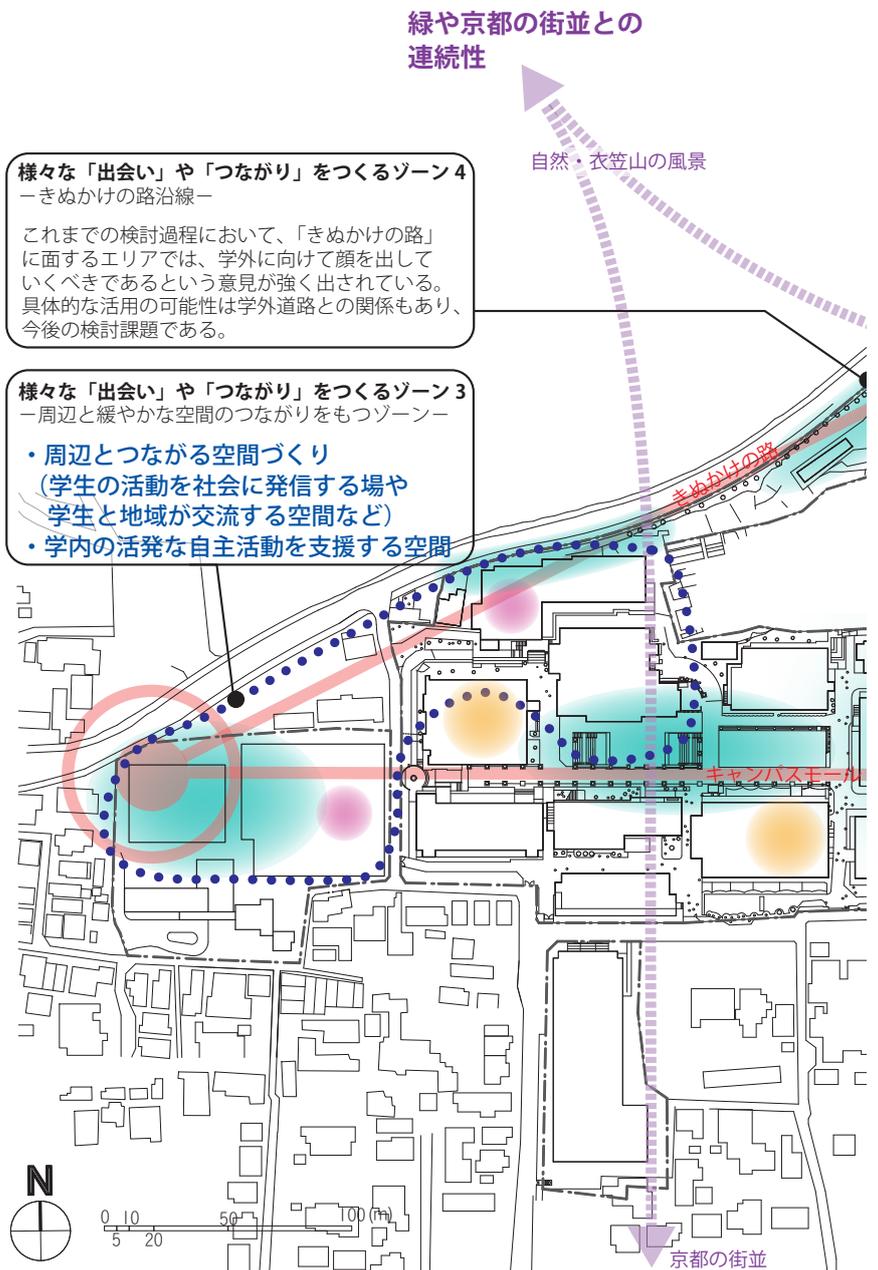
眺望のイメージ

5.3.5

衣笠キャンパスの特性から見たパブリックスペース配置の考え方

衣笠キャンパスには現在も学部や研究科の特徴に応じた様々なパブリックスペースが整備されている。衣笠キャンパスのパブリックスペース整備では、これらの既存施設や衣笠キャンパスの環境を最大限に活かし、学びや研究の活動・交流、衣笠らしさが見える空間づくりを目指す。衣笠キャンパスの「パブリックスペースの役割」や「空間づくりの考え方」を踏まえ、具体的な整備は図 5-3-1 の①～③の方針に沿って検討を進める。

また、今後さらに学生・教職員の過ごしやすい空間づくりを行うため、場所や目的に応じて求められる効果的な場づくり・空間づくりについても検討を進める。そこで、キャンパスの特徴を活かし、多くの人が利用することを前提とした様々な「出会い」や「つながり」を創出するため、目的に応じて、1～4のゾーン毎に配慮すべき空間づくりの考え方を設定する。



② 空間的な序列化を図る

- 空間の平面的、ならびに断面的な序列化を行い、より機能的なキャンパス空間の形成を行う。

【平面的な優先整備ゾーンの考え方】

- より多くの人々が利用する（して欲しい）スペース
 - ・多くの人が行き交うエリアへ配置
 - ・誰もが使いやすい場所へ配置（動線上）
 - ・効果的な場所へ配置（各ゾーンとの接点や動線上）
- 特定の人のみで利用する専門的な用途のスペース
 - ・機能や関連施設との連携に配慮した適切な場所へ配置

【断面的な優先整備ゾーンの考え方】

③ 学びや活動・交流、衣笠らしさが見える空間づくり

- 学生生活の透明化、見える化を図り、そこへ誘導する仕組みを検討し、さらなる交流や対話・刺激を引き出す空間づくり
- 人と人、地域社会との出会い・つながりが見える場所・空間づくり
- 衣笠キャンパスの地理、歴史、特徴を活かした空間づくり

(視覚的・空間的なつながりイメージ)

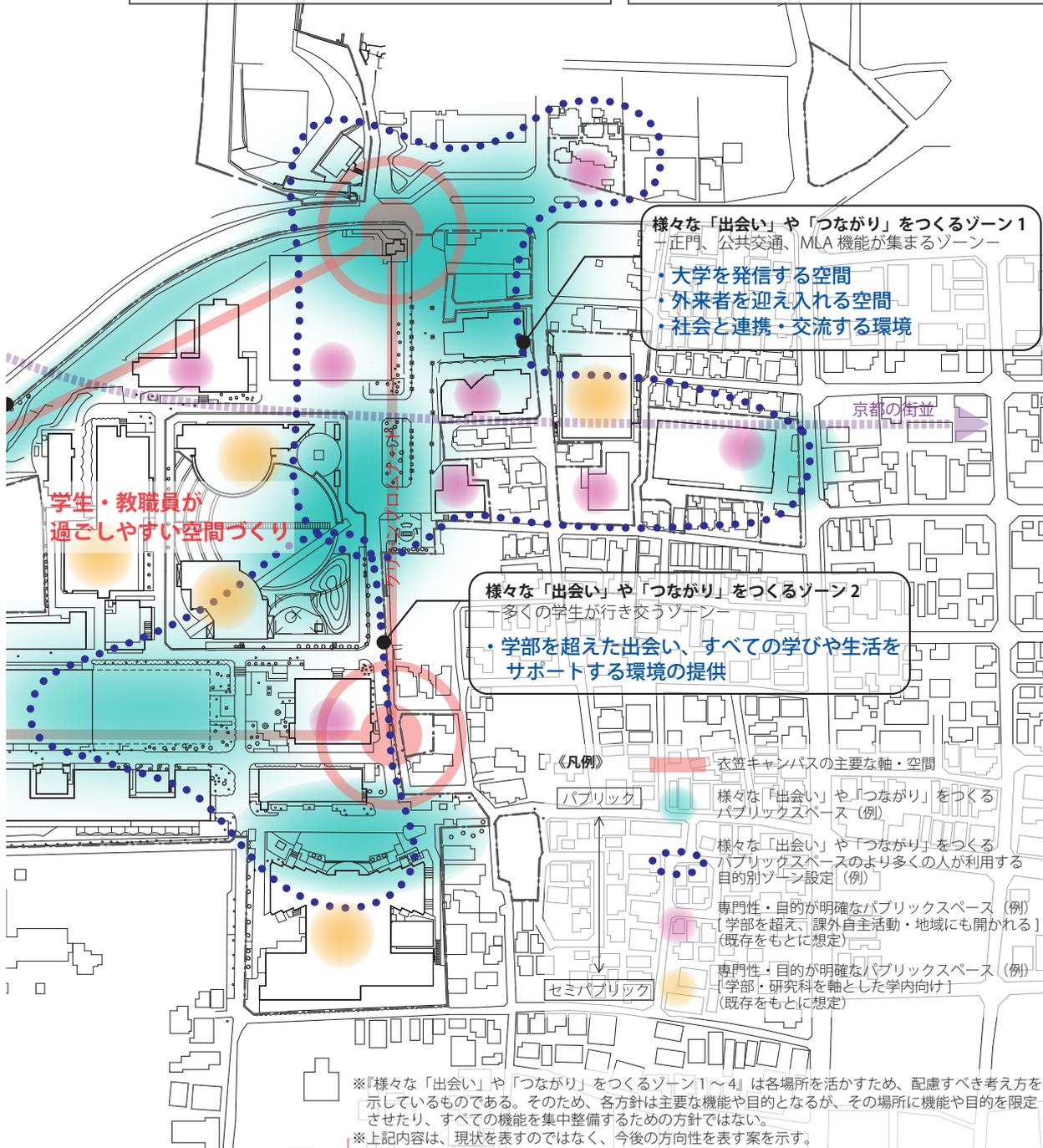


図 5-3-1 パブリックスペースの方針

【参考】

びわこ・くさつキャンパスのパブリックスペースの検討において考慮すべき視点

びわこ・くさつキャンパスマスタープラン 2015 Ver.1 より引用

一方、びわこ・くさつキャンパスでは学部の特徴から専門的な占有空間が多いため、キャンパス全体としてパブリックスペースが不足しているという課題があった。そのため、パブリックスペースの検討においては大学で行われる多様なアクティビティの分類から行った。そこから、必要なパブリックスペースの種類と役割について検討を進めた。衣笠キャンパスにおいても、参考となる考え方のため、ここに掲載しておく。

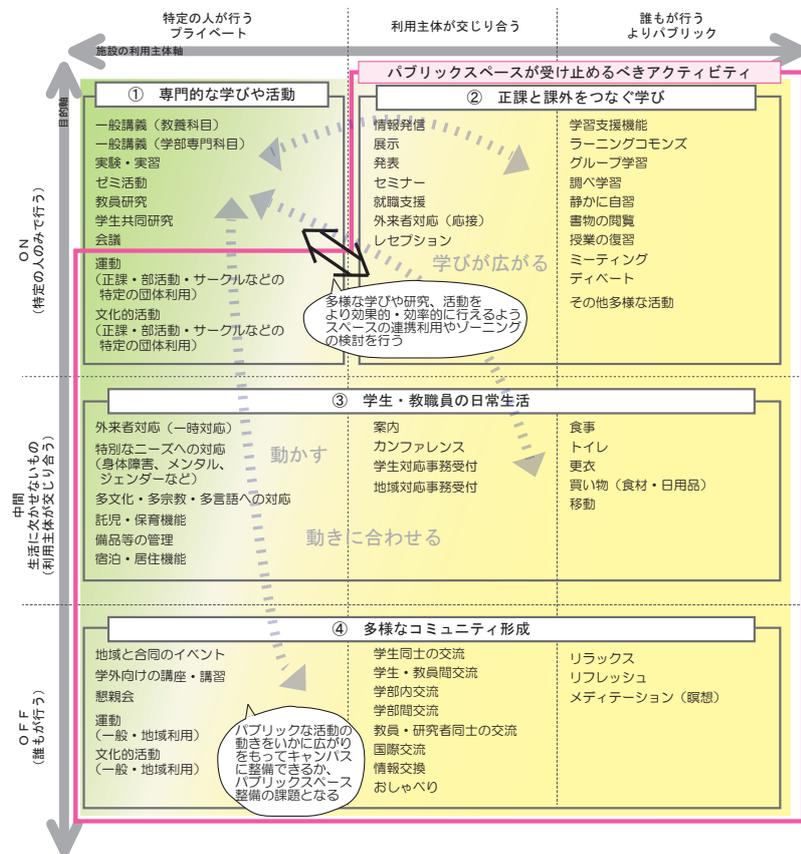
(1) 大学の多様化するアクティビティへの対応

キャンパスでは多様なコミュニティにおける、主体的な学びや専門的な研究、活動、交流が行われている。

表 5-3-1 のように、大学における様々なアクティビティを整理し、より効果的で効率的なパブリックスペースの空間整備やゾーニングを行う必要がある。また、これまでパブリックスペースとして整備されてこなかったスペースもパブリックスペースとして位置づけることにより、より効果的で効率的なスペース利用が可能になる。

さらに、パブリックスペースの整備においては管理・運営面と合わせた検討を行う必要があり、利用者のニーズや管理・運営主体の意見を含めながら検討を進めることが重要である。

表 5-3-1 学生・教職員からみた大学における一般的なアクティビティの分類表



大学におけるアクティビティを、①学生の専門的な学びや活動、教職員の業務、②正課と課外をつなぐ学び、③学生・教職員の日常生活、④多様なコミュニティ形成の4つに分類した。

特に②、③、④は利用主体や目的が多様なため、パブリックスペースとして位置づけられた場所で行われることが望ましい。また、①のアクティビティにおいても、パブリックスペースとして位置づけられた場所で行うことでその効果をより発揮することが期待される。

※上図にはアクティビティの内容は立命館大学に既にある機能と、他大学や他の公共施設などにある機能を合わせて示している。

(2) 必要なパブリックスペースの種類と役割

学びを促進する活気ある学びのコミュニティのために必要なパブリックスペースの役割と種類について、右記の通り、A～Dの4つに分類した。左図で整理した2軸のアクティビティのための空間を整備する際は、右図に示すように、主に4つのパブリックスペースの役割に応じて、複数のアクティビティを関連付けながら、より効果的な整備方針を検討することが大切である。いずれのパブリックスペースも「専門的な学びや研究、活動の場」との連携や相乗りを含めて構想する。

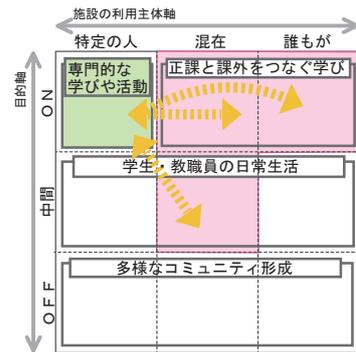
【専門的な学びや研究、活動の場】

教室、実験・実習室、研究室、サークルBOX、体育館、グラウンド等

【学びを促進するパブリックスペースの整備内容】

A 学生の動きにあわせて配置する専門的な学びや研究、活動をサポートする空間

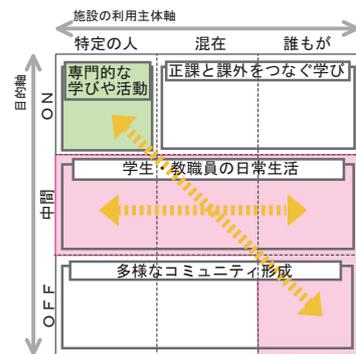
B 学生が動くように配置する交流空間と学部横断的な学びの空間



教室、自習室、グループ学習室、ミーティングスペース、作業スペース、情報発信スペース、事務窓口等

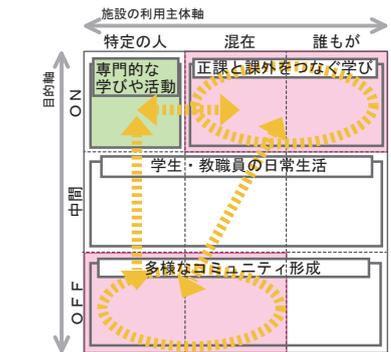
専門的な学びや研究、活動をより深め、発展させるための空間を学生の動きに合わせて整備する。授業前後や空き時間、研究の合間に気軽に立ち寄ることができ、先輩から後輩へ知識の継承や教員と学生の交流が生まれることを期待する。

C キャンパス全体に配置するアメニティを高める空間



ラウンジ、食堂、カフェ、購買（コンビニ、自動販売機等）、広場、緑地、ベンチスペース、トイレ、パウダールーム、更衣室、メディテーションルーム、託児・保育室、授乳室等

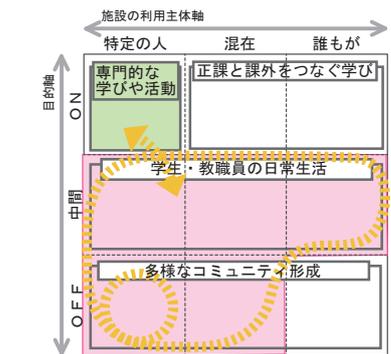
専門的な学びや研究、活動を行うためにキャンパスに長時間滞在するための、リフレッシュ空間やアメニティ機能の充実を図る。また、ゾーン毎のニーズに合わせた整備方針を検討する。



教室、ラーニングセンター、(リサーチcommons、ラーニングcommons)、学習支援機能、グループ学習室、ミーティングスペース、作業スペース、発表スペース、情報発信スペース、多目的ホール、ラウンジ等

ON、OFFの活動に対して、学生を動かし、多くの人や情報に出会える環境づくりを行う。ON空間には、学部横断的な学びへと発展させるための交流空間や情報発信の場を整備し、OFF空間には新たな交流を促す空間を整備する。

D 地域との交流を促すスペース



教室、発表スペース、情報発信スペース、多目的ホール、ラウンジ、食堂、カフェ、購買（コンビニ、自動販売機等）、広場、緑地、ベンチスペース、屋内外の運動スペース、託児・保育室、授乳室等

学びや研究、活動の実践の場として、地域に貢献する役割を果たすキャンパスとして、地域の人々が訪れやすい空間や機能を整備する。また、学生・教職員と地域・一般の方と交流するきっかけを生み出す空間について検討する。

5.4 キャンパスデザイン

大学のイメージを印象づけるキャンパスデザインについての検討は重要な視点である。立地特性上、歴史的景観の保全や調和を図ることが歴史都市型キャンパスとして魅力的な環境を維持・向上する上で大切な課題である。また、日常的に利用頻度の高いパブリックスペースは、量的・面的整備や利便性・機能性に配慮するだけでなく、誰もが共通して心地よく利用でき、何度も利用したいと思える工夫が必要である。このようなキャンパスデザイン上の取り組みは、整備効果が利用者に伝わりやすく、学生の満足度に直接的につながるものとなる。そのため、以下の視点について総合的に検討を行い、デザインガイドラインを設定することが有効である。

- ①空間の質 ②建物外観デザイン ③屋根・庇デザイン ④建物高さ・壁面線・建物ボリューム
⑤サイン計画 ⑥ランドスケープデザイン ⑦眺望・景観・借景

なお、衣笠キャンパスは、その大半が京都市の風致地区や建造物修景地区、眺望景観保全地域（3章にて詳細を前述）に指定されており、法的にも周辺環境との調和、景観への配慮が求められている。

① 空間の質

学生にとって通いたい、学びたいキャンパスであり、教職員にとって働きたいキャンパスであり続けるためには、キャンパス空間全体の質の維持・向上についての検討が重要となる。立命館大学のアイデンティティを伝える空間として、また、「使いたい」「居心地がよい」「自慢したい」などを感じる空間についての丁寧な検討が求められる。

② 建物外観デザイン

大学のイメージやキャンパスの統一性に配慮したデザインとともに、施設機能や整備エリアに応じた外観デザインが求められる。特に、既存建物の素材や色彩などの継承性と新現性のバランスを図ることが重要である。また、将来の建替えやキャンパス内歩行者通路の設置・拡張などを想定した壁面線や周辺建物との調和についても考慮が必要である。

既存キャンパスの状況



写真 5-4-1 新たな学ぶの空間として整備された究論館の研究コモンズ



写真 5-4-2 リラックスした雰囲気のカフェゆんげ

既存建物外観デザイン



写真 5-4-3 職人の手作業で生み出される趣のあるドンゴロスタイルの外壁茶褐色（小豆色～レンガ色）の外観スタイル（存心館他）



写真 5-4-4 水平線と垂直線から構成される外観（研心館・諒友館を西側広場から眺める）



写真 5-4-5 素焼きのレンガ調タイルの外壁（アトリサーチセンター）



写真 5-4-6 建物頂部の深い軒庇（志学館）

③屋根・庇デザイン

京都・衣笠に立地するキャンパスとしてキャンパス内外からの眺望、借景、周辺環境との調和など、風致や景観形成に配慮した屋根、庇のデザインが重要であり、求められてる。

また、屋上に太陽光発電パネルや設備機器を設置する場合は、キャンパス内外からの見え方にも十分配慮が必要である。

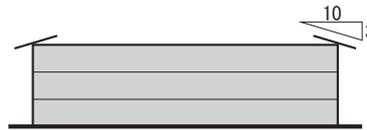


図 5-4-1 屋根と庇の断面イメージ



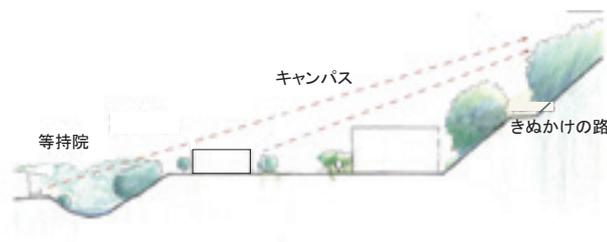
写真 5-4-7 景観に配慮した近年整備事例：京都衣笠体育館（2012年竣工）
2010年度美観風致審議会
景観専門小委員会答申案件

④建物高さ・壁面線・建物ボリューム

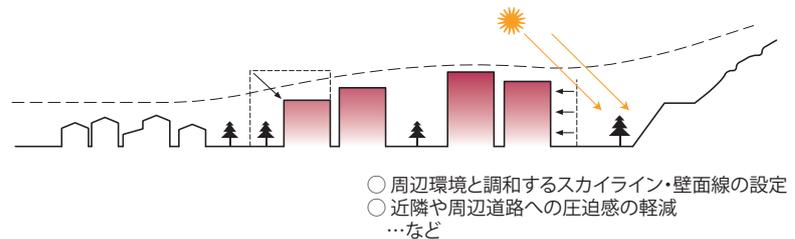
建物高さや壁面線はキャンパス内の統一性と衣笠山や周辺地域との空間的連続性に配慮が必要である。建物の高さは、立地上、低く抑えることが望ましく、高度地区および風致地区においても上限が設定されている（3.1.5 敷地概要にて詳細を前記）。

景観維持を目的とした法的規制により、キャンパス内には将来の建替えの際に現在の建物高さを確保できない既存不適格の建物が存在している。そのため、キャンパス全体として容積バランスを考慮した長期的な建て替え計画を検討しておく必要がある。

●キャンパス内外からの衣笠山への眺望確保



●キャンパスと周辺環境との関係



●キャンパス内の建築・空間

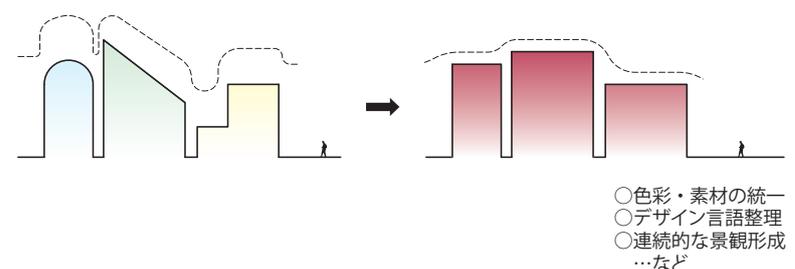


図 5-4-2 建物高さについての考え方

⑤ サイン計画

初めてキャンパスを訪れる人にもわかりやすい案内図や標識を設置する。特に、キャンパスゲート付近や主要な分岐点、建物出入口付近は配慮が必要である。看板はキャンパス内に散在せず、効率的に情報発信できるよう可能な限り集約化を図る。サインはキャンパスのグローバル化に対応したユニバーサルデザインや多言語表記などの配慮が求められるとともに、立命館大学のイメージに合わせた色調やデザインなどを採用することが重要である。

⑥ ランドスケープデザイン

屋外のオープンスペースにおいて行われている、学生の様々な活動や交流がキャンパスの風景となる。イベント時だけでなく、日常の風景も季節とともにデザインする。

衣笠キャンパスは、歴史的景観とよりよく馴染み、観光客や地域住民にも快適な歩行者空間をつくりだすようなみどりとオープンスペースを抱き合わせた衣笠山のみどりが浸潤する歴史地区のランドスケープデザインを行う。後述する「5.5 緑地」や前述の「5.3 パブリックスペース」の方針を踏まえることが重要である。

既存キャンパスのサイン表示



写真 5-4-8 衣笠キャンパスの特徴である漢籍を含め漢字を用いた建物名称



写真 5-4-9 有効な広報物として設置されている立て看板



写真 5-4-10 認識しやすい整備が必要なキャンパス案内図



写真 5-4-11 日本語と英語の2ヶ国語に対応されたサイン表示



写真 5-4-12 ユニバーサルデザインに配慮したわかりやすいサイン表示



写真 5-4-13 掲示板

キャンパスの様々な風景



写真 5-4-14 様々な活動と風景をデザインする

⑦ 眺望・景観・借景

衣笠山を背景に望む、存心館の時計台と芝生が広がる中央広場は衣笠キャンパスを象徴する景観である。キャンパス内外からの衣笠山への眺望の確保や衣笠山と連続する植栽計画、建物外観デザインなど、自然や歴史的景観の保全への配慮が求められている。また、立地特性を活かし、建物内から衣笠山や京都の町並み、キャンパス内の緑地への眺望を考慮した計画などにも配慮が求められる。

キャンパスからの眺望



写真 5-4-15 グラウンドから衣笠山と建設中の存心館を望む（1980年頃）



写真 5-4-16 中央広場から衣笠山と存心館の時計台を望む



写真 5-4-17 洋洋館の屋外階段からの眺望



写真 5-4-3 キャンパスとその周辺から衣笠山がよく見える範囲

5.5 緑地

5.5.1

衣笠キャンパスにおける 緑地の現状

衣笠山を背景に望む衣笠キャンパスの特徴を活かし、周辺の緑との調和や空間的な連続性を確保し、四季を感じられる潤いあるキャンパスづくりを目指す。また、憩い・集い・賑わうキャンパスに相応しい緑地計画を行う。

そこで、緑地計画について次の4つの考え方に沿って、検討を行う。また、前述の5.4 キャンパスデザインの考え方に配慮する。

①衣笠山への緑の連続性の確保

衣笠山への緑の連続性に配慮した植栽計画を行う。また、キャンパス内外からの衣笠山への眺望確保のため、建物配置や建物高さなどについても配慮が必要である。



写真 5-5-1 キャンパスの航空写真(2009年5月時点)



写真 5-5-2 緑をまもり育てる中央広場



写真 5-5-3 緑を増やす西側広場

②京都の植生や気候・環境に適した植栽計画

京都の気候・環境に適した樹種の選定を行う。さらに、涼しい「日陰」づくり（広葉樹の植栽）により夏の暑さに配慮し、暖かい「ひなた」づくり（落葉樹の植栽）により冬の寒さに配慮する。



写真 5-5-4 図書館・至徳館間の通路

③賑わいと潤いある緑地空間の提供

植栽計画は場所毎に特徴を持たせ、歩いて楽しい歩行空間やリラックスできる憩いの空間など、目的や用途に応じた植栽計画を行い、建物内からの緑地への眺望にも配慮する。

前述の「5.3 パブリックスペース」や「5.4 キャンパスデザイン」の方針を踏まえ、特にランドスケープデザイン、眺望・景観・借景の考え方に配慮し、賑わいと潤いを創出する屋外空間の検討を行う。



写真 5-5-5 中央広場

④適切な維持管理

既存樹木は可能な限り保全する。ただし、病気や寿命、樹木の状態に応じて伐採することもある。また、キャンパスの再整備において保全が難しい場合は、移植の可能性を検討する。

良好な緑地の空間を維持していくには、場所や樹種に応じた、維持管理方法の検討が必要である。

風致地区や眺望空間保全区域の基準を含む京都府や京都市の緑地計画の方針を遵守し、さらによりよい環境づくりを目指す。



写真 5-5-6 充光館南側通路

5.5.2

緑地整備の取り組み方針

緑地計画の考え方にに基づき、衣笠キャンパスにおいて、具体的に取り組む3つの方針を示す。

【緑をまもりそだてる】

《保全する緑》

- ・既存の樹木は可能な限り保全する。
- ・周辺環境との調和や空間的連続性を考慮し、きぬかけの路沿いの法面の緑や等持院などに接する緑など、特にキャンパス外縁部の豊かな緑は保全する。
- ・「区民の誇りの木」のイチヨウなど、特長ある樹木を保全する。

《増やす緑・つくる緑》

- ・オープンスペースを整備し緑豊かな広場を増やすことで、衣笠山から等持院までの緑の連続化を図る。
- ・正門から中央広場に至るグリーンプロムナードは、豊かな緑を拡充する。
- ・建物周辺部や現状で緑が少ない箇所については、積極的に緑化する。

【キャンパスを活性化する広場】

- ・キャンパスの骨格である南北軸と東西軸の中核を担う広場の整備により、わかりやすいキャンパス空間をつくる。
- ・中央広場は将来ともその広がりを持し、また災害時における広域避難場所としての機能も継続する。
- ・西側広場は、東西軸の中核をなす広場で、将来的にキャンパスモールとして四季を感じる植栽がある空間とする。
- ・東門前の広がりを持する。

【地域とともに育てるキャンパス】

- ・豊かな緑は大学の誇りであるとともに地域の誇りでもあり、大学と地域とが協力して緑を育成推進する場をつくる。
- ・周辺地域の住民や観光客にも開かれた空間としての意識を持った整備計画を行い、これに伴う適切な管理・運営方法を中長期的に検討し、構築する。

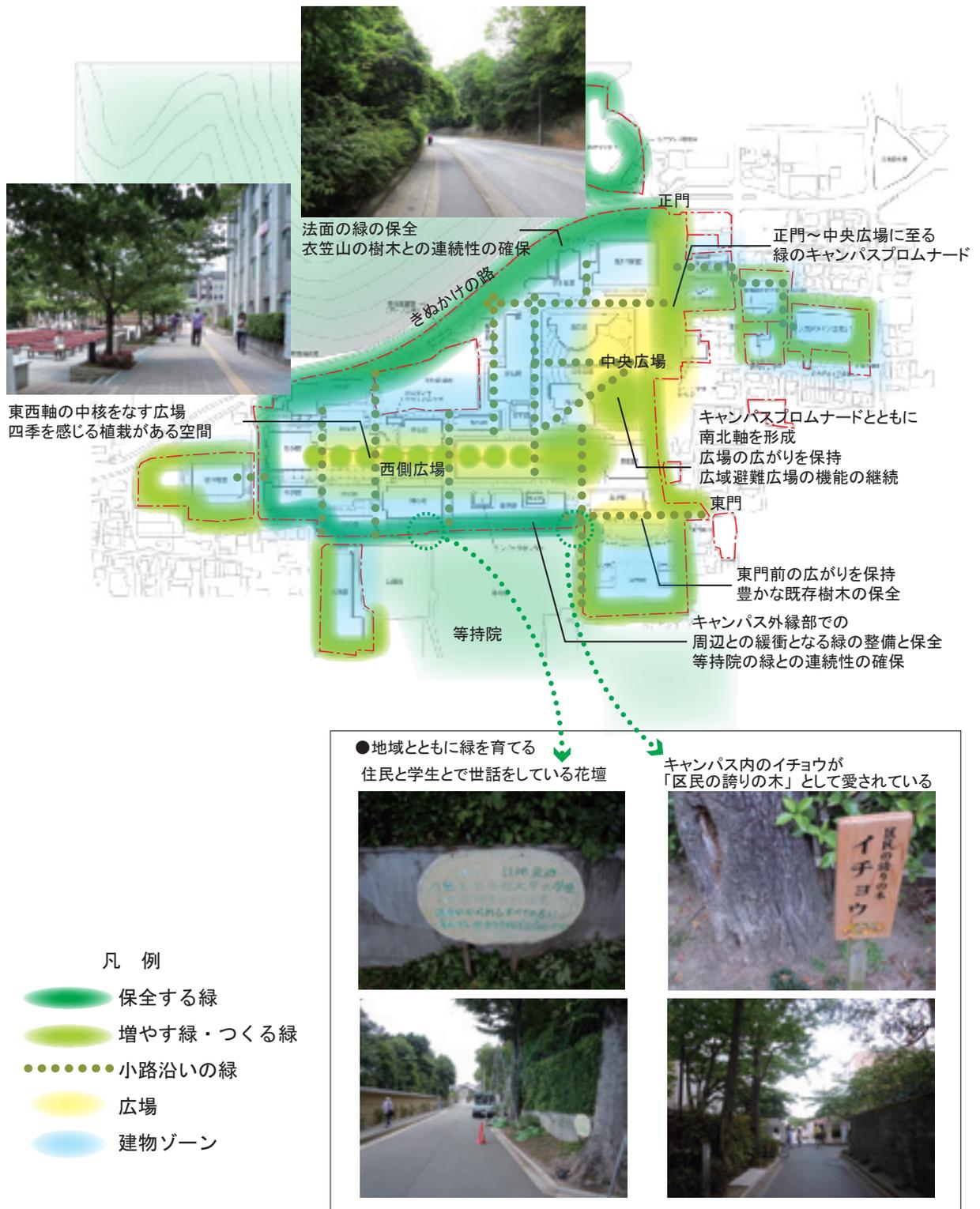


図 5-5-1 緑の方針

5.6 安全・安心

5.6.1 安全・安心の考え方

良好なキャンパス環境を維持できるように、安心・安全なキャンパスづくりが求められる。大学は不特定多数の人が訪れる場所であり、誰もが使いやすく、快適なキャンパスとして整備することが求められる。そのため、現在のキャンパスでの取り組み状況や課題、その検討状況について把握する必要がある。

5.6.2 ユニバーサルデザイン・バリアフリーへの配慮

キャンパス内において、身体の不自由な人だけでなく、高齢者や子ども、海外からの留学生なども含めた全ての人が支障なく過ごすことができるよう、バリアフリーとともにユニバーサルデザインに配慮することが重要である。



写真 5-6-1 高低差のあるキャンパス



写真 5-6-2 バリアフリーに配慮された出入口



図 5-6-1 「立命館大学障害学生支援室」作成のバリアフリーマップは大学ホームページで公開されている。
<http://www.ritsumeikan.ac.jp/drc/barrierfree/map.html/>

5.6.3 交通への配慮

キャンパス内は歩行者の通行を最優先とした整備・運営を行う必要があり、歩きやすい路面の整備や雨の日のキャンパス内移動への配慮についても検討が求められる。また、敷地特性上キャンパス内には高低差があり、坂道や階段が多いのが特徴で配慮が必要である。

自転車・自動車のキャンパス内通行は原則禁止されている。ただし、キャンパス運営上必要なサービス車両の通行については許可されており、入構時間帯、入構許可車両、キャンパス内移動経路、キャンパス内一時駐停

車スペースについての規則の周知と運用の徹底が必要となる。また、更なるキャンパス内の快適性、安全確保のためには、サービス車両の運営面について見直し・検討を行う必要がある。

また、正門前にはバス停や京都市交通局の駐機場があり、多くのバスが発着するため、正門周辺の安全確保を徹底するとともに、キャンパス周辺の交通や公共交通機関との関係に配慮する必要がある。交通計画の詳細な考え方については5.2にて前述している。



写真 5-6-3 多くの交通が集まる正門
まわり



写真 5-6-4 安全配慮が必要なロータリー



写真 5-6-5 見直しが必要な駐停車
スペース（至徳館出入口前広場）

5.6.4 施設の維持管理、老朽化への 対応

安心・安全の観点からも施設や設備機器等は耐久年数に応じた計画的な更新、改修が必要である。特に衣笠キャンパスにおいては、将来の建替え計画を視野に入れ、計画的に整備を進める必要がある。また、整備を行う際には、正確な情報を教職員・学生、地域に対してわかりやすく公開することが重要である。

施設の維持管理、老朽化への対応については、7章で後述される「キャンパス整備における

ファシリティマネジメント」の考え方が重要である。現在、日常の施設・設備の保守点検及び修繕については「衣笠キャンパス事務課」、全学の安全管理活動の企画立案及び状況把握は「安全管理課」、LCCを含む大規模な改修や整備については、「管財課」が担っている。上記各部課が綿密に連携し、迅速かつ計画的に対応を行っている。



写真 5-6-6 改善された学生会館のト
イレ



写真 5-6-7 耐震改修後の啓明館

5.6.5

防災・防犯への配慮

施設整備においては、建物の耐震改修や非構造部材の耐震化を行い、地震に強いキャンパスづくりを行っている。また、不特定多数の人が利用するキャンパスとしての防犯対策として、見通しのよい環境整備やセキュリティ対策について十分な配慮が必要である。

万一、災害等が起こった際の対策として、防災訓練を実施するなど、いつ災害が起こっても迅速な対応ができるよう日頃から十分な対策を行う必要がある。特に衣笠キャンパスの中央広場は京都市の広域避難場所に指定されており、十分な対策が必要である。また、安全管理室より、「緊急災害対応ハンドブック」と「防災カード」が発行され、大学ホームページで公開するとともに、全学の学生、教職員に配布され、防災意識の向上に努めている。



図 5-6-2 緊急災害対応ハンドブック、防災カード（立命館大学安全管理室作成）
学生用、教職員用学作成され、全学生、教職員へ配布され、大学ホームページでも公開されている。
http://www.ritsumei.ac.jp/safetymanagement/safety/safety_handbook.html/

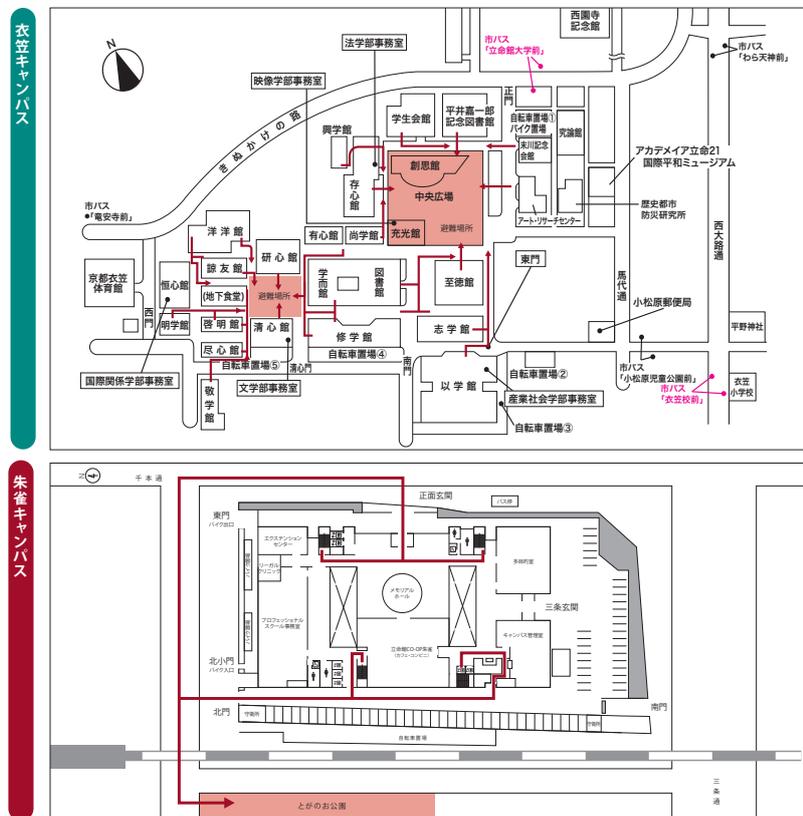


図 5-6-3 避難経路図

5.7 環境配慮

持続可能な環境配慮型キャンパスの考え方

持続・循環可能な地球環境の未来のため、人類・地球・自然に配慮した、環境配慮型のキャンパス整備を行うことが望ましい。学園全体としての環境問題への取り組みとしては、「立命館地球環境委員会」主導のもと、省エネルギー、CO2削減、節水、廃棄物対策、環境教育などの活動に取り組んでいる。これらのソフト面の取り組みとハード面の整備と連動した取り組みを更に促進させ、立命館大学の持続可能な環境配慮型キャンパス（サステイナブルキャンパス）として、取り組むべき課題の整理や目指すべき方針について検討を進める。



写真 5-7-1 立命館地球環境委員会により作成された立命館学園環境報告書 2014 vo. 04 は下記 URL にて公開している。
<http://www.ritsumeikan.ac.jp/rs/eco/action/page11.html/>

また、立命館大学は「サステイナブルキャンパス推進協議会」に加盟しており、加盟大学と情報共有、連携を図りながらサステイナブルキャンパスの構築を目指している。本推進協議会では、次のようにサステイナブルキャンパス構築のために必要な検討項目が示されている。本学においては、今後これらのどの項目について検討を深めていくか議論が必要である。

サステイナブルキャンパス構築のために必要な項目

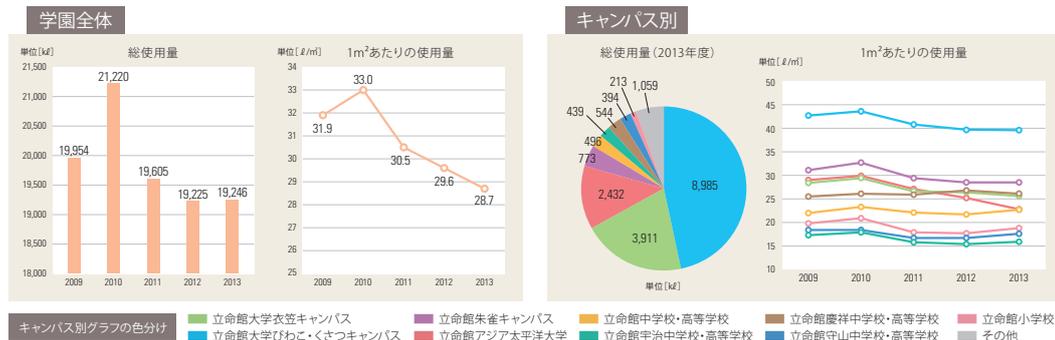
- 運営体制の確立と計画立案
 - ・推進体制の整備
 - ・アクションプランの作成
 - ・予算の確保
 - ・広報活動の活発化 等
- 環境に配慮した建物・設備と維持管理
 - ・建物・設備の省エネ対策
 - ・エネルギー消費量・CO2排出量の削減
 - ・再生可能エネルギーの導入 等
- 環境負荷低減に資する大学運営
 - ・3R対策（廃棄物）
 - ・水
 - ・食料
 - ・環境配慮物品購入
 - ・交通対策
 - ・生態環境の保全 等
- 学生の参画
 - ・環境教育の推進
 - ・カリキュラムの開発
 - ・学生の自主活動の促進 等
- 地域連携とネットワーク構築
 - ・地域社会・行政・民間企業との協働
 - ・国内外の大学間ネットワーク構築
 - ・評価・研究手法の開発 等

※サステイナブルキャンパス推進協議会（CAS-Net JAPAN）で検討が進められているテーマを引用

環境影響項目の使用・排出実績

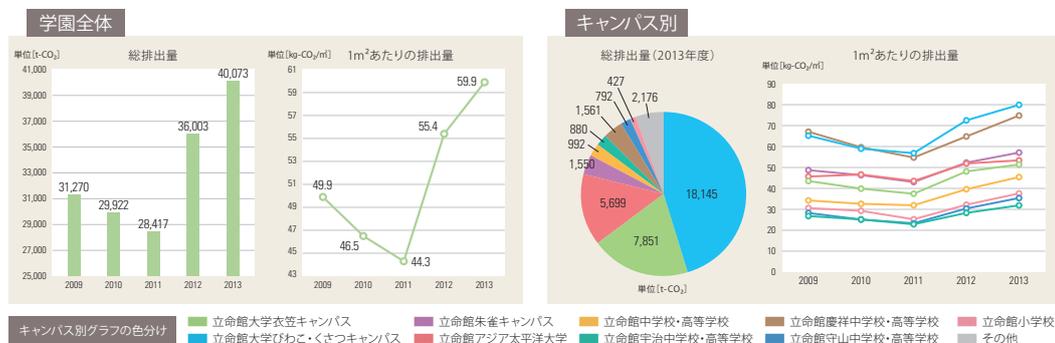
2013年度 エネルギー使用量〔原油換算〕

立命館学園において消費する電気やガスなどのエネルギーを原油に換算すると使用量は約2万kl/年になります。省エネ対策工事等の効果があらわれ、1㎡あたりのエネルギー使用量が減少傾向を示しています。



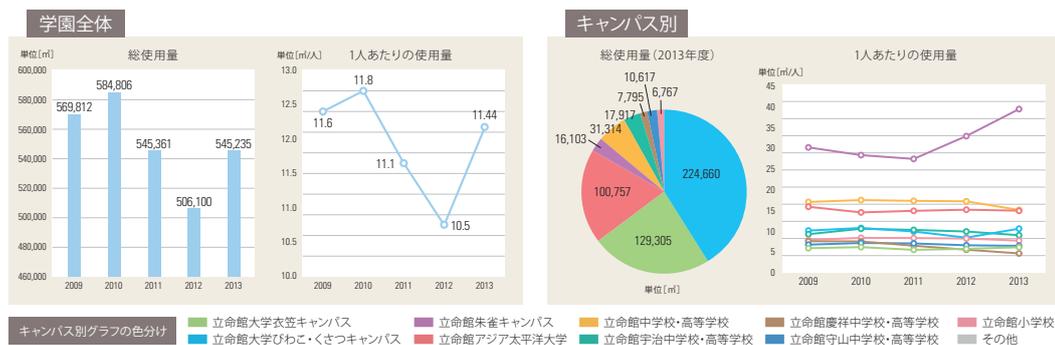
2013年度 温室効果ガス排出量

東日本大震災に端を発するエネルギー情勢の変化により、原子力発電の代替として火力発電による電力供給が増加したため、排出係数が悪化しています。このことが要因となり、エネルギー使用量は減少していますが、温室効果ガスの排出量は2012年度より増加傾向となっています。



2013年度 水使用量

水使用量は2012年度と比較して大幅に増加しました。節水型衛生機器導入効果により、トイレにおける使用量が減少しているものの、BKCの実験棟における使用量の増減が、学園全体の使用量に大きく影響しています。



chapter 6

計画の実現に向けた検討と方策

- 6.1 衣笠キャンパスの検討状況
- 6.2 朱雀キャンパスの検討状況
- 6.3 アクションプランの今後の進め方と配慮事項
 - 6.3.1 アクションプラン検討の進め方
 - 6.3.1 アクションプラン検討の際の配慮事項
- 6.4 リーディングプロジェクト（重点検討課題）
 - 6.4.1 リーディングプロジェクトの設定
 - 6.4.2 リーディングプロジェクトに設定した背景

chapter 6 では、具体的なキャンパス整備方針決定に向け、アカデミックプランを踏まえた上で具体的なアクションプランの検討状況を示す。

アクションプランの検討過程では、「キャンパスの利用状況の把握」と「キャンパス整備のフレームワークプラン」の条件に沿った整理・検討が不可欠である。

アカデミックプランに基づく施設整備課題のうち、優先して検討・決定すべき課題については、キャンパスマスタープランにおける俯瞰的な位置づけを明確にし、アクションプランの具体的な検討にあたってフレームワークプランとの整合性を保つために考慮が必要な条件の整理や必要に応じてガイドラインを設定する。

6.1 衣笠キャンパスの検討状況

教学・研究の質の向上にむけ、現在全学的な検討が進められているアカデミックプランや各学部・研究科の教学展開、さらには学生の様々な自主活動を支え、衣笠キャンパスの教育・研究・学生生活条件の改善の取り組みを進める。衣笠キャンパスは、法的条件（高さ制限、建蔽率、景観規制など）の制約が多く、キャンパス内の多くの既存施設建替え時には、既存施設より低い施設しか建設することができない（詳細は3章にて前述）。そのため、衣笠キャンパスの教学条件整備を進めるためにも、将来の建替えを見越して、地上の容積を確保できる敷地北側へのボリュームシフトや地下の有効活用などを考慮した技術的な検討かつ長期的な建替え計画の検討が重要となる。つまり、キャンパス全体の床面積分布の検討が必要である。また、キャンパス敷地北側を除き、キャンパス周囲が住宅街となっており、近隣住宅地への配慮が必要である。

【検討課題】

- ・キャンパスイメージの向上、快適なキャンパス空間の創造
- ・衣笠キャンパスの狭隘化
 - －周辺用地の拡充
 - －未活用施設の活用方針の検討
 - －利用状況の見直しによる既存施設の有効活用
- ・老朽化に伴う、既存施設の改修計画
- ・既存学部の改革にあわせた施設整備

表 6-1 キャンパス整備の検討課題

検討すべき京都キャンパス整備課題		関連対象建物・スペース（想定）
学部基本施設の老朽化に伴う改修計画	施設改修（存心館、清心館）のための一時的な移転施設の確保	候補施設[洋洋館、学生会館] →学部基本施設の改修を行うためのローリングシュミレーションが必要
将来構想に関わる各学部の教学展開に伴う施設計画		・教室や研究関連施設など
教学条件の改善	究論館（大学院施設）建設	・学而館の大学院共同研究室スペースを活用した教学条件の拡充 →キャンパス全体における教学施設の改善に向けた長期的な検討必要
衣笠キャンパスの狭隘化解消への対策	大阪いばらきキャンパスへ政策科学部・政策科学研究科の移転	・洋洋館（政策科学部、政策科学研究科スペース） →活用計画の検討必要 ・中川会館（朱雀キャンパス）（経営管理研究科スペース） →活用計画の検討必要
	周辺用地の利活用計画の検討	・正門近くの旧民家用地 ・旧堂本別邸用地 →管理主体、活用計画、保全・リノベーション計画の早期対応必要 ・旧聖ヨゼフ修道院用地 →史資料整理暫定利用
建替え用地の確保（地上の容積の確保）	図書館の建替え	平井嘉一郎記念図書館建設 →2015年末竣工予定 →2016年4月開設予定
	機能の再配置、集約化などの既存施設の利用状況の見直しによる既存施設の有効活用	平井嘉一郎記念図書館建設に伴う、関連施設移転後の活用計画
		啓明館心理関連諸室跡地活用計画
		建物解体により容積の確保
交通課題		・正門周辺 →複数案検討必要 ・バスプール、バスロータリー →複数案検討必要 ・駐輪場整備
安全・安心への対応	未耐震建物への対応	・学生会館 →改築・改修を見極め、方針の検討・判断が必要 ・現図書館 →新図書館2016年4月開設予定 →現図書館2016年度中に解体予定
キャンパスイメージの向上 快適なキャンパス空間の創造 QOL (quality of life) の向上		・飲食環境 ・パブリックスペース ・きぬかけの路沿線 ・キャンパスモール
	キャンパスの国際化への対応	国際寮の建設 →2015年9月竣工予定 →残敷地の活用検討

6.2 朱雀キャンパスの検討状況

朱雀キャンパスの施設規模や立地特性に応じた将来の活用計画を検討することが必要である。

【検討課題】

- ・ 経営管理研究科の大阪いばらきキャンパス移転後スペースの活用計画の検討
- ・ 教職研究科（教職大学院）設置委員会の検討を踏まえ、必要な施設整備についての検討が必要

6.3 アクションプランの今後の進め方と配慮事項

6.3.1

アクションプラン検討の進め方

アクションプランの検討では、フレームワークプランで掲げたキャンパス整備の方向性を実現するために、アカデミックプランだけでなく、経営戦略や財務条件、既存施設の利用状況など必要な条件とのすりあわせを行いながら実現可能性を踏まえた検討を進めるものである。アクションプランの具体的な検討にあたっては、マスタープランにおける俯瞰的な位置づけを明確にし、フレームワークプランとの整合性を保つために考慮が必要な条件の整理や必要に応じてガイドラインを設定する。また、複数の検討課題から具体的なアクションプランを導くため、6.4で述べるリーディングプロジェクトを活用し、面的な広がりを持った計画の検討を同時に行うものとする。アクションプランの検討対象は、具体的な整備を決めるための検討や整備対象が決まっている場合など、検討レベルにより様々なケースが存在するものである。そのため、アクションプランの検討の進め方は次のような目的に応じて異なるため、目的に応じた進め方を検討する必要がある。

【アクションプランの検討目的（例）】

- ①アカデミックプランの実現に向けたキャンパス整備
- ②建物の安全性確保のため施設条件の改善
- ③狭隘化解消のための施設再編・拡充
- ④老朽化解消・キャンパスイメージ向上のための改善

6.3.2

アクションプラン検討の際の配慮事項

検討において、次のことに配慮する必要がある。

- ・ 整備目的や検討することの意義を明確にする
- ・ 既存キャンパス、既存施設の条件把握（キャンパスの現状把握やニーズの把握等）
- ・ 想定される全ての案から、実現可能性の高い複数案について詳細な検討を行う
- ・ フレームワークプランとの整合性を保つために必要な条件整理を行う
- ・ フレームワークプランにおけるアクションプラン検討の位置づけを明確にする
- ・ 複数の評価軸を設定し、想定されるアカデミックプランの実現のためにどのシナリオを選択するか判断できるようにする
- ・ 関連する学部・研究科や部局と連携しながら整備課題の具体化を進める

下記の内容等について、条件整理を行う必要がある。

- ・ 必要機能、目的の整理
- ・ 既存施設の利用状況、既存施設の整備状況の把握
- ・ 時間軸を考慮した改修・改築シミュレーション
- ・ 築年数、耐久年数、法的条件の整理
- ・ 利用者のニーズの把握（学生、教員、職員、地域など）

など

上記は、フレームワークプランの検討・見直しの際においても配慮すべき事項である。

6.4 リーディングプロジェクト（重点検討課題）

6.4.1

リーディングプロジェクトの設定

目指すべきキャンパスの実現に向けキャンパス整備計画全体の調和を図るため、リーディングプロジェクトを活用する。継続して検討されるフレームワークプランと優先的に検討すべき複数の個別整備課題について整合性を保ちながら複合的に検討を進めるため、リーディングプロジェクトを設定し、マスタープランにおける検討の位置づけを明確にし、上位計画との整合性を保ちながら個別の整備課題を迅速かつ円滑に進めることとする。本マスタープランにおいては、2013年度の検討によって設定された以下の2つのリーディングプロジェクトを継承し、検討を行う。

- ①キャンパスモール（仮称）の創造（学而館・現図書館跡地利用計画）
- ②グリーンプロムナード/MLA軸（仮称）の形成（正門周辺の再整備計画）

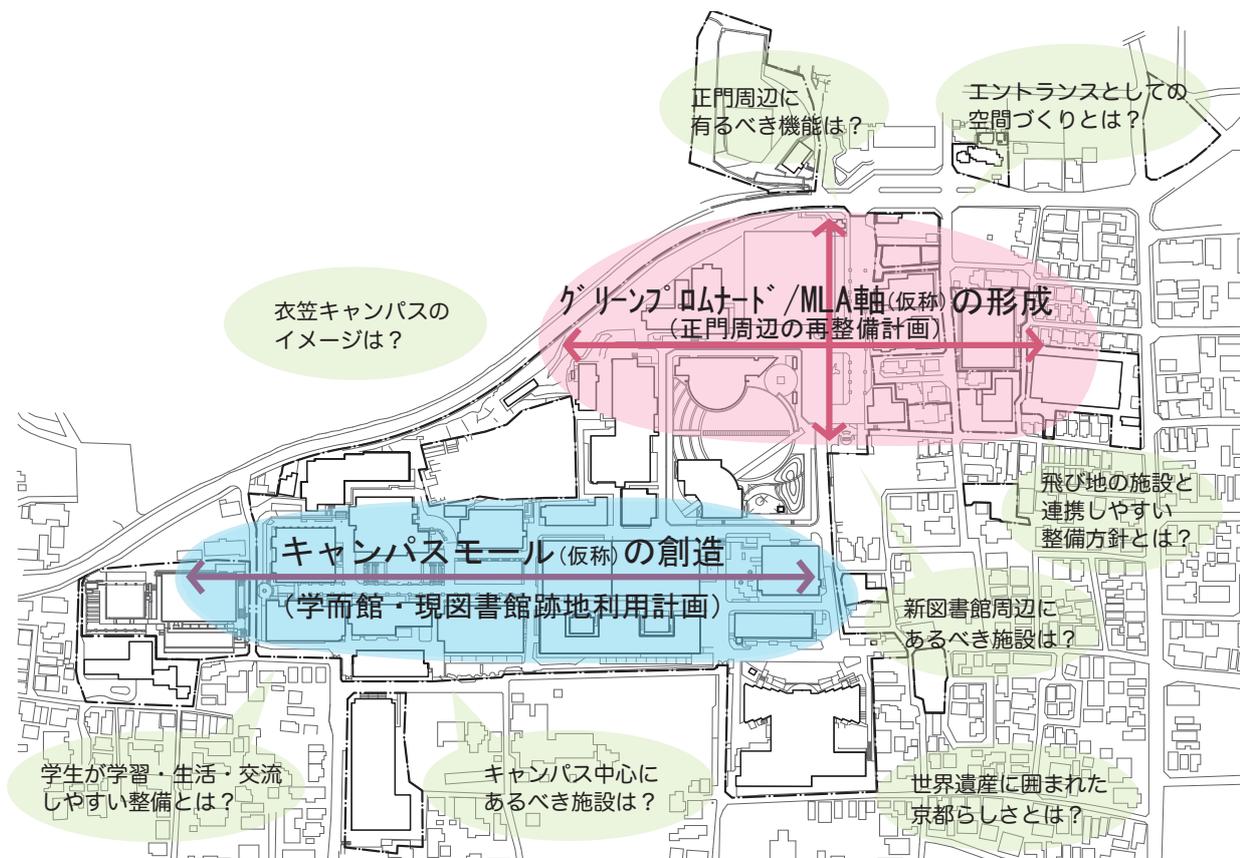


図 6-1 リーディングプロジェクトエリア

※上記①②の名称は、目指すキャンパス像を検討して行く中で決定する。
※MLAとは、一般に「MLA連携」としてミュージアム・ライブラリ・アーカイブの文化的情報資源などの連携を示す用語として広く普及・使用されている。リーディングプロジェクト設定においては、大学としてのミュージアム・ライブラリ・アーカイブ機能の円滑な連携について検討する目的で引用したものであり、設定エリアにMLA機能を全て集約することを検討したり、その他の機能を排除するものではない。

6.4.2 リーディングプロジェクトに設定した背景

1、グリーンプロムナード / MLA 軸（仮称）の形成

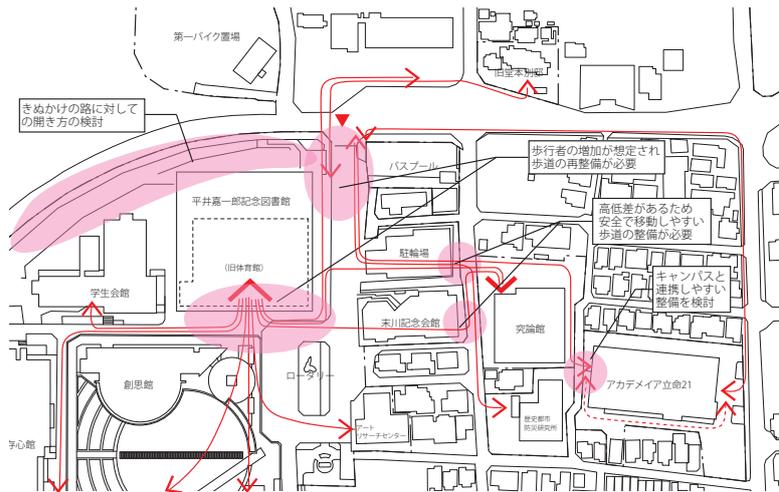


図 6-2 正門周辺の現状課題整理

【正門周辺の物理的変化】

- ① 究論館建設（2015年4月供用開始）
- ② 平井嘉一郎記念図書館建設（2016年4月開館予定）
- ③ 旧堂本別邸、正門近くの民家 2013年度本学所有
- ④ 未耐震建物（学生会館）の整備方針の検討

2、キャンパスモール（仮称）の創造

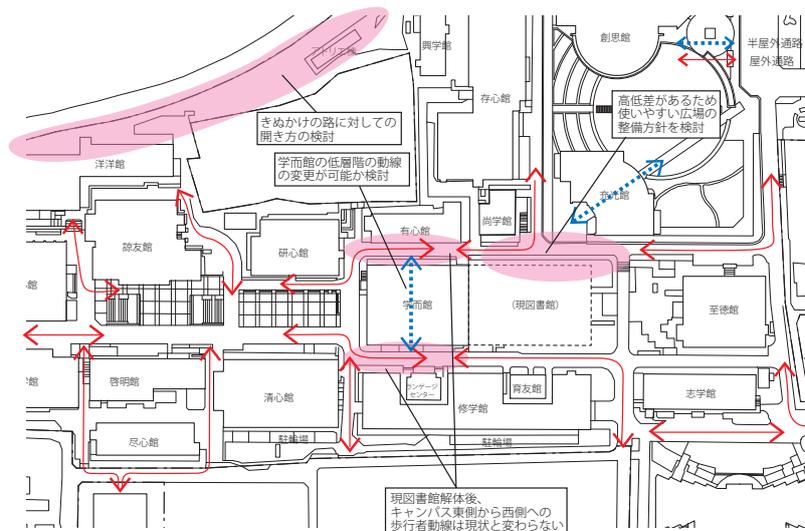


図 6-3 キャンパスモールの現状課題整理

【キャンパス中心の物理的変化】

- ① 現図書館の機能移転（2016年1月使用中止見込み）
- ② 現図書館の解体予定
- ③ 学而館内の一部機能移転（2015年3月）
- ④ その他

エリアの特徴

- ・ 正門周辺エリアへ平井嘉一郎記念図書館建設による新たな機能参入に伴い、新たなニーズの把握や安全・安心への対応など、正門周辺の再整備方針を総合的に検討する。
- ・ 正門という大学の顔となる場所の整備方針を検討する。
- ・ 正門前にバス停があり、観光客が多く行き来する立地を活かした、地域連携や社会とのつながりという観点を発展させた環境の創造、場の整備について検討する。
- ・ きぬかけの路の活性化につながる周辺用地の活用方針を検討する。

エリアの特徴

- ・ キャンパス中心エリアからの図書館機能移転による、移動や活動の行いやすいオープンスペースの形成を目指す。
- ・ 現図書館解体後、跡地の広場としての整備方針について検討する。
- ・ 大阪いばらきキャンパスに移転した政策科学部、政策科学研究科の利用スペースの活用計画を検討する。
- ・ キャンパスの中心として学生、研究者の専門的な学びの拠点となる環境整備方針を検討する。
- ・ 学生、教職員の積極的な交流を促す環境づくりを検討する。

chapter 7

キャンパス整備における ファシリティマネジメント

- 7.1 ファシリティマネジメントの必要性
 - 7.1.1 ファシリティマネジメントとは
 - 7.1.2 運用の効率化を図る推進体制

- 7.2 既存施設の考え方
 - 7.2.1 既存施設改修・改築増加への対策
 - 7.2.2 施設データの管理・更新
 - 7.2.3 目指す空間の質の実現に向けた
ライフサイクルコストの検討

- 7.3 キャンパス整備の推進体制
 - 7.3.1 施設整備の推進体制
 - 7.3.2 最大限に施設や環境を活かすための
施設管理・運営体制

良好なキャンパス環境の創造に向け、継続的にキャンパス整備を進めていくには、経営戦略や管理・運営面とのすり合わせが不可欠であり、学園全体のトータルファシリティマネジメントの検討が不可欠となる。関連各部局との協力のもと、フレームワークプランを踏まえながら検討を進めることが重要であり、具体的なアクションプランに繋げていくための必要予算の算出や評価基準の設定とのすり合わせなども必要となってくる。

7.1 ファシリティマネジメントの必要性

立命館大学が目指す良質なキャンパス環境の創造に向け、持続的なキャンパス整備を進めていくためには、そのための財源確保や実行のための経営戦略、施設マネジメントが必要であり、学園全体のファシリティマネジメント（FM）の考え方を活用することが有効である。財務・品質・供給の目標を設定し、PDCA サイクルをまわすことで全学的な体制のもと、目標の達成と更なる改善を目指すことが可能となる。

7.1.1

ファシリティマネジメントとは

ファシリティマネジメントとして整理すべき一般的な項目を右記する。これらの各項目について、既存の考え方を整理し、各方針を関連づけた計画が必要となる。ファシリティマネジメントを運用するためには企画・管理・運営の主管が異なる既存部局の横断的な連携強化により、運用の効率化を図り、さらなる質の向上を目指すことが重要である。

7.1.2

運用の効率化を図る推進体制

キャンパス整備・施設保全、キャンパス管理、キャンパス計画いずれも専門家を交えたフィジビリティスタディが必要となる。そのため、次のことを行っていくための推進体制が必要となる。

- ・ファシリティマネジメントの計画立案
- ・各部局担当からの情報収集と現状評価
- ・施設管理のFM推進体制
- ・情報の共有化
- ・適切な運営管理

本学においては、キャンパス整備は財務部管財課、キャンパス管理・施設保全は総務部総務課・キャンパス事務課・地域連携課が担っている。また、キャンパス整備事業を計画的に推進（キャンパス計画）するための専門的検討機関として、キャンパス計画室が設置され、事務局は総合企画部と財務部が担っている。（2015年4月現在）

ファシリティマネジメントの一般的な配慮項目

■財務管理

（資金調達、運用）

- ・各段階における施設整備関係経費の確保（企画検討、施設整備、屋外環境整備、運営（光熱水費）、保守点検、維持管理（清掃・備品管理）、修繕・改修、人件費など）
- ・財政構造の把握と目的に応じた財源の活用（補助金、自己収入、外部資金）
- ・限られた財源の適切な分配と優先度
- ・執行状況の把握

■品質管理

（企画、維持・管理・修繕計画）

- ・企画から運営、維持管理までの検討組織体制の確立
- ・修繕依頼の流れと維持管理主体の明確化
- ・修繕計画作成（短期・中期・長期）
- ・保守点検、維持管理
- ・進捗の共有
- ・品質管理の均一化のための規定設定

■供給管理

（施設整備計画、面積の分配）

- ・施設概要の管理（構造、用途、築年数、面積等）
- ・利用状況の把握（利用目的、管理者、利用者）
- ・施設整備の優先度の明確化
- ・必要な面積を適切に分配し、施設の有効活用につなげる

7.2 既存施設の考え方

7.2.1

既存施設改修・改築増加への対策

この間、大阪いばらきキャンパス開設をはじめ、衣笠キャンパスやびわこ・くさつキャンパスでの再整備が続き、新棟の建設など相当数の建設事業が継続してきている。今後は、新棟の建設に変わり既存施設のリノベーション（改修・改築など）が主要な整備課題となることが想定される。将来にわたり良好なキャンパスを維持するために、施設の維持・管理・運営の強化が不可欠となる。

改修・改築計画を進める際には、教学・研究における重要度や老朽化・安全性などの緊急性などを総合的に判断し、整備の優先順位を明確にすることが必要となる。特に、衣笠キャンパスにおいては建ぺい率が上限を迎えているため、計画的かつ長期的な建替計画を検討することが極めて重要となる。

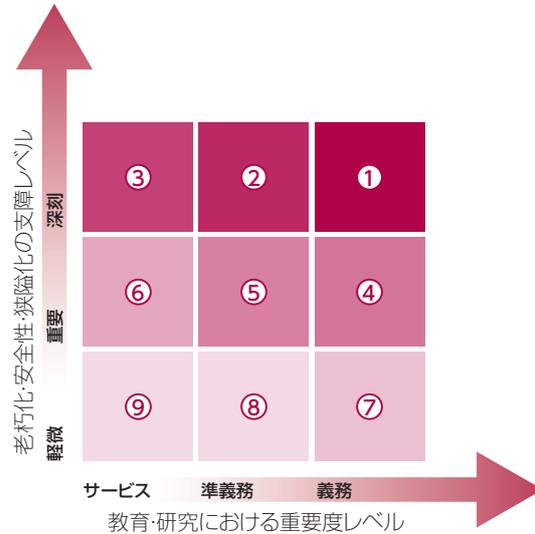


図 7-1 施設整備における優先順位の設定イメージ

7.2.2

施設データの管理・更新

施設の維持・管理・運営においては、既存データの管理や活用策の強化が求められる。衣笠キャンパスには、古い建物が多く、CAD化されていない図面や的確なデータが残されていない場合がある。今後、建て替え計画や改修などを検討するために、既存資料の再整理や共有しやすい情報の整理が求められる。

7.2.3

目指す空間の質の実現に向けた ライフサイクルコストの検討

施設や空間は造って終わりではなく、完成してからの維持・保全が重要となる。建設費よりも多額のライフサイクルコスト（LCC）が必要となることから適切なファシリティマネジメントが重要となる。

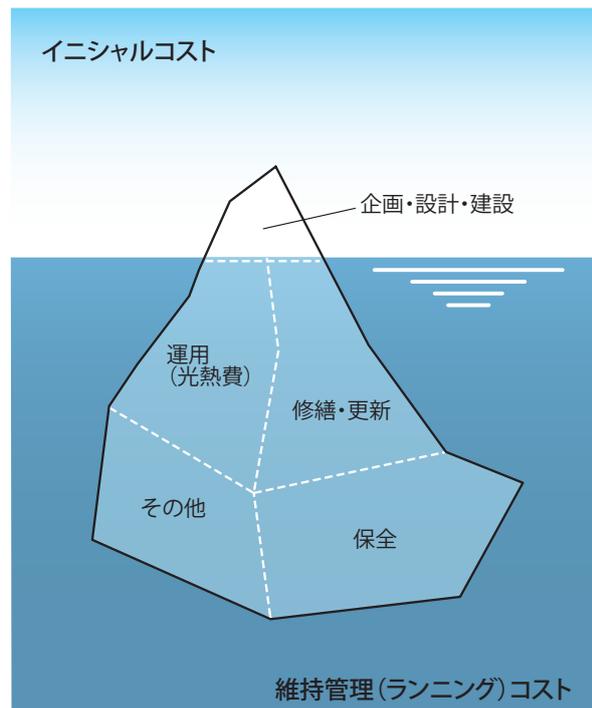


図 7-2 氷山に例えたライフサイクルコストのイメージ

7.3 キャンパス整備の推進体制

7.3.1

施設整備の推進体制

フレームワークプランで示した整備方針をプロジェクト毎にあてはめ実現していく為には、関連する複数の部局を横断した推進体制が必要である。

- ・ 管理運営面との調整
- ・ 既存施設との調整
- ・ 全学課題との調整

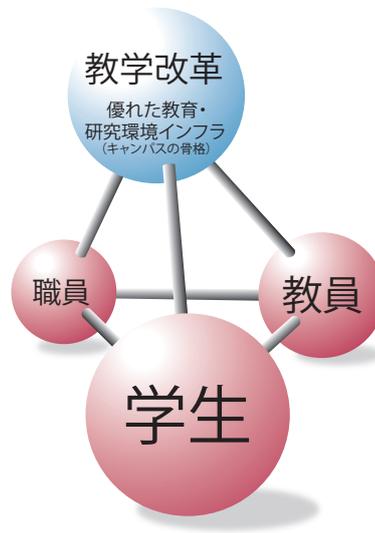


図 7-3 みんなでつくっている推進体制イメージ

7.3.2

最大限に施設や環境を活かすための管理・運営体制

継続・更新・発展する大学経営を支え、整備されたキャンパスを最大限に活用するためのファシリティマネジメントが必要である。長期的なキャンパスコンセプト実現に向けたキャンパス整備の手順や管理・運営体制、計画・管理・運営の一体的な評価体制の確立が必要である。

chapter 8

これまでの検討の流れと取り組み

8.1 2011年度までの検討内容

8.2 2013年度までの検討内容

8.3 2014年度の検討内容

chapter 8では、キャンパスマスタープラン策定におけるこれまでの検討の流れと今後の検討の進め方について確認する。京都キャンパスマスタープラン2014（4月暫定版）では、2014年度中に検討すべき課題を共有し、関係部局による主体的な検討と部課を超えた協力体制により、目指すキャンパス像を確立していくための手引きとして活用された。

8.2 2013年度までの検討内容

8.1.2

2013年度までの検討内容

2013年度には、R2020の後半期におけるキャンパス整備課題の具体化に向けて、これまでのキャンパス整備計画の検討を踏まえつつ、改めて正式にキャンパスマスタープランを策定したうえで、良好なキャンパス環境整備を実現していけるよう具体的な検討を開始した。個別的・対処的な整備を避け、キャンパス狭隘化の解消を図るとともに、キャンパスにおける利便性や快適性および質の向上について、中長期的な視点を常に意識しながら「学生の視点・満足度」を最重視し、教育・研究において最先端の戦略的な展開や学習者を中心とした継続的な取り組み、研究分野も含む国際化の進展等に柔軟に対応していくためのものである。

キャンパスマスタープラン策定に向けては、「京都キャンパス将来構想検討委員会」のもとにおかれた「2020年までの京都キャンパスプラン策定部会」において集中して検討を開始し、今後、全学から広く意見を聞きながら、キャンパスマスタープランにおけるフレームを形成する整備方針を固めていくためのたたき台としてのキャンパスマスタープランを作成してきた。2013年度においては、立命館大学キャンパスマスタープランの位置づけや役割、構成、達成方策などについて議論を深め、同時に策定を進めているびわこ・くさつキャンパスマスタープランと共通のキャンパス整備の基本目標を策定した。また、キャンパスマスタープラン策定に関する懇談や現地調査を実施するとともに、学内の既存データを活用しながら京都キャンパスの利用状況や整備状況、学内ニーズなど把握を進め、衣笠キャンパスにおける目指すべき空間コンセプトや整備方針などの検討を深めた。



図 8-2
キャンパスマスタープラン 2014 (4月暫定版)



写真 8-1 若手懇談会の様子(2014年4月)

8.3 2014年度の検討内容

8.1.3

2014年度の検討内容

2013年度までの検討の到達点を「京都キャンパスマスタープラン2014（4月暫定版）」としてまとめ、京都キャンパス将来構想検討委員会（2014.06.25）において討議し、常任理事会（2014.07.02）へ報告を行った。この時点でのマスタープランには記載すべき項目が全て掲載できていないことから、暫定版という扱いとした。

2014年度は「京都キャンパスマスタープラン2014（4月暫定版）」で未記載であった項目を含め、フレームワークプランに反映させるための具体的な検討や学内意見を聞く取り組みを進めた。4月には、今後の立命館学園を担う若手職員が日頃感じているキャンパスに対する想いや課題について意見を聞くため、キャンパス計画室を中心に総合企画課との懇談の機会を設けたり、キャンパスマスタープラン2014（4月暫定版）を学内教職員にポータルを活用して公開し、パブリックコメントとして意見募集を行った。2014年度の後半期には、優先的かつ重点的に検討が必要な課題であった「交通」と「パブリックスペース」について、「2020年までの京都キャンパスプラン策定部会」のもとに、「パブリックスペース及び交通計画検討作業グループ（以下、作業グループ）」を設置し、3回の作業グループと2回のワークショップを開催して関係部局によって現状と課題を共有しながら方針の検討が進められ、その内容をフレームワークプランとしてまとめ、「京都キャンパスマスタープラン2015Ver.1」へ反映することとした。今後は、検討の到達点を踏まえながら、中長期的な視点で全体最適を見据えたR2020後半期計画の具体化につなげることとする。



写真 8-2 作業グループのワークショップの様子（2015年1月）



写真 8-3 作業グループのワークショップにおけるまとめ（一例）（2015年1月）

付録

- ・ 立命館憲章
- ・ 建学の精神
- ・ 教学理念
- ・ 立命館 学園ビジョン R2020
- ・ 立命館環境行動指針
- ・ 立命館スポーツ宣言
- ・ 立命館大学が所有する敷地の京都市都市計画図
- ・ 会議記録（2013年度～2015年度）
- ・ 検討組織名簿（2013年度～2015年度）

立命館憲章

THE RITSUMEIKAN CHARTER

立命館は、西園寺公望を学祖とし、1900年、中川小十郎によって京都法政学校として創設された。「立命」の名は、『孟子』の「尽心章句」に由来し、立命館は「学問を通じて、自らの人生を切り拓く修養の場」を意味する。

立命館は、建学の精神を「自由と清新」とし、第2次世界大戦後、戦争の痛苦の体験を踏まえて、教学理念を「平和と民主主義」とした。

立命館は、時代と社会に真摯に向き合い、自主性を貫き、幾多の困難を乗り越えながら、広く内外の協力と支援を得て私立総合学園への道を歩んできた。

立命館は、アジア太平洋地域に位置する日本の学園として、歴史を誠実に見つめ、国際相互理解を通じた多文化共生の学園を確立する。

立命館は、教育・研究および文化・スポーツ活動を通じて信頼と連帯を育み、地域に根ざし、国際社会に開かれた学園づくりを進める。

立命館は、学園運営にあたって、私立の学園であることの特性を活かし、自主、民主、公正、公開、非暴力の原則を貫き、教職員と学生の参加、校友と父母の協力のもとに、社会連携を強め、学園の発展に努める。

立命館は、人類の未来を切り拓くために、学問研究の自由に基づき普遍的な価値の創造と人類的諸課題の解明に邁進する。その教育にあたっては、建学の精神と教学理念に基づき、「未来を信じ、未来に生きる」の精神をもって、確かな学力の上に、豊かな個性を花開かせ、正義と倫理をもった地球市民として活躍できる人間の育成に努める。

立命館は、この憲章の本旨を踏まえ、教育・研究機関として世界と日本の平和的・民主的・持続的発展に貢献する。

2006年7月21日 学校法人立命館

建学の精神「自由と清新」

立命館学園は、2000年に創始130年、学園創立100周年を迎えた、日本の私立総合学園のなかでも、歴史と伝統をもつ学園のひとつです。立命館学園は、現在、立命館大学、立命館アジア太平洋大学の2つの大学と、立命館小学校、立命館守山中学校・高等学校、立命館中学校・高等学校、立命館宇治中学校・高等学校および立命館慶祥中学校・高等学校の5つの附属校をもつ総合学園です。

立命館の歴史は、近代日本の代表的な政治家で、国際人であった西園寺公望が、1869（明治2）年、20歳の若き日に、京都御苑の邸内に私塾「立命館」を開設したことに始まります。その翌年、学生たちの高談放論を危険と見なした時の太政官留守官の差留命令により立命館は閉校を命じられますが、西園寺の秘書を務めたこともある中川小十郎が、その精神を受け継いで、1900年、勤労者のための夜学校「京都法政学校」を設立しました。これが学園としての立命館の始まりです。その後、1913年、京都法政学校は、西園寺の承諾を得て、「立命館」の名称を継承し、今日に至っています。

中川小十郎は、西園寺の「自由主義と国際主義」の精神を受け継ぎ、「自由にして清新」な学府、つまり自由にして進取の気風に富んだ学園の創造をめざしました。この精神は、立命館学園の建学の精神として、今日まで受け継がれ、学園に集う者の心に息づいています。

今日、立命館学園は、わが国でも最も積極的に大学改革、学園創造をすすめる学園として社会の高い評価を受けています。このような本学園の先進性、創造性は、まさに「自由と清新」という建学の精神に根ざすものにほかなりません。

教学理念「平和と民主主義」

戦後、立命館学園は、末川博を総長に迎え、第二次世界大戦と十五年戦争に対する深い反省に立って、憲法と教育基本法に基づく「平和と民主主義」を教学理念として掲げました。そして、建学の精神と教学理念を、実際の教育や研究に生かすために様々な取り組みを行ってきました。

1960年代には、それまでの法学部、経済学部、文学部、理工学部に加えて、1962年には経営学部を、1965年には産業社会学部をそれぞれ開設しました。

1987年、理工学部情報工学科を増設し、1988年には西日本で最初の国際関係学部を設置しました。さらに1994年、滋賀県草津市に「びわこ・くさつキャンパス（BKC）」を開設、理工学部を拡充移転し、同時に衣笠キャンパスには、政策科学部を設置しました。1998年には経済、経営両学部がBKCに移転し、理工学部と共同した「文理融合キャンパス」を目指す、BKC新展開が進められ、2000年4月には、立命館慶祥中学校・2003年4月には、立命館宇治中学校が開校し一貫教育のさらなる充実がはかられました。また、創立100周年を迎えた2000年に、「自由・平和・ヒューマニズム」、「国際相互理解」、「アジア太平洋の未来創造」を基本理念とした立命館アジア太平洋大学（APU）が開学、2004年にはBKCに情報理工学部を設置、2005年にはテクノロジー・マネジメント研究科を設置しました。2006年に開設した朱雀キャンパスには経営大学院を、2007年には公務研究科（公共政策大学院）を設置。さらに衣笠キャンパスに映像学部を、また立命館守山中学校を開校するなど、学園は「自由と清新」の建学精神、「平和と民主主義」の教学理念の上に立ち、それを具体的に活かしつつ、高等教育機関として今日の新しい社会の要請に応える努力を、先進的、創造的に積み重ねています。1987年、理工学部情報工学科を増設し、1988年には西日本で最初の国際関係学部を設置しました。さらに1994年、滋賀県草津市に「びわこ・くさつキャンパス（BKC）」を開設、理工学部を拡充移転し、同時に衣笠キャンパスには、政策科学部を設置しました。1998年には経済、経営両学部がBKCに移転し、理工学部と共同した「文理融合キャンパス」を目指す、BKC新展開が進められ、2000年4月には、立命館慶祥中学校・2003年4月には、立命館宇治中学校が開校し一貫教育のさらなる充実がはかられました。また、創立100周年を迎えた2000年に、「自由・平和・ヒューマニズム」、「国際相互理解」、「アジア太平洋の未来創造」を基本理念とした立命館アジア太平洋大学（APU）が開学、2004年にはBKCに情報理工学部を設置、2005年にはテクノロジー・マネジメント研究科を設置しました。2006年に開設した朱雀キャンパスには経営大学院を、2007年には公務研究科（公共政策大学院）を設置。さらに衣笠キャンパスに映像学部を、また立命館守山中学校を開校するなど、学園は「自由と清新」の建学精神、「平和と民主主義」の教学理念の上に立ち、それを具体的に活かしつつ、高等教育機関として今日の新しい社会の要請に応える努力を、先進的、創造的に積み重ねています。

立命館 学園ビジョン R2020

私たちは、立命館憲章の精神に則り、2020年における立命館の学園像として「学園ビジョン R2020」を掲げます。

Creating a Future Beyond Borders

自分を超える、未来をつくる。

人類と地球の、持続可能で平和な未来をつくるために。

私たちは、私たち自身の、組織の、地域や国の、制度の、さまざまな

“Border”を超え、

その力を発揮し、

未来に貢献するスピリットあふれる学園になることをめざします。

自分を超える

「自分」とは、一人ひとりの個であり、個が所属するさまざまな集まりでもあります。

立命館学園での学びを通して、互いの価値を認め合いながら、

それらが抱える境界や限界など既存の枠を超えて踏み出すことで

私たちの可能性をひろげていきます。

未来をつくる

私たちは、多様なコミュニティをつくり、つながり、新しい価値を創造しながら、

一人ひとりが自らの未来をつくりだすとともに、

一人ひとりが未来の確かな力となる学園をつくります。

学園ビジョンを支える3つの柱

多様なコミュニティにおける主体的な学びの展開

立命館学園は、知識の伝達という学びのスタイルにとらわれず、学習者がより主体的に学び・成長することのできる場になるために、年齢、分野、国籍をはじめとする様々な Border を超えて、ともに高めあうことのできる学習者中心のコミュニティづくりを進めます。立命館学園は、ここで学ぶ人たちが自らの力で課題を見出し、その解決方法を考え、それを社会の様々な人たちとともに語らい・実行する人になることを、新しい教育の目標とし、その実現をめざします。

人類・自然・社会に貢献する立命館らしい研究大学への挑戦

立命館学園は、分野、組織、年齢、時間、国境といった研究を取り巻く Border を超え、学内外を問わず研究に携わる様々な人たちが学内外から集い、互いを高めあいながら、研究の実を育むことのできる学園づくりを進めます。このために、一人ひとりの教員が自らの研究に対し常に前向きに取り組むマインドを持つとともに、若手研究者が研究力を大きく伸ばすことのできる学園となることをめざします。立命館学園は、ここで得られた成果を国内外を問わず広く発信するとともに積極的に社会に役立てていきます。

学ぶことの喜びを実感できる学園づくり

立命館学園は、年齢、性別、国籍、分野など様々な Border を超え、多くの人々が集い、ともに学ぶことの喜びを実感できる学園づくりを進めます。ここに集う人たちは、地域や世界とのつながりを知り、人類・自然とのかかわりを感じながら自らの成長と社会における役割を認識します。このような立命館学園をここに集う人たちがともに作り上げていくことをめざします。

基本計画

1. 国際社会と地域に貢献する開かれた学園へ

「Creating a Future Beyond Borders 自分を超越る、未来をつくる。」をめざし、以下の取り組みを進めます。

- (1) アジア太平洋地域に位置する学園として、グローバル化する社会のなかで、世界とつながり、他者と共生し、平和な未来の創造に貢献する特色ある教育、研究、学園をめざします。
- (2) 大学・学校・学部・研究科の質向上とともに、総合学園として未来の課題に応える新たな教育・研究領域の創造を進めます。
- (3) 国際通用性のある教育課程を通じた学びの中で、未来社会の主人公を育てる次代創造の場に相応しい学園をめざします。
- (4) 学内外を問わず研究に携わる様々な人たちが集い、互いを高めあいながら、教育・研究の実を育むことのできる学園をめざします。
- (5) 一人ひとりの構成員の真摯な努力が豊かな学園づくりの大河となることをめざします。
- (6) 一人ひとりが主人公となる、民主主義と平和の構築に貢献する学園をつくりだします。
- (7) 国境を超えて多くの若人から選ばれる学園をめざします。
- (8) 学内の諸機関との連携および立命館の海外オフィスを活用して国際産学官連携を進め、途上国およびその周辺地域の発展に貢献するとともに国際社会にその成果を発信します。

2. 教育 —学びのコミュニティと学習者中心の教育—

グローバル化する社会の期待に応え、社会を拓く人間の育成をめざして、以下の取り組みを進めます。

- (1) グローバル化する社会で、国境・言語など様々な“Border”を超え、他者を理解しつつ、多様な個をまとめ、自ら行動し、現代社会・国際社会の状況を切り拓くことができる人間を育成します。
- (2) 確かな学力をもとに、高い倫理性をもって、個性豊かに世界で活躍できる人間を育成します。
- (3) 正課・課外、国内・国外といった“Border”を超え学びあう多様な学びのコミュニティを形成し、学習者中心の教育を進めます。
- (4) 集団的な学びへの支援と、一人ひとりの個の視点からの支援を組み合わせた包括的な学習者支援を実現します。
- (5) 多面的アセスメントなどによる総合的な実態把握に基づいた学びと成長への支援を行います。
- (6) 時代の要請と社会的期待に応える大学院を創造します。
- (7) 立命館のコア人材を育成する小中高大一貫教育の一層の充実と発展をめざします。

3. 研究 —特色あふれる「グローバル研究大学」をめざして—

特色あふれる「グローバル研究大学」をめざして、以下の取り組みを進めます。

- (1) 立命館らしい特色あふれる研究を推進します。
- (2) 研究の国際化を重視したグローバルな展開を推進します。
- (3) 知識基盤社会を支える学術研究を通じた人間育成、大学院博士課程の強化を含めた、研究者ライフコースの視点による若手研究者等の育成に努めます。
- (4) 自然科学系、人文・社会科学系および融合した領域の研究を推進し、研究成果を広く社会に発信します。
- (5) 研究者が生き活きと研究に取り組める環境を醸成します。

4. 総合学園づくり —教育・研究の質向上を支える学園創造—

教育・研究の質向上を支える学園創造をめざして、以下の取り組みを進めます。

- (1) 参加・参画による民主主義的な学園づくりをめざします。
- (2) 生き活きと働くことができる学園づくりをめざします。
- (3) 社会に貢献し、社会から支持される学園づくりをめざします。
- (4) 国内外の社会的連携・ネットワークのさらなる強化をはかります。
- (5) 総合学園として立命館大学と立命館アジア太平洋大学、各附属校との連携を一層強化します。
- (6) 大学教員・附属校教員・職員の質の向上と体制の充実をめざします。
- (7) 全ての大学・学校において学園全体としてのマスター・プランに基づくキャンパス創造に取り組みます。

5. 教育・研究機関としての立命館の役割 —東日本大震災を受けて—

3月11日に発生した東日本大震災とその後の福島原子力発電所事故は、教育・研究機関としての大学・学校の役割に新たな課題を突きつけています。復興へ向けた社会の要請を受けて、立命館は以下の取り組みを進めます。

- (1) 教育・研究機関として人類社会の未来を切りひらく役割と使命を果たすことをあらためて胸に刻みます。そして立命館として、被災地の復興、日本社会の再建に貢献する取り組みを長期にわたって全学をあげて進めます。
- (2) 日本社会の復興を担う人間の育成に取り組み、若者が存分に勉学を深める場としての学園づくりを進めます。
- (3) 教育・研究機関として、人と人やこころのつながり、人と社会のつながり、人と自然の共存、省エネルギー・親環境社会、災害に強い社会といった震災後の新しい社会の構築に寄与すべく可能な限りの努力を行います。
- (4) 災害時における学生・生徒や教職員さらには校友・父母をはじめ学園に関する者の安全・安心の向上に取り組みます。
- (5) 地域の一員として、地域社会との連携を強め、災害時の地域社会の安全・安心を向上する役割を担う学園創造を進めます。

立命館大学の基本計画

基本目標

(1) 学習者が中心となる教育および包括的学習者支援を通じて総合的人間力をもった学生を育成します。

立命館大学では、「総合的人間力」を持った学生を育成します。具体的には、1) 他者とともに学び、相互の信頼と共感のなかで、一人ひとりが自己を確立していく、2) 社会とのかかわりのなかで活動し、社会貢献を通じて成長していく、3) 国際社会における多文化共生と社会的な視野をもって判断し行動していくことのできる学生を育成します。全ての学生がこのような人材養成像を踏まえ、一人ひとりの自己実現を達成するため、以下の主要な基本目標を設定します。

- ① 正課・課外の枠を超えた多様な「学びのコミュニティ」を形成します。
- ② 一人ひとりの成長と集団の中での成長を重視した教学展開と支援を進めます。
- ③ “Border”を超えて国内・国外の学生がともに学びあう国際教育の仕組みを構築します。
- ④ 多面的なアセスメントなどによる総合的な実態把握を基礎にした支援を進めます。
- ⑤ キャリア形成の視点からの自己形成・成長支援を進めます。
- ⑥ 正課・課外の枠を超えた学びを実現するための環境・条件づくりと支援を構築します。

(2) 特色あふれる「グローバル研究大学」をめざします。

大学における研究の社会的責務を果たすため、国際的な視点で研究に取り組み、その成果を社会に発信するとともに、教育に還元するグローバル研究大学をめざします。このために、以下の基本目標を設定します。

- ① 立命館大学が、国内トップクラスの研究力量を有する大学としての地位を確立するとともに、国際的に高い水準の特色ある研究拠点や研究分野を有する大学として認知されることをめざします。
- ② 常に一段高い研究水準をめざし、研究に意欲的に取り組むような風土づくりや研究活動を支える研究環境の整備を進めます。
- ③ 産学官連携活動を通じて、国・地方公共団体や産業界との受託研究・共同研究等を推進し、これらの研究成果を広く社会に還元し、社会に貢献します。

(3) 教育、研究、学生生活を支えるキャンパスづくりを進めます。

2020年に向けて全ての学部・研究科の教学展開を実現させ、その質向上をはかるとともに、学生生活・アメニティの改善、学生諸活動の施設等の充実、交通アクセス・通学条件の改善につながるものとして、大阪茨木キャンパスの開設および既存キャンパスの整備を進めます。

- ① 教育・研究の質向上を支えるキャンパスづくりを進めます。
- ② 学生・院生の課外自主活動を支えるキャンパスづくりと各キャンパスの特色ある施設等の整備を進めます。
- ③ コミュニティスペースの配置を進めます。
- ④ 飲食・スポーツ等を含む学生・院生・教職員のアメニティの改善を進めます。
- ⑤ 地域との調和・地域への貢献をめざしたキャンパスづくりを進めます。
- ⑥ 安全・安心、親環境、地域防災拠点のキャンパスづくりを進めます。

立命館環境行動指針

立命館学園は、立命館憲章において、「人類の未来を切り拓くため、学問研究の自由に基づき普遍的な価値の創造と人類的諸課題の解明」に向けて邁進することを宣言している。人間を取り巻く環境の維持、新たな循環システムの構築は、まさに私たちが志す「人類の未来を切り拓く」取り組みに他ならない。自然科学のみならず、社会制度・システムの再構築や人間の行動原理の理解と解明など、様々な分野における人材育成と学術研究は、本学園が果たすべき大きな役割の一つであると認識する。

立命館は、学園のビジョン「Creating a Future Beyond Borders 自分を超越する、未来をつくる。」に基づき、学園構成員が、既存の枠を超え学園全体が一丸となり、教育・研究を通じて持続・循環可能な地球環境の「未来をつくる」決意をここに表明する。

行動指針

立命館は、「京都議定書」の実行等の社会的責任を果たすとともに、持続可能な社会実現に積極的に貢献するため、温室効果ガス排出量削減を含む環境負荷低減の実現に向け、自主的な削減目標を設定し、学園構成員一人ひとりが主体的に行動する。

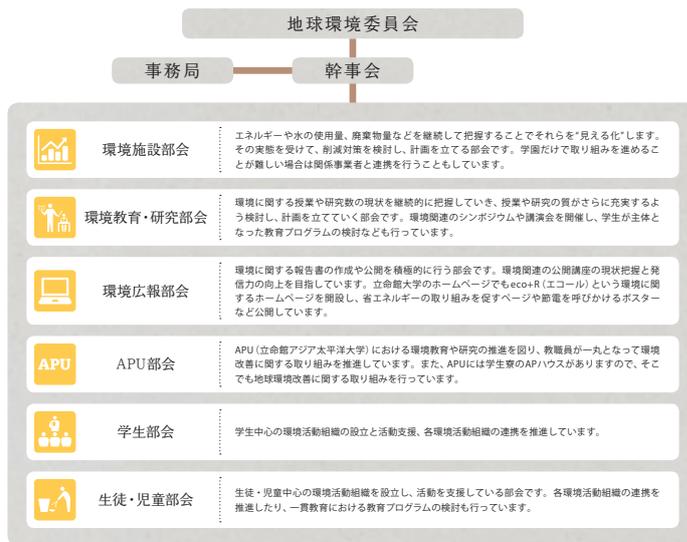
- [1] キャンパスのエネルギー、紙、水の使用量及び廃棄物の排出量を正確に把握し、分析、評価することで、環境負荷の低減ならびにエネルギーコスト削減につなげる。キャンパス整備計画においてはエコキャンパス化を追求する。
- [2] 小学、中学、高校、大学、大学院それぞれの世代に合わせた環境教育を推進するとともに、児童・生徒・学生・大学院生による取り組みの支援を通じて、様々な分野で地球環境保全、環境負荷低減活動のリーダーとなる人材を育成する。
- [3] キャンパスを産学連携の技術開発の実験フィールドとして研究活動に活用し、また自らの環境負荷低減に繋げる。
- [4] 環境教育分野での、自治体・地域社会・NGO・NPO・他大学等との連携を推進する。
- [5] 情報公開を通じて、学園の環境への取り組みを「見える化」することにより、学園構成員の一人ひとりがその到達点と課題を認識し、継続的に改善に取り組むサイクルを創り上げ、持続的な環境負荷低減の実現を目指す。

2014年11月26日
学校法人立命館



立命館学園の環境マネジメントシステム

本委員会は学生、生徒・児童、教員、職員が学園全体で環境問題に取り組むために2010年2月1日に発足しました。
学園全体の地球環境貢献への取り組みを検討・立案し、その実施を主導する組織です。



[環境負荷削減の中長期目標[※]]

年度・段階	2013年(達成状況)	2020年(中期目標)	2050年(長期目標)
エネルギー [1m ² あたりの使用量]	約8.9%削減	25%削減	65%削減
水 [1人あたりの使用量]	約2.3%削減	25%削減	50%削減
一般廃棄物 [総量]		25%削減	50%削減
教育・研究	環境意識の高い、様々な分野での地球環境保全、環境負荷低減活動のリーダー的人材輩出。キャンパスを実験フィールドとした産学連携の技術開発へ繋げる事で社会に貢献し、併せて自らの環境負荷低減に繋がる好循環のサイクルを生み出す。		
地域社会への展開	学生が中心となった地域貢献活動の充実、各キャンパス毎に行政と連携強化。		
提携大学との連携	提携大学の環境負荷削減に対して協力することで世界的レベルでの温室効果ガス排出量削減等に貢献する。		
情報公開	『見える化』により、学園構成員の一人ひとりが問題点を正しく認識し、その改善に向けて、積極的に取り組んでいくことで環境負荷低減に繋げる。		

※中長期目標とは、2010年に地球環境委員会発足時に設定した環境負荷削減目標です。1㎡当りの年間エネルギー使用量（原単位・原油換算）を、2008年度比で2020年までに▲25%、2050年までに▲65%の水準まで削減することを掲げています。

立命館スポーツ宣言

立命館は、スポーツを人類共通の文化としてその意義と価値を享受することが、個人の幸福と、社会の平和と繁栄にとって不可欠なものであると考え、「立命館憲章」に基づきスポーツを学園づくりのための重要な要素として位置付ける。

立命館は、多様な学びの機会の創造という観点から、スポーツを児童・生徒・学生の「学びと成長の場」と見なし、スポーツの振興と発展に努めてきた。時代の変化に対応し、これまで以上に社会の要請に応えることができる人材を育成するとともに、スポーツの持つ力と役割を改めて学内外に示すことを目的とし、ここに立命館スポーツ宣言を定める。

立命館は、建学の精神と教学理念に基づき、高い水準で、スポーツの振興と発展を担い「未来を信じ、未来に生きる」の精神をもった人間の育成に努める。

立命館は、学祖西園寺公望の「自由主義と国際主義」の精神を受け継ぎ、スポーツの持つ力が言葉や文化、さらには民族、国境を越えた相互理解の手段となると考え、スポーツを通じて、自由にして進取の気風に富んだ国際平和と国際交流に寄与することのできる地球市民の育成に努める。

立命館は、私立の総合学園として、その教育課程においてスポーツをとおした全人教育を実践するとともに、クラブ・サークルをはじめとした課外自主活動の振興・発展と環境整備に努める。

立命館は、障がいの有無に関わらず、すべての学園構成員に、スポーツに参加する基本的権利を尊重すると共に、スポーツを日常生活に根付かせ、心身ともに健康な暮らしのために生涯にわたってスポーツに親しむことを奨励する。

立命館は、スポーツの文化価値とその教育における意義を深く認識し、スポーツに関する諸分野での教育・研究を高い水準で推進し、わが国のスポーツの振興・発展をリードする存在となるよう努める。

立命館は、スポーツが学園の理念を具現化する力を持ち、校友・父母を含む学園関係者が一体となることに貢献し、学園の発展を促す重要な原動力となると考え、この振興と発展に努める。

立命館は、スポーツを通じて、老若男女を越えた地域コミュニティの形成と発展に携わり、地域社会の健康で豊かなコミュニティづくりに貢献することを社会的役割の一つとする。

2014年4月9日
学校法人立命館

立命館大学が所有する敷地の京都市都市計画図

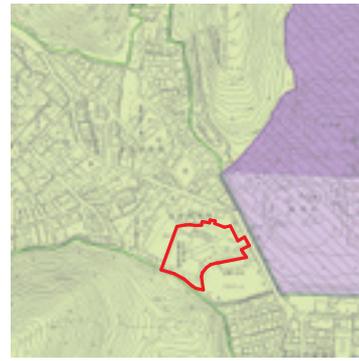
■西園寺記念館



・氷室地区地区計画区域

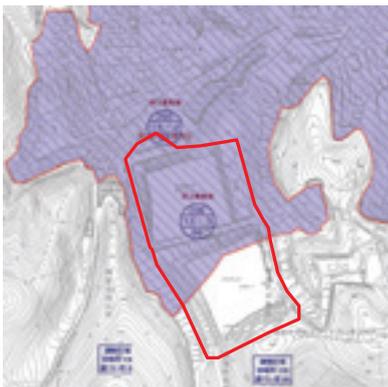


・風致地区第3種地域



・近景デザイン保全区域

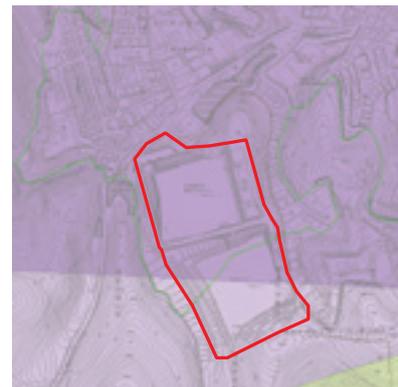
■原谷グラウンド



・準工業地域および調整区域

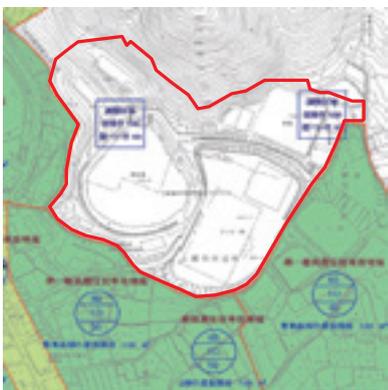


・山ろく型建造物修景地区および風致地区第2種地域

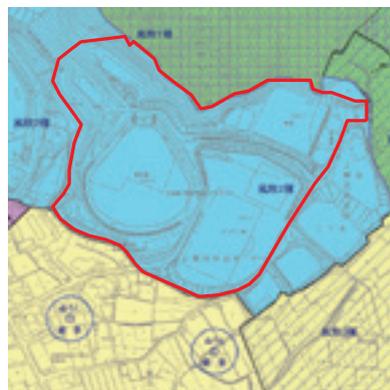


・遠景デザイン保全区域

■柘野グラウンド



・調整区域

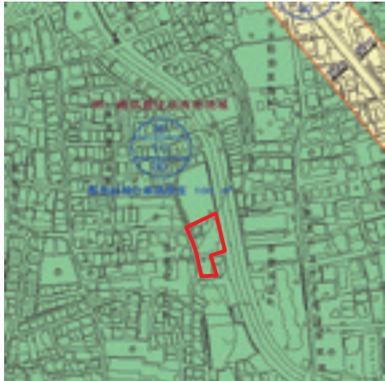


・風致地区第2種地域



・遠景デザイン保全区域

■国際ハウス常盤



・第一種住居専用地域



・山ろく型建造物修景地区



・遠景デザイン保全区域

■国際ハウス宇多野



・第一種住居専用地域



・風致地区第1種地域



・遠景デザイン保全区域

■国際ハウス大將軍



・第一種および二種中高層住居専用地域



・山並み背景型建造物修景地区



・遠景デザイン保全区域

会議記録

■機関会議

2014年度	常務会 常任理事会 ○京都キャンパスマスタープラン2014 (4月暫定版)の報告	2014年6月30日 2014年7月2日
2015年度	常務会 常任理事会 ○京都キャンパスマスタープラン2015 Ver.1の報告	2015年9月28日 2015年9月30日

■京都キャンパス将来構想検討委員会

2012年度	第2回 第5回 第6回 第7回	2012年6月13日 2012年9月14日 2012年12月17日 2013年2月22日
2013年度	第1回 第6回 第7回	2013年5月22日 2013年11月15日 2014年3月20日
2014年度	第1回 第2回 第3回	2014年6月25日 2014年9月24日 2015年3月25日
2015年度	第1回 第2回	2015年6月3日 2015年7月27日

■2020年までの京都キャンパスプラン策定部会

2013年度	第1回 第2回 第3回 第4回 第5回	2013年6月27日 2013年10月8日 2013年11月12日 2013年12月9日 2014年2月24日
2014年度	第1回 第2回 第3回	2014年5月21日 2014年7月22日 2015年3月20日
2015年度	第1回	2015年5月27日

■パブリックスペース及び交通計画検討作業グループ

2014年度	第1回 第2回 第3回 ワークショップ1 ワークショップ2	2014年10月28日 2014年11月27日 2015年2月20日 2015年1月19日 2015年1月26日
--------	---	--

■懇談

2013年度	2013年12月24日 2014年1月8日 2014年2月14日	国際部との懇談 ミュージアムとの懇談 研究部との懇談
2014年度	2014年4月11日 2014年4月22日 2015年7月29日 2015年1月21日	教務課との懇談 若手職員懇談会 学生部との懇談 白川静記念東洋文字文化 研究所(社会連携課) との懇談

■学生参加

2011年度 ～2014年度 複数回実施	基本構想、基本計画検討過程への参加(ワークショップや模型作成等)、学生懇談会など
	[個別建物の実績] ・ 究論館 ・ 平井嘉一郎記念図書館

■意見募集

2014年度	○キャンパスマスタープラン2014(4月暫定版)に対する学内教職員意見募集実施 [集計期間]2014年7月2日～9月22日 常任理事会(2014.07.02)へ報告後、UNITAS HOT NEWS(教職員向けお知らせメール)、UNITAS(教職員向けお知らせ冊子)にて意見募集の案内を行った。
2015年度	○キャンパスマスタープラン2015ver.1に対する学内教職員意見募集実施 [集計期間]2015年6月23日～8月31日 京都キャンパス将来構想検討委員会(2015.06.03)へ報告後、UNITAS HOT NEWS(教職員向けお知らせメール)、教職員ポータルシステム上の掲示板にて意見募集の案内を行った。 ○キャンパスマスタープラン2014(4月暫定版)に対する学内事務組織意見募集実施 [集計期間]2015年6月23日～7月10日 全学事務組織に対しては、部次長会議(2015.06.25)にてCMPの説明がなされ意見交換を行い、各部課から意見を求めた。

■ヒアリング

2015年度	○キャンパスマスタープラン2015ver.1に対する学部・研究科対象としたヒアリング実施 [実施期間]2015年6月23日～7月14日 [対象]5学部・研究科、5独立研究科 京都キャンパス将来構想検討委員会(2015.06.03)へ報告後、全学部・研究科の執行部へ訪問しCMPを説明の上、意見交換を行った。 ○キャンパスマスタープラン2015ver.1に対する機構を対象としたヒアリング実施 [実施期間]2015年8月3日～9月8日 京都キャンパス将来構想検討委員会(2015.07.27)へ報告後、機構に対しCMPを説明の上、意見交換を行った。
--------	---

2013年度の検討組織名簿

【京都キャンパス将来構想検討委員会】		
委員長	中村 正	総長特別補佐
委員	國廣 敏文	常務理事（学生担当）
	竹瀨 修	法学部長
	有賀 郁敏	産業社会学部長
	文 京洙	国際関係学部長
	桂島 宣弘	文学部長
	品田 隆	映像学部長
	松原 洋子	先端総合学術研究科長
	田浦 秀幸	言語教育情報研究科長
	荒木 穂積	応用人間科学研究科長
	松宮 孝明	法務研究科長
	鶴養 幸雄	公務研究科長
	宮井 雅明	法学部副学部長
	竹内 謙彰	産業社会学部副学部長
	末近 浩太	国際関係学部副学部長
	河原 典史	文学部副学部長
	鈴木 岳海	映像学部副学部長
	平野 仁彦	図書館長
	米山 裕	教学部長
	サトウ タツヤ	研究部長
	小関 素明	衣笠総合研究機構長
	石原 直紀	国際部長
	佐藤 敬二	学生部長
	及川 清昭	キャンパス計画室長
	武田 史朗	キャンパス計画室副室長
	志方 弘樹	財務部長
	山本 修司	教学部事務部長
	木田 成也	総合企画部長
	川口 潔	財務部次長
	赤井 正二	総合企画室長
事務局長	松井 かおり	教務課長
事務局	各務 宇春	教務課長補佐
	白井 文子	図書館サービス課長
	中島 麻恵	図書館サービス課長補佐
	相根 誠	情報システム部長
	藤田 直孝	大学院課長
	本田 容子	大学院課
	植松 幹雄	管財課長
	竹田 佳正	管財課長補佐
	本田 和馬	管財課
	古田 わか奈	管財課
	植木 泰江	総合企画部次長
	五坪 智彰	総合企画課長
	大藪 康成	総合企画課長補佐
	長倉 明子	総合企画課
	堀 麻里子	総合企画課

【2020年までの京都キャンパスプラン策定部会】		
部会長	中村 正	総長特別補佐
部会長代理	赤井 正二	総合企画室長
副部会長	及川 清昭	キャンパス計画室室長
メンバー	米山 裕	教学部長
	サトウ タツヤ	研究部長
	佐藤 敬二	学生部長
	石原 直紀	国際部長
	高嶋 正晴	産業社会学部教授
	小関 素明	総合研究機構長
	石坂 和幸	教学部次長
	浅野 昭人	学生部次長
	川口 潔	財務部次長
事務局長	武田 史朗	キャンパス計画室副室長
事務局	松井 かおり	教務課長
	各務 宇春	教務課長補佐
	辻井 英吾	学生オフィス（衣笠）課長
	片岡 達彦	リサーチオフィス（衣笠）課長
	斎藤 富一	リサーチオフィス（衣笠）課長補佐
	植松 幹雄	管財課長
	竹田 佳正	管財課長補佐
	河内 一泰	衣笠キャンパス事務課長
	五坪 智彰	総合企画課長
	大藪 康成	総合企画課長補佐
	長倉 明子	総合企画課
	堀 麻里子	総合企画課

※上記の構成は2013年度の体制を示しており、構成員・役職は全て当時のものである。

2014年度の検討組織名簿

【京都キャンパス将来構想検討委員会】		【2020年までの京都キャンパスプラン策定部会】	
委員長	中村 正	部会長	中村 正
	市川 正人	部会長代行	赤井 正二
委員	國廣 敏文	副部会長	及川 清昭
	建山 和由	メンバー	森田 真樹
	竹瀨 修		サトウタツヤ
	有賀 郁敏		山本 忠
	文 京洙		石原 直紀
	藤巻 正己		高嶋 正晴
	品田 隆		小関 素明
	松原 洋子		石坂 和幸
	田浦 秀幸		浅野 昭人
	荒木 徳積		川口 潔
	松宮 孝明	事務局長	武田 史朗
	鶴養 幸雄	事務局	松井 かおり
	樋爪 誠		各務 宇春
	竹内 謙彰		辻井 英吾
	君島 東彦		植松 幹雄
	中本 大		竹田 佳正
	中村 彰憲		河内 一泰
	平野 仁彦		五坪 智彰
	米山 裕		大藪 康成
	サトウタツヤ		長倉 明子
	小関 素明		堀 麻里子
	石原 直紀		
	山本 忠		
	森田 真樹		
	及川 清昭		
	武田 史朗		
	志方 弘樹		
	山本 修司		
	木田 成也		
	川口 潔		
事務局長	赤井 正二		
事務局	菊池 ゆかり		
	松井 かおり		
	各務 宇春		
	臼井 文子		
	中島 麻恵		
	相根 誠		
	藤田 直孝		
	本田 容子		
	田中 伸弥		
	植松 幹雄		
	竹田 佳正		
	本田 和馬		
	古田 わか奈		
	植木 泰江		
	五坪 智彰		
	大藪 康成		
	長倉 明子		
	堀 麻里子		

【パブリックスペースおよび交通計画検討作業G】

- グループ長 山本 忠
メンバー 森田 真樹
及川 清昭
武田 史朗
大島 英穂
石坂 和幸
浅野 昭人
川口 潔
川口 博司
塚口 八重樫 文
松井 かおり
各務 宇春
辻井 英吾
曾谷 直樹
植松 幹雄
竹田 佳正
河内 一泰
河内 明子
五坪 智彰
大藪 康成
長倉 明子
堀 麻里子
桂 良太郎
笹本 賢吾
佐藤 由紀

専門委員
事務局長
事務局

オブザーバー

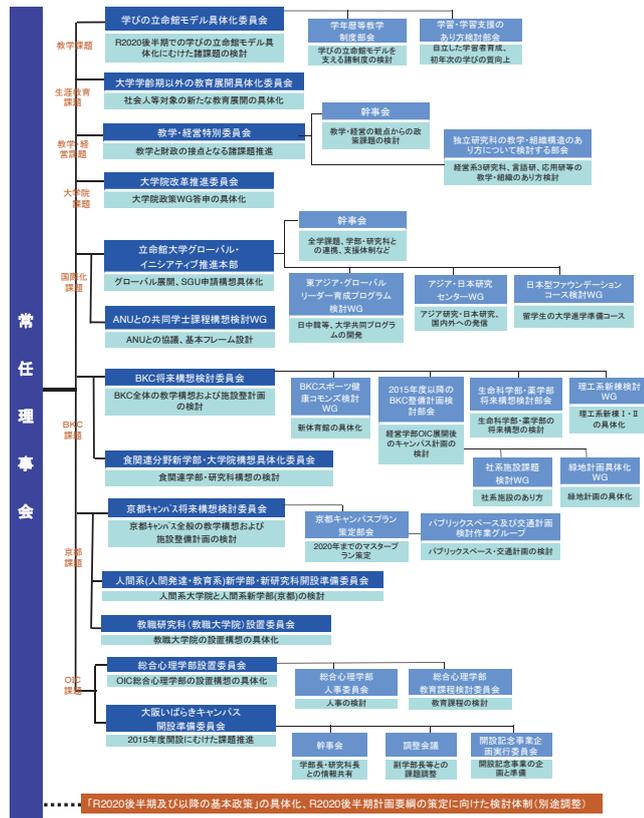
- 学生部長
教学部副部長
キャンパス計画室長
キャンパス計画室副室長
国際部事務部長
教学部次長
学生部次長
財務部次長
理工学部教授
総合企画室副室長
教務課長
教務課
学生オフィス
学生オフィス
管財課長
管財課長補佐
衣笠キャンパス事務課長
衣笠国際課長
総合企画課長
総合企画課長補佐
総合企画課
総合企画課
学生部副部長
笹本設計事務所
生協常務理事

【若手職員懇談会】

- 参加者 下井 康弘
山本 有香
森本 悠
小倉 智恵
白藤 遼太
森川 渚
田中 伸弥
今川 新悟
奥田 修子
豊島 拓
中嶋 友樹
北爪 裕
兼子 美咲
堀井 崇道
切石 麻美
本山 茂伸
- 以下、懇談会事務局
建山 和由
及川 清昭
菊池 ゆかり
竹田 佳正
五坪 智彰
長倉 明子
堀 麻里子
植田 依子

- 産業社会学部事務室
文学部事務室
国際関係学部事務室
映像学部事務室
教務課
言語教育企画課
衣笠大学院課
教育開発支援課
学生オフィス(衣笠)
学生オフィス(衣笠)
スポーツ強化オフィス(衣笠)
図書館サービス課
情報システム課
情報基盤課
高大連携課
管財課
- 常務理事(教学担当)
キャンパス計画室長
教学部次長
管財課長補佐
総合企画課長
総合企画課
総合企画課

【参考資料】2014年度後半期の検討・推進体制(2015年1月以降)(2015.1.26時点)



※上記の構成は2014年度の体制を示しており、構成員・役職は全て当時のものである。

2015 年度の検討組織名簿

【京都キャンパス将来構想検討委員会】		【2020年までの京都キャンパスプラン策定部会】	
委員長	市川 正人	副総長	中村 正
副委員長	中村 正	学長特別補佐	及川 清昭
委員	渡辺 公三	副総長 (2015.7～)	石原 浩澄
	建山 和由	常務理事(企画担当)	メンバー
		総合企画室長	サトウタツヤ
	宮井 雅明	法学部長	山本 忠
	有賀 郁敏	産業社会学部長	羽谷 沙織
	文 京洙	国際関係学部長	大島 英徳
	藤巻 正己	文学部長	八重樫 文
	品田 隆	映像学部長	高嶋 正晴
	西 成彦	先端総合学術研究科長	小関 素明
	田浦 秀幸	言語教育情報研究科長	石坂 和幸
	荒木 穂積	応用人間科学研究科長	浅野 昭人
	松宮 孝明	法務研究科長	志方 弘樹
	鶴養 幸雄	公務研究科長	相根 誠
	高橋 直人	法学部副学部長	武田 史朗
	竹内 謙彰	産業社会学部副学部長	松井 かおり
	星野 郁	国際関係学部副学部長	各務 宇春
	中本 大	文学部副学部長	辻井 英吾
	大島 登志一	映像学部副学部長	米川 義人
	二宮 周平	図書館長	本田 和馬
	徳川 信治	教学部長	鳥井 眞木
	サトウ タツヤ	研究部長	細野 由紀子
	小関 素明	衣笠総合研究機構長	五坪 智彰
	羽谷 沙織	国際部副部長	大藪 康成
	大島 英徳	国際部事務部長	長倉 明子
	山本 忠	学生部長	谷口 優美
	森田 真樹	教職研究科(教職大学院)(仮称)	堀 麻里子
		設置委員会事務局長	
	石原 浩澄	教学部副部長	
	及川 清昭	キャンパス計画室長	
	武田 史朗	キャンパス計画室副室長	
	志方 弘樹	財務部長	
	山本 修司	教学部事務部長	
	木田 成也	総合企画部長	
	森山 哲朗	財務部次長	
	浅野 昭人	学生部次長	
	相根 誠	衣笠キャンパス事務局長	
	八重樫 文	総合企画室副室長	
	石坂 和幸	教学部次長	
	松井 かおり	教務課長	
	各務 宇春	教務課長補佐	
	藤田 直孝	大学院課長	
	山菅 善樹	大学院課長補佐 (2015.7～)	
	米川 義人	管財課長	
	本田 和馬	管財課長補佐	
	近藤 茂生	学術情報部次長 (2015.7～)	
	嶋津 雅彦	図書館サービス課長	
	柴田 直人	情報システム部次長	
	細野 由紀子	衣笠リサーチオフィス課長	
	五坪 智彰	総合企画課長	
	大藪 康成	総合企画課長補佐	
	長倉 明子	総合企画課	
	谷口 優美	総合企画課	
	堀 麻里子	総合企画課	
事務局長		事務局長	
事務局		事務局	

※上記の構成は2015年度8月時点の体制を示しており、構成員・役職は全て当時のものである。

【キャンパス計画室会議】

建山 和由	常務理事(企画担当)・総合企画室長
及川 清昭	キャンパス計画室長
武田 史朗	キャンパス計画室副室長
志方 弘樹	財務部長
木田 成也	総合企画部長
森山 哲朗	財務部次長
米川 義人	管財課長
五坪 智彰	総合企画課長
大藪 康成	総合企画課長補佐
堀 麻里子	総合企画課
植田 依子	総合企画課

【キャンパス計画及びキャンパス整備担当】

■キャンパス計画室

室長	及川 清昭
副室長	武田 史朗
	大藪 康成
	堀 麻里子

■総合企画室/総合企画部/総合企画課

室長	建山 和由	常務理事(企画担当)
副室長	八重樫 文	
部長	木田 成也	
課長	五坪 智彰	
[キャンパス計画室担当]		
課長補佐	大藪 康成	
	堀 麻里子	
	植田 依子	
[京都キャンパス担当]		
	長倉 明子	
	谷口 優美	
	中島 万右美	
[びわこ・くさつキャンパス担当]		
課長補佐	森本 康太郎	
	伊藤 充代	

■キャンパス計画室会議記録

2012年度	第8回	2013年3月28日
2013年度	第1回	2013年4月9日
	第2回	2013年4月30日
	第3回	2013年5月14日
	第4回	2013年5月28日
	第5回	2013年6月11日
	第6回	2013年6月25日
	第7回	2013年7月9日
	第8回	2013年7月23日
	第10回	2013年9月3日
	第11回	2013年9月26日
	第12回	2013年10月10日
第13回	2013年10月17日	
第14回	2013年10月31日	
第15回	2013年11月21日	
第16回	2013年12月5日	
第17回	2013年12月19日	
第18回	2014年1月16日	
第19回	2014年1月28日	
第20回	2014年2月21日	
2014年度	第21回	2014年3月20日
	第1回	2014年4月15日
	第2回	2014年5月13日
	第4回	2014年6月10日
	第5回	2014年7月1日
	第6回	2014年7月15日
	第10回	2014年10月7日
第13回	2014年11月18日	
第15回	2015年1月13日	
第16回	2015年1月27日	
2015年度	第19回	2015年3月17日
	第1回	2015年4月14日
	第2回	2015年4月28日
	第4回	2015年6月2日
	第7回	2015年7月14日
第9回	2015年9月8日	

■財務部/管財課

部長	志方 弘樹
次長	森山 哲朗
課長	米川 義人
[京都キャンパス担当]	
課長補佐	本田 和馬
	眞鍋 誠
	樫野 篤基
[びわこ・くさつキャンパス担当]	
課長補佐	安原壮一
	本山茂伸
	川登一幸
[大阪いばらきキャンパス担当]	
課長補佐	増田 幸治
	平田 りえ
	古澤 秀晃

※キャンパス計画室は建築、都市計画およびランドスケープデザインを専門とする教員2名と、担当職員2名を実働の中心として総合企画部、財務部、その他学内関係各部署を横断した体制でキャンパス計画の策定のみならず、関連する各種議論を推進・支援する活動を行っています。(2012年11月1日設置)

※上記の構成は2015年度10月時点の体制を示しており、構成員・役職は全て当時のものである。

編集後記と謝辞

キャンパスマスタープラン 2015 の策定を終えて

立命館大学では 2011 年に、大阪いばらきキャンパス（OIC）の基本構想を取りまとめ、同時に既存 2 キャンパスにおける再整備計画を始動しました。各キャンパスにおける教学改革の検討と合わせ、それらを実現するための中長期的なキャンパス将来像についての検討が求められ、2012 年 11 月に、キャンパスマスタープランの策定や各種施設整備計画のデザイン監修などを専門的に担うことを目指し、「キャンパス計画室」が設置されました。その後、キャンパスマスタープラン策定に向け全学的な検討体制を整え、2013 年に京都キャンパスでは「2020 年までの京都キャンパスプラン策定部会」、また、びわこ・くさつキャンパス（BKC）では「2015 年度以降の BKC キャンパス整備計画検討部会」を立ち上げ、キャンパスマスタープランの策定に向けた本格的な検討や議論を開始し、キャンパス創造を推進してきました。

今次の「キャンパスマスタープラン 2015 Ver. 1」においては、検討の前提となる様々な計画条件や現状データ等を整理するとともに、中長期的な視点を踏まえながら各キャンパスの特性に応じた課題解決に向けた方策と将来の空間像を示しています。キャンパスマスタープランは、元来、アカデミックプランの変化に柔軟に対応して更新していくべきものであり、今後も継続して検討を積み重ねていく必要があります。

また、キャンパスマスタープランの実現に際しては、個別具体的なアクションプランが目標としているキャンパス像に沿ったものであるかについて、整備実施の優先順位や緊急性、財源の確保なども踏まえながら実効性を的確に評価する必要があり、そのためには、継続的な計画検討体制の強化も重要な課題となります。

「キャンパスマスタープラン 2015 Ver. 1」の策定に際しては、各学部、研究科・機構をはじめ、将来構想検討委員会や部会、作業グループ、ワークショップ、懇談会、ヒアリング等などを通じ、多くの教職員、学生の参画を得ながらご協力を頂きました。また、他大学の先駆的なキャンパスマスタープランの策定事例を参考とさせて頂き、実際に視察やヒアリング等において貴重なご助言を賜りました。ここに、ご協力を頂きましたすべての皆様方に深く感謝申し上げます。

立命館のより良いキャンパス空間・環境の創造に向けて、今後とも多くの課題について継続的に検討を重ね、現状に立ち止まることなく、従来の枠組みや手法を越えて、様々な可能性について発想し提案を重ねていきたいと考えています。そのためには、より多くの皆さんの参画・協働と議論が肝要となります。高邁な理想の実現に向けてこれからも積極的な取組みを継続して進めていくことが大切になると考えています。

2016 年 1 月

キャンパス計画室長
及川清昭

所在地・交通案内

立命館大学 朱雀キャンパス

〒604-8520 京都市中京区西ノ京朱雀町1

URL <http://www.ritsumeijp>

- JR・地下鉄東西線 二条駅 徒歩約2分
- 京都市バス・JRバス「千本三条・朱雀立命館前」下車すぐ
- 阪急電鉄 大宮駅 徒歩約10分

立命館大学 衣笠キャンパス

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1
TEL.075-465-8149

URL <http://www.ritsumeijp>

- JR・近鉄 京都駅 市バス・JRバス、約35分「立命館大学前」下車すぐ、「衣笠校前」下車、徒歩約10分
- JR 円町駅 市バス、約10分「立命館大学前」下車すぐ、「衣笠校前」下車、徒歩約10分
- 阪急電鉄 西院駅 市バス、約20分「立命館大学前」下車すぐ、「衣笠校前」下車、徒歩約10分
- 京福電鉄 西院駅 「帷子ノ辻」乗り換え約25分、「龍安寺」から徒歩約6分

立命館大学 びわこ・くさつキャンパス (BKC)

〒525-8577 滋賀県草津市野路東1-1-1
TEL.077-561-2617

URL <http://www.ritsumeijp>

- JR 南草津駅 近江鉄道バス「立命館大学行き」または「立命館大学經由飛鳥グリーンヒル行き」にて約15分、「立命館大学」下車

立命館大学 大阪いばらきキャンパス

〒567-8570 大阪府茨木市岩倉町2-150
URL <http://www.ritsumeijp>

- JR 茨木駅 徒歩約5分
- 阪急電鉄 南茨木駅・大阪モノレール 南茨木駅 徒歩約10分
- 大阪モノレール 宇野辺駅 徒歩約7分

立命館アジア太平洋大学 (APU)

〒874-8577 大分県別府市十文字原1-1
TEL.0977-78-1111

URL <http://www.apu.ac.jp/>

- JR 亀川駅 大分交通バス、約13分「立命館アジア太平洋大学(終点)」下車
- JR 別府駅 大分交通バス、亀の井バス、約35分「立命館アジア太平洋大学(終点)」下車
- 大分空港 空港リムジンバス「エアライナー」、約30分、亀川にて乗り継ぎ、反対車線の 大分交通バス停、古市約13分「立命館アジア太平洋大学(終点)」下車

立命館中学校 立命館高等学校

〒617-8577 京都府長岡京市調子1-1-1
TEL.075-323-7111

URL <http://www.ritsumeijp/fkc/>

- JR 京都線 長岡京駅 徒歩約15分
- 阪急電鉄 西山天王山駅 徒歩約6分

立命館宇治中学校 立命館宇治高等学校

〒611-0031 宇治市広野町八軒屋谷33-1
TEL.0774-41-3000
URL <http://www.ritsumeijp/ujc/>

- 近鉄 大久保駅 バス約10分
- JR 奈良線 新田駅 徒歩約20分
- JR 奈良線 宇治駅 バス約15分
- 京阪電鉄 宇治駅 バス約20分

立命館慶祥中学校 立命館慶祥高等学校

〒069-0832 北海道江別市西野幌640-1
TEL.011-381-8888

URL <http://www.spc.ritsumeijp/>

- JR・地下鉄 新さっぽろ駅 通学バス約15分

立命館守山中学校 立命館守山高等学校

〒524-8577 滋賀県守山市三宅町250番地
TEL.077-582-8000

URL <http://www.ritsumeijp/mrc/>

- JR 守山駅 近江鉄道バス約8分

立命館小学校

〒603-8141 京都市北区小山西上総町22
TEL.075-496-7777

URL <http://www.ritsumeijp/primary/>

- 地下鉄烏丸線 北大路駅 徒歩約3分
- 京阪電鉄 出町柳駅 市バス、約13分「北大路バスターミナル」下車、徒歩約3分



京都キャンパスマスタープラン 2015 Ver.1

発行日

2016年1月

企画・編集

京都キャンパス将来構想検討委員会

2020年までの京都キャンパスプラン策定部会

学校法人立命館 キャンパス計画室

学校法人立命館 総合企画課、管財課

制作協力 ささもと建築事務所

発行

学校法人立命館

〒604-8520 京都市中京区西ノ京朱雀町1



+R 未来を生み出す人になる。

立命館大学